

私の活動によつて統一されます。自己制止の意志も發達して、善行爲をなるべく反覆練習せんとします。此際道德的知識も感情も進んで來ますから、自ら判断せしめて、自己の意志によつて善行爲を反覆せしめて、出來得る限り品性の陶冶方面に努力すべき時であります。

第四高等科

此時代は、自我も非常に成長して、他律に對して反感を持つて來ます。凡てを、自己の意識によつて自己を表現せんとする時代であります。而かもその自我は、他我との合一を自覺して團體我に抱擁される事を喜ぶ時代であります。益々自發的に自治的に自己を律するは勿論、學級、學年、學校我と自我を合一せしむる機會を作つて、その方向に努力せしむべきであります。引いては、國家的、世界的にまで自我の擴充成長を圖るべき時であります。

第三節 國民性、國民道と訓育

我國民の先天的素質を環境との合成によつて、感謝性、敬虔性、現實性、淡泊性等の長所を持つ國民であります。一面には、依順性、排他性、模倣性、速達性などの短所が醸されて居ります。

世界の活舞臺に立つ、むしろ世界創造者たる國民としては、この長所を益々發揮すると共に、また短所をも、ある程度まで補成せなければならぬと思ふのであります。もし、この短所が、如何に教育上訓育努力してもその成績の見るべきものがないものとしたならば、もはや、止むべきものであります。併し、此短所たるや、自然に任して來たため換言すれば、いまだ自我の自覺の足りない生活の上に表はれた現象に外ならぬのであります。ます／＼、自我の意識が濃厚になればなるだけ、この缺陷は、順次のぞかれるものと信するのであります。

現在に於ける我國民道は、本來のものに對して各種の影響を受けて居ります。支那文明、印度文明、西洋文明がそれであります。

我國本來の國民道は、愛敬を根柢として、差別的平等、所謂道德的自由、道德的平等によつて、祖先の靈を尊び君國のために自己犠牲となる道德が醸成されたのであります。夫と婦、師と弟、資本主と労働者等すべて上下關係の道德に於て成功したのであります。それと反對に、その弊として左右の關係たる、自己と同等の資格のあるものゝ關係に於ての生活に短所をあらはして居ります。君のために、親のために自己犠牲になる事に成功したる日本道は、社會團體のために自己犠牲となる點が缺けて居ります。

自我の成長は、社會我、團體我の中に於て成長し其處に個人の自我は社會我にまで覺醒されて自己犠牲、即ち自我の要求の遂行に努力するものでありますが、從來我日本道は、この點に於ていまだ不徹底のものであります。

之とても、道德教育指導助成の根柢が自我の成長を凝視めたものでなかつた結果であります。今後、自我の成長への教育、訓育によるときは、個人の自我は、家庭我國家我と合一して、自我の要求によつて、君國のため父母のため自己犠牲に満足した如く、社會我と合一して、自我の要求によつて社會のために、自己犠牲をなして満足すべき筈であります。從來の我國の道は、すべて上下關係によつて、解決されて來ました。併し、それは、あくまで愛の結合による上下關係であります。故に、至情に外ならぬもので、上下差別超越した、自我の要求の顯現と言つてよいのであります。なほ、今後特に補成方面として吾人の努力せんとする社會への貢獻も、左右平等を超越した自我の要求の顯現でなければならぬと信ずるものであります。

吾人の努力せんとする自我の成長への訓育は、平等差別を超越した、むしろ相互に内在した自我の要求への努力であります。從來の差別的長所を平等的に引き直す必要もなければ、また將來の平等的短所を危険視する必要はありません。飽くまで、差別即ち平等であり、平等即ち差別である如

く助長補成せなければならぬのであります。それは、自我本然の姿であるからであります。

以下自我の平等方面、又は差別方面の言葉は用いて行きますが、それは私の説明の便宜上のものである事は言う迄もありません。

第四節 現代生活と之に適應せる訓育

我國の現代生活は、道德的に觀察して、誠に、危機に際會して居ります。前に述べた如く、優秀の點を以て、發達して來た自我の差別方面を誤つた道德觀として、之を嫌忌し、之を破壊せんとして居ります。それと共にいまだ眞の自我の自覺に立つた平等に目醒めず惡平等を主張して、權利の主張のみ強く、義務の念全く地に墜ちて居ると言ふ次第で、このまゝ過すならば他國の例をそのままに演ずることになりはしないかと憂慮に堪へぬ次第であります。

外國に於て、自由思想が旺盛な事は、宗教の力が非常に援助してありますから、尤も正しき方面に發達しています。我國に於ては、現在宗教の力は、外國のそれ程には、ありませんが、我國家の組織成立が、尤も此思想を正しく美しく成長さすに尤も偉大なる力を持つておる次第であります。此思想に力を藉りて、吾々實際家は、此時代に適應したる訓育を施して、以て今日の危機を救はなけ

ればなりません。

なほ茲に、國家の危機に際會した原因は經濟問題であります。十八世紀以來の科學進歩の結果、殖産興業に非常な發達をして來ました。それにつれて、需要も増加して、その生活程度が向上しました。茲に資本主と労働者と分離する事になり、貧富の差が甚しくなつて來た譯であります。

此様な状態を呈している世界の舞臺へ、我國が、長年月の鎖國主義を徹して、交通する事になつたのであります。我國も、自國の貧弱なる事を自覺して、此方面に全勢力を注ぎました。その結果物質萬能主義、拜金主義ならざるを得なかつたのであります。自我の要求を無視してまでも、物質的生存競争に生きんと努力する様になつて來たのであります。

殊に世界戦争によつて、成金者が生じました。而かも夫等の人々は、自我の成長せざる人々であつたがために、單に自己の奢侈贅澤に蕩盡して、何等、國家のためにも、社會のためにも貢獻する處なく、戦後は、産業不振の結果、傳統的奢侈贅澤は、直に生活難を訴えて、失業者生じ、白晝盜賊往行するの現況を呈して居ります。實に寒心に堪えない次第であります。吾人不肖の身を以て、新時代に適應せる訓育を主張するのも憂國の情熱に發露するものであります。

第五節 自我の成長に即したる訓育

私は、私の主張せんとする訓育の出發點を求めするために、各種の方面から、その歸結點を探しました。それは、謂うまでもなく、自我の發動によつて、創造成長にまつ訓育でありました。まだまだ私の出發點を固めるためには、各種の方面から歸結點を求めて來なければなりません。併し、紙數に制限されて、一先づ茲で打ち切る事としなければなりません。甚だ遺憾でありますが止むを得ません。

私は、茲で、自我の創造成長を凝めての訓育に就て、便宜上、簡單に、自我の要求の上下關係、左右關係を再び考へて見たいと思ひます。

人が眞の自覺に立つた時、上下の關係と左右の關係は、一つに統一さるべきものであると信じます。それが自我の本然の姿であります。もし、差別のみにこだわるか、平等のみに偏したとするならば、それは、まだ、徹底したる自我の自覺ではありません。

然るに現代の生活は、一方差別的な生活は、長所と認むべきものであります。それとても未だ自我の自覺に立つての活動ではありません。往々無自覺的に、傳統的に活動して居りますが故に

人格の尊嚴を害して、服従を強いる様な傾向があります。その結果、稍もすると、差別生活に對して反感を持つものが生じて前年の如き大事件が引續き起るのであります。

而かも、一方に於て、淺薄なる平等的生活が、猛烈なる勢を以て傳播浸潤しました。けれ共、之とても、自我の基調に立つていない生活であるが故に、差別の方までも無視して、惡平等と化し、自治は利己とはき違えられ、放縱となり個人主義と化し、團體を無視する事になつて居ります。

幾度か繰り返しますが、今日は曠古の道德上難局に遭遇して居ります。此時代をして飽くまで誤らざらしめんがためには、この差別と平等を超越した、また相互に内在した自我の自覺をよび起こさなければなりません。その根本の上に目醒めて、平和な世界を創ることに努力しなければなりません。

差別道德！ それは眞の自我が要求する人の道ではありません、平等道德！ 之も自覺した自我の要求する道德ではありません。平等とも差別とも見分けのつかない道德、差別の中に自由な平等のある道德、平等の中に自由な差別のある道德、そこをねらつて訓育にあたらねばなりません。私の訓育は茲が出發點であります。而かも、茲が歸着點であります。それがためには、各種の方便の上に立ちます。差別的指導もとれば、平等的指導を採ります。而しそれは、いつも、之を超越した

自我の顯れの要求であり、それへの到達であります。從來の如く、一方を無視した、または、一方を輕視したものは、その助成に於ても、全く趣を異にしているものである事は、言うまでもありません。

第六節 自我の成長に即した訓育の助成方面

自我の成長に即したる訓育に於ては、飽くまで自我の尊嚴を信するものであります。併して、如何なる方面を指導する事によつて、兒童の自我の成長を圖る事ができるか。その自我の成長は、個人の上に、家庭の上に、社會の上に、國家の上に世界の上に、平和な實現ができ得るか。之を説明する上に、我國に於て、而かも現代に於て、便利なる自我平等方面と差別方面に分つて便宜上述べて行きたいと思ひます。

第一は、自我としての差別方面、人としての縦の生活で、之は我國の長所とする處でありまして、今後訓育上助長すべき方面だと考へるのであります。

第二は、自我としての平等方面、人としての横の生活で、之は我國の短所とする處であります。今後訓育上補成すべき方面だと考へるのであります。勿論この分類は大綱でありますから、長所の

裏には短所がひそみ、短所の表には長所が宿つてゐる事は既に述べた通りであります。而して、上下の生活に於ては、感謝生活でありまして、之をなほ細別いたしますと、

- 1、敬虔生活
 - 2、至情生活
 - 3、服従生活
 - 4、感激生活
- であります。

左右の生活に於ては、相當生活でありまして、之をなほ細別しますと、

- 1、自律生活
 - 2、創造生活
 - 3、剛健生活
 - 4、共存生活
 - 5、國際生活
- であります。今之を一覽表にすれば次の如くなりまして、之から各種の施設が生れて訓練づける課

であります



第十六章 施設の根本義並に助成の根本義

甲、施設の根本義

第一節 施設は自我の自律生活にまで

従來の訓育は、命令又は法則を以て、全く部分的に活動せしめていました。けれ共、眞の訓育は兒童の自我の尊嚴を認めて、なるべく、兒童自ら内省し、自己の規範によつて、自己が活動の方法を攻究し、之を實現する様施設せなければなりません。幼少の頃より、單なる他律的に、干渉主義によつて、訓練づけられたるものには成人の後にも、なほ傳統的道德に盲從して満足せるものが尠くないのであります。その人には、永久に發展がないばかりか、かゝる人々によつて形作らる社會は、進展がありません。眞に活動があり發展あらしめるためには、兒童の時よりして、自我の眞實に立つて、自律的に規範的に活動し得る様施設し、常に自律生活にまでの習慣をつくる事に努力すべきであります。

兒童の生理的發達、並に、心理的發達、及び、自我の成長を觀るとき、將來永遠の努力が想像されます。成長發展までには、餘程の距離のあるものである事が窺はれます。茲に於て、往々にして自律生活にまでの施設を呪うものが生れて來るのであります。私の「自我の創造成長に即したる」訓育は、之迄數度述べたる如く、兒童を目して自我の成長終局のものとしての訓育ではありません。その過程にあるものに對して、より成長を標幟として進むものであります。が故に、一面には、過程中の、換言すれば、成長しない不完全の自我に對しても、貴い價值を認めるものであります。私の訓育の全般を掩うものは、自我の尊嚴であります。人格の尊嚴であります。母親が嬰兒を訓育するのも自我の尊嚴から出發すべきものだと言張るのであります。學校訓育は勿論のこと、大人訓育として、社會に於ける各種の施設までも、人格の尊嚴の上に立つべきものだと言するのであります。

だから、私の訓育は、尋常一學年に於ける、如何にも微少なる自我の萌芽も、尤も貴重なるものとして尊重し、之が啓培成長に勉め、その成長を楽しむものであります。かく爲す事のできる施設でなければなりません。往々にして、従來は、教師父母の自我の成長を根柢として、兒童の自我の萌芽を斃殺して、助成者の思う通りに、強迫してまでも、訓練づけようとしていました。之は精神

的の殺人であります。かゝる施設で努力しても、あまり大した悪事をしない小心翼翼たる人間はできましようが、到底大發展的の大人物は、出来ないであります。

兒童として、自我の要求により、自律的に活動せしめる施設によつて、兒童が活動した場合には、またでき得るだけ自ら批判し反省し、自ら次への努力を爲し得る様施設しなければならないのであります。一面に於ては、教師が助成してやる場合には、よしその結果が不良に終つたとしても、その眞實の表現は及ぶ限り満足の意を表してやる事であります。兒童の自我の活動を、直ちに教師の自我によつて彼を批評すること、殊に冷評することは、往々にして、誤謬があるからであります。彼等をして自亡自棄に陥らしめる事があるからであります。そうなると兒童の自律性は漸次萎縮して、自我の成長の態度が失はれてしまいますから餘程注意すべき事であります。低子年ほどこの點に留意せなければなりません。

兒童が、眞實の態度に立つて活動しながら、而かも、大人から眺めて不良の結果を醸すものがあるならば、所謂「兒童に一任して見たが、矢張り結果がよろしくない」と嘆かなければならぬとしたならば、それは、いまだ教師の要求まで、彼等の自我が成長していない證據であります。一面から言へば、教師に於て、彼れ兒童の自我の成長向上を圖らなければならぬ責任が明示されたものと言ふ事ができます。だから、その結果に就て、彼等を叱責するなどは、甚しい誤謬であります。さればと言つて、豫め「かくすべし」「かくすべからず」と、一々指導して置くならば、その結果は、あるいは、良好であるかも知れません。よしそれが結果に於て良好であつたとしても、過程に於て何等の價値のないものであつて、かゝる施設は採るべからざるものであります。

幼年兒童を自律的に導くためには、各種の方面に努力を要するものであつて、施設の上にも充分の注意を要するものであります。幼年のものほど他律的に活動する場合があります。併し施設の上には注意して、他律のための他律ではなく、飽くまで、兒童の自我の自覺をはかる爲めの他律であることを體得し、父母教師の命令なるが故に、單に之に盲従するものではなくて、自己の力相應に、當然實行すべきものなるや否を深察する習慣を訓致して、その體現を圖り得る様施設せなければならぬのであります。而して漸次自律的に自律活動をなす事ができ得る様施設する事が第一であります。

第二節 施設は自我の社會連帶生活にまで

自己の能力の最大發展と共に、他人に對する尊敬を意識して、自主自立によつて、眞の協同をな

し得る様施設せなければなりません。從來階級的差別的施設はある方面にはできていたが、相互扶助的精神に基く施設は極めて尠かつたのであります。

自我の成長に即したる訓育に於ては、個人の人格に絶對價値を置くものであります。その個人とは社會と連帶生活を爲す人格者であることは言うまでもありません。何等孤立的個人主義を主張するものではありません。

一體、人間は根本的に、肉體的にも精神的にも社會團體との協同生活なしに、人格の完成は望まれないのであります。その個人の人格は社會によつて始めて實現されるのであつて、社會を離れて何處にも實現の境地がありません。要するに、團體を離れての人間生活は、あり得ないものであります。只從來の道德に於ては、家庭を尊重し、個人を輕視し、人格を認容しなかつた點に於て缺陷があり、なほ、社會道德の方面に不徹底のものがありました。新道德に於ては、個人を重視し、その個性を尊重すると同時に、團體をも重視するものであります。

社會連帶の生活を徹底せしめるためには、自立自營、公共、協同の精神を涵養すべき施設を爲さねばなりません。從來に於ては、この方面の施設に尤も缺けて居つたのであります。從來團體に於ては、所謂專政制度であつて、一二のものに團體の全部を一任し他のものは、無條件的に絶對的に

盲従してしたのであります。だから、自然に、團體の感恩も尠く、團體に向つて奉仕する精神も起らず、團體員の人々と協同するが如き必要もなかつたのであります。之は、仁愛が根本となつてゐる家族制度を亂用した弊害であります。

團體生活を爲すためには、先づ自立自營ができなければなりません。自ら立案し自ら選擇して自ら實現する事ができなければなりません。それが出来なければ、到底社會に貢獻するなどは思ひもよらぬ事であります。

次には、團體生活を爲す爲めには、幾ら自立自營ができたとしても、全く孤立してのものではないのであります。多數の人々と飽くまで歩調を合し、一つの目的に向つて努力するのでなければなりません。自己の意志を尊重すると共に社會の意志を尊重して、あくまで、その實現を圖らねばならないのであります。

次には、奉仕の精神の發揮であります。自主獨立によつて協同が可能であると共に、自己の屬する學級、學年、學校、家庭、國家、世界への自己犠牲的奉仕、貢獻がなければならぬのであります。幾ら自立自營でさへその上協同の精神ができたとしても、常に私利私慾に走り、何等社會の事に對して自覺的の同情がなかつたならば、その社會は、發展する事ができません。

自己の屬する團體は、夫等の人々によつて隆盛ならしむべきであります。團體の隆盛なる事によつて、始めてそれに屬する人々の發展があるのであります。團體の發展を希はぬものは自己の發展を希はぬものとの歸結になります。

之等社會連帶生活の精神を飽くまで發揮する事ができる様、各種の施設をなさなければならぬのであります。而して夫等は、單に盲從的のものではなく、止むに止まれぬ自我の要求であるべき様自我の成長を圖る事が肝要であります。

第三節 施設は自我獨自生活にまで

従來の訓育に於ては、凡てを萬人共通の型に入れんとする一齊訓練にのみ努力して、甚しく兒童の獨自性を没却してしまつたのであります。

人生の目的は、自己の特異性をして、益々善良なる方向に伸展せしめ、健全なる特異性のある人物となり、個人のために團體のために貢獻することにあります。教育は夫れまでの目的であり、訓育はその目的を達するための一手段であります。だから、訓育に於ても、個人の人格的獨自性の涵養伸展に努力すべきものであります。

人は、根柢に於て、普汎性と特殊性とを有して居ります。教育は、この獨自性を發展せしめるものであります。それによつて自己の伸暢は勿論、自己の屬する團體の發展を期する事ができます。故に獨自性を尊重する事は、人格的獨自性である以上、共通性の陶冶を排斥して、團體的訓育を呪うものではありません。従来よりも、より多く、兒童の獨自性に立脚したる訓育に努力する事を目的とするものであります。

かく、獨自性の發現に努力する施設は、その自我の本質たる自由を認容する事であつて、自學自習の習慣を養い、自治的實現を爲さしめ、能力を陶冶し創造的人格者を創る事となります。此見地に立つて従來の訓育を眺めるとき、相容れざる二つの流があります。一は、個性の尊重だと言つて全く社會からかけ離れた、絶對の個人主義の孤立的自己満足の人間を創つて、それで訓練し得たりとしているものがあります。之は心理的個性であつて、文化價值を持つものではありません。個性の尊重とは、他人の代る事のできない高價なる長所を發揮せしめる事であり、換言するときは兒童の價值的獨自性を發展せしめることでもあります。獨自性の中に普汎を見出し、普汎の中に獨自を見出さすべき施設をするべきであります。それが個人に對して、團體に對して最高善となるのであります。團體内の多數が、各自の人格的獨自性を發揮する事によつて、夫等の人々によつて作ら

れている團體は發展して來るのであります。

一は、獨自性尊重を呪ひながらも、その實際に於ては、校訓とか、訓練要目とか、規定とかによつて、凡ての兒童を一齊に同様に創り上げんとしてその個性を殺す施設であります。之は全く貴重なる獨自性を殺し、高價なる獨自性を全部放棄せしめて、形式的に、規律的に、器械的に、一齊訓練を爲し、全く人間性を枯渴せしめているものであります。

普汎性を伸ばす事も訓育上の一の仕事であります。その普汎性なるものは、別にあるものではなくて、獨自性の内に存在するものであります。ある意味に於て、獨自性即普汎性であります。獨自性を通じてでなければ普汎性の指導はできないのであります。從來の施設は、同一の型に全部はめてしまふと言ふ施設によつて普汎性の涵養がされて來ました。それは、獨自性を無視した器械的の抽象的の、活動性のない人間が作られたのであります。今後の訓育の施設は、同一の型に作り上げるためではなく、特殊性を發揮し創造性に立つて一般性が涵養される施設をせねばならないのであります。

第四節 施設は自我の創造生活にまで

前節に述べた如く、從來の訓育は、凡ての人を、同一の型に入れて、同一の人間を創らうと努力しました。その結果、大體同一の人間はできたが、さて、器械的の働きのない窮屈な人間になつてしまつたのであります。

同一の型に入れてしまふと言ふ事は、自我の發動を免るさなむと言ふ事でありませぬ。自我の成長指導が教育であるにも拘らず、自我にふれてゐるか否かは、すこしも構はずに努力したのであります。兒童の内心より導く事を度外視し、少しも自己を創造さそうとはしなかつたのであります。従つて凡ての事は壓制的強迫的に行はれたのであります。兒童が自己獨特の判斷は、家庭に於ても、學校に於ても非常に嫌はれたのであります。それで、兒童は、全く創造の機會は與へられなかつたのであります。何等の暗示なく刺戟なき處に、兒童の獨創力は漸次消失しました。それが因襲的に大きく言へば遺傳的に日本人は創作のできない國民などとまで考へられたのであります。

眞の道徳は、積極的に自己の努力によつて、自己の長短を批判し、よりよき自我の成長をはかり清き快樂や高き幸福を増進すると共に、一般文化の向上へ努力する、創造的積極的態度に立つて、自己の完成に努むることでありませぬ。換言すれば、自己の獨自的天賦を以て、單に自己一人の向上發展を自然とせず、一般民衆の幸福増進のために努力せんとする價値のために、自己獨自の價値創

造を爲すべきであります。而して創造態度とは、よりよく生きんとする強烈なる意志と之を高潮繼續する旺盛なる感情とを要します。

創造主義に立つ訓育に於ては、兒童を強迫して教師の理想とする方向へ引きつける事はよろしくない。兒童は獨目的の人格者であり創造者であります。自分の立てたる目的により、自分の計畫したる方法によつて、新しき自己を創造し、之を體現せしめねばならないのであります。之が容易なる様施設せなければならぬのであります。而して、情意の自由なる活動によつて新しき自己を表現さす事が肝要であります。

眞に創造的態度に立つとき、積極的に自己の缺陷長所を發見し、之を批判します。少くとも自己を反省し、よりよき自己に至らんとする端緒を開きたる時が、自覺生活の第一歩であります。此自覺的生活が愈強烈となり深刻となり、彼岸に到達せざれば止まない態度となつたときがそれであります。

眞に自己を尊重し、眞剣なる態度となつて、自己の短所を補給し、長所を發揮し益自己の價値の増進を圖らんとする熱烈なる生命の創造力を養成しなければならぬのであります。此態度をつくるに適したる施設が肝要であります。従來の、一定の人間を造らうとする如き計畫は、新時代の訓

育としては全く採らざる處であります。

創造的訓育に於ては、その指導が、兒童の領分にまで侵入してはならない事は言うまでもない事であります。勿論小學校に於ては完全なる創造訓育は望む事はできないものでありましようけれども兒童の成長に應じた程度に於て、各個人の獨自性に立つて創造せしめねばならないのであります。

創造を加味する訓育に於ては、個人主義に流れ易いのであります。また、その結果放縱になり易いのは自然の赴く處でありますが故に、施設の上によく注意して、此缺陷を尠くする様努めねばなりません。

第五節 施設は自我の繼續實現にまで

訓育は、道德的習慣への努力、自我の實現確立にまでの仕事であります。然るに従來、とかく花火的の施設の多いのは、誠に遺憾に堪へない次第であります。

随分、小學校には、觀て貰うための施設が多いのでありますが、就中、訓育の施設は、尤も飾りものが多いのであります。甚しいのになると一回位實行してあとは帳簿に名前を残して置くに止まるが如きものもあります。

訓育は、何處までも、その實行が無意識的に、習慣的にされて、それが全く軌範と一致しているまでに進むべく努力するのでありますから、在學中反覆練習實行される様施設しなければなりません。目的として決定した施設は、漸次改善を加へつゝ、兒童に一定の習慣となるまで完成へと努力せなければなりません。小學校在學中、常に彼から彼へと、雜然と訓育に當らしめたならば、その習慣でも、その人は、非常に、將來不利なものとなります。單に不利であるばかりでなく、一生たゞ雜然と行動すると言う事は、道徳的に、價値のない事であります。雜然として一生何等の完成がないとすれば、その人は、個人的にも團體的にも何等の貢獻なくして終つた無價値のものであります。此點から考へても永續性を帯びた施設でなければなりません。

我國人が、一事の完成に熱中し得ない理由は非常に多いでしょう。今茲に一々述べる暇はありません。けれ共學校訓育の施設に於ては、此弊風をためる爲にでも、猶更永續性の訓育が望ましい事であります。とかく従來は、學校に於ても、一般社會の傾向が花火的であると同様、新しきを追い施設數の多きを街らい、品性を築き上げる事に努力されていないのが、今日の狀態であります。

自我の成長への訓育とは、之を實際に引き卸して來て考へるならば、學校奉仕の習慣をつくりと言う上に於ては、尋常一學年の學校奉仕よりも尋常二學年の學校奉仕が、無意識的に成長している

のを意味してゐるのであります。實行が質に於て量に於て、その根源の精神に於て順次擴充される事を意味するものであります。尋常一學年の奉仕を、單にそのまゝ反覆練習實行して、小學校卒業の際は、尋常一學年に於て意識的に行つていた事が、そのまゝ、卒業の際無意識的に實現されると言うのではありません。順次無意識的に實現される様になると共に、一方に於ては、その凡てが學年毎に成長されるのを意味するものであります。小學校に於ての訓育は、此意味に於て永續性を帯びたものでなければならぬのであります。

又一面に於て、一事に對して習慣的にあまりの努力を要せずして實行できる習慣のついている人は、他の事項で善事なりと判斷した事に對しても、容易に實現されるものであります。一事に對して無意識的に實行さるゝ人には、所謂實行力が涵養されているからであります。人間の實生活を考へれば、その事實の實現が複雑なること到底想像のつかぬものであります。故に、永久的の事項まで詳細に調査して、一々之を施設し、反覆練習する事によつて、凡ての事項が無意識的に表現される様、品性の陶冶を謀つて置くと言う事は、不可能であります。只その主なる極めて少數のものに就て、その徹底をはかるに止まるものであります。その他は、この際養はれた實行力によつて實現されるものであります。

既に述べた如く、善なりと判断して信じた事でも、いざ實行となると容易ではありません。私自身を反省しても善なりと知りつゝ實行する事を躊躇している事が尠くありません。また、悪と知りつゝ、ある程度の習慣のついでに事柄に對しては、いつの間にか實行している場合も尠くないのであります。

かくの如く、善と知りつゝも實行の出来ない原因に就ては、一つには止まらぬのであります。その大なるものとしては、實行の力が涵養されていない事であります。學校の訓育から言へば、範圍の廣い施設はしているが、その徹底力が極めて弱い、即ち、一事を飽くまで反覆練習實行して、その事項に對しては、習慣として固定していると言う程度の努力の足らぬ事であります。故に兒童の上に凡ての善事を實行するの力が養はれていないからであります。ある事項に對しては、容易に實行されると言う習慣のついでに人には、それ以外の事項に對してもその實行が極めて容易であります。慈善に對して實行の習慣のついでに人には、親に對して孝行を實行することが容易であります。其他實行の價値を擧ぐるならば多くある事であるが、茲では省略することにします。

とにかく、小學校の訓育は、なるべく尠い事項を、出來得る限り永續性を帯びた施設を爲し、それが無意識的に實現されるまで徹底せしめねばならないと信ずるものであります。

乙、助成の根本義

第一節 自己の疑視

道徳は、自我の肯定であります。自我の成長人の努力であります。訓育は、自我の成長人の手段であります。

兒童は、幼年なるほど、権力道徳を墨守するものであります。それは一時的であつて永久的ではありません。「なぜ君はそれがよいか」「なぜ君はそれをしたか」と、問うと「そう、お父さんが仰言つた」「先生がよろしいと仰言つたから」と、答へるのであります。此時代は、何れの子供でも通過すべき一つの過程であります。この時代を、なるべく、はやく、通過さそうとするのが育の努力であります。

この権力主義を永久に承認する人は、その人の道徳觀が、すでに君神権力主義にできているのであります。

「神が命する故に善なり。」

「君の命なるが故に善なり。」

と、思索信仰するのであります。しかし、

「善なるが故に、父は子に要求するのである。」

「善なるが故に教師は兒童に要求するのである。」

と、置き換へなければならぬのであります。

権力道德實現の次には、法則的實現をするのが普通の順序であります。

「友達は、助け合はねばならぬ。」

「弟妹は兄姉を敬い、兄姉は弟妹を愛せねばならぬ。」

「先生の言いつけは、すべて守らなければならぬ。」

と。すべての事を法則づくめで、いく時代があります。

之を絶對と信ずる教師は、教室にも廊下にも職員室にも法則規定ばかり書いて貼つて置いて、職員や兒童を訓練して行こうとする學校があります。一體法則は、法則なるが故に、善なものではないのであります。自我が肯定したるとき、始めて善なのであります。その人から言へば、それを資料として法則を生むのであります。その人が構成するのであります。その人に於て、構成された法則

だけが、その人に有効であります。そうでなければ、法則規定に盲従した事となります。法則は、今直に、之に違反する事はできないにしても、その法則を批判する力は持つていなければならぬのであります。その法則は批判し肯定して遵守せなければならぬのであります。前に述べた如く否定した點に對しても、實現を拒む譯には行きませぬが、將來、その點に就て、おもむろに改善を促す權利と義務のあるものであります。

法則規定は、人が作つた概念であります。それは、法的に、一般の人に方向を示すだけのものがあります。具体的個人を動かすのは、概念的法規ではなくて、それによつて、その人が構成した處の法則規定、言い換へたならば、その人の歩むべき道、即法的標準が、その人によつて、道德的標準に變換された概念、所謂具體的概念だけが、その人の行爲を行爲せしめるに足るものであります。

権力道德や、法規道德で、押しつけて行つたのでは、その生活は、形式的で皮層的であります。自我を他處にしての他律的道德では、何時が來ても眞純な人間はできません。他律的訓育では、常に外部にばかり眼が動きます。教師の眼、父母の眼、社會の眼、法則規定をのぞいて、それから實行すると言ふ態度となります。世に、之を小才子と賞讃するのは、甚だ面白い事ではありません。

かく、他律的訓育は、兒童の眼が、外部にのみ向つていますから、人の見ない處では全く規範が無くなりません。當然の歸結として、道德がなくなる譯であります。

道德は、唯一絶對の自我に目醒めしめて、之に忠實に服従さす事であります。常に自我を内觀せしめる爲めには、

- 1、自我を呼び起さすこと
- 2、自我の命令如何を反省さすこと
- 3、自我の活動をなさしめざる前に規範を與へざること
- 4、教訓を與へずして自ら創造さす事
- 5、なるべく兒童の選擇意志に一任して之を尊重すること
- 6、失敗するとも恐迫恐怖を以て當らないこと

常に自己の體験を内省せしめて、その發展に努力せしめる様助成せねばなりません。この用意に缺くる處があるならば、折角の訓育もその生命を失はれてしまいます。常に兒童を刺戟して、内面經驗に努力せしめ、自己の生活を見渡らしめ、それによつて自我の成長に努力せしめねばなりません。

第二節 自我の眞劍實現

従來の訓育には、頗る怪しものが多いのであります。兒童の自我の眞劍の表現を生意氣なりとして葬られた場合が尠くありません。兒童の眞劍の生活問題を解決するに、大抵は「あとで職員室へ來い。」に決まつて居りました。

態々職員室へ呼びよせると言う事は、教師の権力で以て、訓育の目的を達しようとするものゝ常套手段であります。それで、眞劍の實現しているものも、先づ恐怖が先行して、萎縮してしまつて自我の統一は破壊されています。

かゝる先生の訓育態度は、大體型の如くできております。開口一番、

「君は何の爲めに來たのか。」

と、ねじくれて掛ります。兒童も少し熱のあるものならば、

「先生がよく御承知でしょう。先生が來いと仰言つたので參りました。」

と、答へるであります。そうなれば、先生も大分顔面に朱をそゝいで來ます。

「然らば、先生は、何の用事があつて呼んだと思うか。」

と、飽くまで、大上段に出て行くのであります。こうなれば、なるほど、児童の方は教師から離れて行くのであります。

「一寸想像がつきません。」

と、やり返す時は、如何に氣の長い先生でも勘忍袋は裂けてしまふのでありましよう。

「馬鹿。」

の一言に鐵槌は、児童の頭に見舞はれます。

「馬鹿だから勉強しています。」

こんな訓育の方法は、何世紀も前のものであります。しかし、單に傳統的に訓育をやつてゐる所にはまだ、この様な上江りの訓育が行はれてゐるのが遺憾であります。この様にして、自我の成長をはからうとしても、それは駄目であります。自我の本質に生きんと努力している子供には、手品の如き手段では、何等の共鳴は起りません。児童の滋養分とはなりません。いじくれた成長への努力となるばかりであります。

「相當な」「殊に善良な反抗心」の持主は、馬鹿ではありません。また生意氣ではありません。「あくまで自我の命令に生きんとする態度の表れであります。もし、その態度が、圓滿でなければ、それ

だけ、ゆるくと導くべき價値を持つた児童であります。

眞に馬鹿なものは、又は、自我の要求を無にして自然性に生きてゐるものは「吾は、何の爲めに教員室へ來たのかと言へば、事の是非も詮索しないで、直ぐに、

「もう、今後いたしませんからお免し下さい。」

と、自我を通さない言い譯をします。斯るものに對して教師は、「悪い事はするが従順だ。」と信ずるのであります。之が何で従順でしょう。自我の要求に合致して、それに従うのが従順であります。肯定した時間が早いか遅いかによつて従順であるかないかを決定すべきものではありません。従順とは、自己肯定であります。自己を否定したものは偽善者であります。免された子供は、先生も割合に馬鹿だと考へます。前者を「生意氣」と信じ、後者を「柔順」と判ずるのが従來の訓育にあたる教師の常であります。之では訓育に徹底がありません。只一時的の彌縫策を弄しただけであります。

前者は、自我の要求に對して、尤も眞劍なものであります。後者は、自我の忠實なあらはれは少しも見る事ができません。ただ、一時も、その児童の考へた苦痛を遁れんがために、自我の要求を無視してゐるのであります。職員室へ呼ばれた時は、必ず叱責されるから、此苦痛から、一時もはやく、のがれる爲めには、早速、先生に謝罪するより外ないと偽善態度をとつてゐるものであります。

す。

訓育に於ては、常に、兒童の自我の活動が、完全に統一的行はれているか、否かを反省さすべきであります。自我をして、より高き統一的に、より理想的に、より創造的に擴充成長せしめる事であります。あくまで、眞剣の態度に立たしめその實現に對して、ゆる／＼と成長せしめる事に努力せなければなりません。

第三節 自我の自己成長

教育は「自己によつて自己を教育する」。之が極度であります。

従來の訓育に於ては、小言訓育が殆んどありました。講座訓話と言へば、始めから終りまで小言で済むのが普通で、聞いただけでもホツトするものであります。

「此頃の朝會の集り方はおそい。」

「教室の整頓が悪し。」

「教室での姿勢が悪し。」

「敬禮の仕方が悪くなつた。」

「不用品を持つて來ているものがある。」

など、何等の連絡のないものを無系統に無理解的に連發されるのであります。その終りに、何を言はれたのかと、反省しても何等の記憶さへあり得ない位であります。だから、兒童も、自ら馬耳車風とならざるを得ないのであります。

元來、小言訓育になり易い原因は、知らしめる事は、直に、實行となるとの誤謬があるからであります。よりよく實行し得る方案を考究せずして、小言を言つて置けば、何等の面倒もなく、而かも實行に現れるとの考からであります。また、兒童の道德的品性の完成を外部的に律して行こうと企てるからであります。教師の方に、前以て軌範を構成しておいて、是が非でも、この線まで引き上げてやらうとの考が眞先きに立つて居ります。而して、引き上げるために、努力して見ても、それに順應して來ません。そこに、指導者の方に、落膽するか、憤慨するかであります、そこで小言訓育となつて來るのであります。

小言訓育は、まことに、親切である様で不親切な譯であります。全く理想と手段とを、はきちがへたものであります。兒童のためには、有りがた迷惑であります。教師の方に、理想にまで到達する實行方案を、漸次改善講究しないで、只教師の思索した道德上の理想を決定しておいて、之に到

達しないからと言つて立腹するのは、恰かも、理想的だと言つて概念的の靴を拵へて、兒童に穿か
しめる、足に合はぬとき、汝の足が悪いと言つて、小言を言うのと等しいものであります。

私が、小學校で學んだ讀本に、雛をかへす鶏のために、卵の殻を割つて遣つて、却つて、雛を殺
した子供の話がのせられてありました。今の訓育には、足に合はぬ靴をはかす強制や、この雛を殺
す子供の愚を學んだものが、今猶少くないのであります。

自我の成長は、實に長年月を要します。けれ共、外部から、その殻を割つてはなりません。外部
から加へる自我への努力は、誤ると何等の效がありません。手傳つた努力は、却つて、その子供の
自我を殺します。今日の教育は「殺人教育」だと言つて罵られる所以は、茲にあります。只外部から
加へてやるべきものは、毎日々と氣長く、教師の熱涙を以て、自我の卵を温めてやる事でありま
す。本能的の鶏は、萬物の靈長自我の所有者の人間の様な愚は學びません。小利口に生れた人間は
利口過ぎて時々失敗します。

訓育は、猿蟹合戦の蟹の態度を學ぶべきであります。

早く芽を出せ柿の木よ

早く大きくなれ柿の木よ

早く花さけ柿の木よ

早く實がなれ柿の木よ

この態度がよろしい。大きくなるのは柿の木自木であります。之を、直接に、外部より引き伸して
も、伸びません。内から伸びる力のために、間を耕してやつたり、肥料を施してやつたり、水分を
やり、草をぬき、害虫を採つてやる事であります。

それをこの程度まではのびるものとして、伸びないからと言つて、叩いたり摘んだりしては、柿
の木は、滅亡するより外ありません。

訓育は、何處までも、兒童をして自我に目覺めしめて、自ら努力して自我を擴充し發展せしめて
積極的の成長へでなければならぬのであります。

第四節 自我の活動性尊重

自我は活動を要求します。人間が活動的である所以は、自我の活動要求を充足せんがためであり
ます。自己活動の原理も茲にあるのであります。この自己活動から、凡てのものが生れて來る譯で
あります。

人は絶えず活動している處に、人としての生命があるのであります。活動が失はれたならば、既に人としての何等の價値を認める事ができません。しかし、一應考へねばならぬ事があります。それは萬物も活動します。病的でない限り、一分間も静止してはいません。けれ共、其處には、人間の活動とは自ら差異があります。動物は自然性の活動であるに比し、人は、自我の要求による活動であります。そこに、人としての活動は、價値活動であります。訓育は、此方面から言へば、よりよき價値活動の強大なるを望むものであります。人より活動を除けば人なきが如く、訓育より活動を除けば訓育は、無になります。一切の自我の顯現は活動となつて現はれるのであります。

然るに、従來の訓育に於ては、その活動性を抑壓して、萬事控へ目に、消極的に、精神的に生理的に靜的なるものを以て理想としました。教室では、去勢された駄馬の如く、運動場では、石地藏の如くなる事を要求して、かゝる兒童を模範生と稱して表彰されて來たのであります。

かゝる退嬰的の行動をする兒童の多い學校を以て、訓育の模範學校とせられたのであります。かくする事によつて、人生に對して厭世的の考察をなすものが多くなり、萎靡、陰鬱、沈滞が、一般の傾向となり、兒童は全く活動性を失つて、國家の附托に忠實なるものが生れない事になつたのであります。

活動性を尊重するとは、凡ての活動性を、是非の判別なく尊重すると言うのではありません。何處までも有價値の活動を重するのであります。

兒童の活動性を善用して積極的に、大なる正しき活動によつて、その陶冶をはかるべきであります。兒童自身に思う存分の活動を爲さしめ、而して、その後、その結果に就て指導すべきであります。

第五節 二元の惱への助成

ある意味に於て、道德とは、二元の惱であります。子供は、子供相當に、此惱があります。此惱のある處に人間の發展があります。遊びたい、讀みたい、着たい、見たい、食べたいとは、子供の自然生活の惱であります。しかし、また、一方には、さほど表面に顯れないで、而かも、その人を左右する、よい人間になりたい、よい成績を得たい、よい行をしたいなどの欲求があります。之は自我の生活であります。この二元の戦によつて、勝を占めたものが、そこに實現されるのであります。それが生活の實相であります。その二元的葛藤を適當に指導して行く事が訓育であります。

従來、往々にして、ある事項を單に表面的にのみ解釋されて、その裏にひそめる自我の活躍を無視して解決します。だから、人間活動を極めて淺薄なものにして、兒童の自我の自覺を呼び起す機

會は全く無くなりません。

今後の訓育に於ては、表面に顯はれたる事實は勿論、その裏にひそめる自我の活躍に注意し、その自我が如何なる程度に表れているか、如何に活躍しているかを見て、その二元の惱を充分に指導し、自我の自覺を促す事が肝要であります。

第六節 環境の整理

教育の可能を妨げているもの、大なるものは、遺傳と環境とであります。遺傳は、今直に如何ともすることのできないものであります。その教育の手段中尤もこの影響をうけているものは訓育であります。

學校訓育の徹底しない大なる原因は、この環境より受くる影響が第一であります。先づ教師自身の品格——外國教師に比して——教師相互の不統一、朋友、家庭、社會の不倫行動など、その蒙る處は、實に大なるものがあります。夫等の環境が教育的に整理されたならば、今後の道德的訓練上如何に徹底を見るか知れないのであります。故に、訓育徹底のために、教師相互に統一をはかるは勿論、朋友の道の指導、家庭教育の改造、一般社會の學校教育化に努力せなければならぬのであります。

ります。

第七節 根本は愛

教育の根本は愛であります。たとえ、知的教科であつても、愛を他處にしては成り立ちません。けれ共、愛の上に、幾らかの缺陷があるとしても、知識の教授には、全然不結果に終ると言ふ事はありません。

けれ共、訓育に至つては、全く、愛より出でて愛に終るべきもので、愛を除いては訓育は全く成り立たないのであります。愛なくして、權威で以て訓育の徹底をはからうと努力したのは、最近までの事でありました。今でも、態々作つた、權威で以て訓育の實を擧げようとしている人もありますが、之はその源を淨めずして、百年河清を待つと同じことでもあります。

訓育の徹底は、常に教師と兒童との間に、つながる導線の中に、交流した赤い血と熱い涙が、何等のよどみなく溢れるほどに、めぐつていなければならぬのであります。それが、十分に徹底しているならば、凡ての施設は、まことに有機的に徹底的に價值が増大される事であり、

訓育に携る教師の生命と、兒童の生命とは、全く融合同化されて、何等の隔てのない處に信仰生

じて、その効果の能率増進がある譯であります。

第八節 體驗 提唱

教師の體驗は、兒童がよく共鳴します。しかし、注意すべきは、安價な共鳴であつてはならぬ事でもあります。兒童は、往々にして、教師の體驗を、何等の批判なく「教師の権力」のみに共鳴するものがあります。幼學年に於ては、之も、ある程度まで免される事ではありますが、それが、永久的のものであつてはなりません。

教師の體驗に共鳴する場合でも、必ず自我の批判にまつて、共鳴感激したものでなければなりません。之と反對に、教師は、自己の體驗を押し賣りする様な事は絶対に價値のない事でもあります。助成者の體驗は、たゞ、參考資料として、兒童の前に提唱するのみのものであります。之を、兒童は採るべきは採り捨つべきは捨つて、自我の成長をはかるのであります。これが眞の修養の態度であります。單に、外部から押し付けた體驗は、何等兒童の自我を成長さす所以ではありません。何處までも、自己によつて、肯定し否定せしめなければなりません。教師が教師としての權力を以て、教師の體驗を押し賣するならば、兒童は逃げてしまいます。兒童と教師とは、常に一體者として、一個

の修養者として、その體驗を示し合した處に、お互に共鳴が生れて來るのであります。

教師としての體驗を示すのは、その事實の結果を提唱したのでは、極めて効果が薄いのであります。

教師が、自然生活から自我の統一へと奮闘した、その過程を示すのが良いのであります。生活の悩みや悶えを解決した過程を提供してやつて、始めて、兒童は、啓發されて行くのであります。單に結果のみを示すならば、それは模範の強要と言ふべきであります。常にその過程を示して、參考として提供してやる事を忘れてはならないのであります。

第九節 赤裸々の接觸

従來は、單に教室で、教師が、固陋なる態度で以て、兒童に對して、それで訓育の實をあげようとしたのであります。

教室で、彼是と小言を言つたきり、職員室に引き込んで煙草を吸つていたのでは、人格の接觸はありません。却つて、人格と人格との間に、大なる溝渠ができて來るのみであります。

訓育では、殊に、教師は持ぬいだ、赤裸々の態度となり、兒童もまた、虚偽を捨てた眞實の態度

となつて、共に遊ぶ處にその徹底があります。此事に就ては、教師法に於て詳細述べて置きました。休憩時間は、もとより放課時間、休日に、兒童と共に遊ぶ——所謂道德の體現生活をなす事であります。その赤裸々な接觸によつて、不知不識の間に、眞の訓育が行われるのであります。事々しく、形式的の言譯的の機會によつては、努力ほどの効果のあがぬ事は多數の現に經驗している處であります。

茲に於てか、訓育の眞髓を理解し、教師の天職を味得している人によつて、赤裸々の接觸をなし訓育の徹底をはからなければならぬのであります。

第十六章 訓育に於ける教師の根本義

第一節 教師の職能

第一 兒童とは

教育は、自我の創造成長と言う事にあります。兒童を助成してよりよき自我の發展をなさしめるのがその仕事であります。自我は、認識體驗の主體であります。之を實際的に見れば、知識を組立てる仕事、道德を實現する仕事、藝術を創り出す仕事宗教を體現する仕事のできる主人公が自我であります。即眞善美質の價值を體現するものが自我であります。

成長とは、よりよき自我の創造實現を發生的に眺めたものであります。正しく考え、善く行い美しく感じ、聖く味う働きが、次第に向上して行く事であります、それは自我自身の本質であります。自我自身の本然の力によつて成長して行くのであります。

併し、自我とは、單に考えられたる概念であります。その概念それは現實的個人に即したものであります。しかし現實的特殊的個人そのまゝのものではありません。特殊的現實個人の内に特殊的

現實の個人を超越したものであります。勿論、人間の姿そのものは、特殊的存在としての個人の中に自我を内在したものであります。自我は特殊的存在としての個人の中に於て始めて意義をもつたもので、人間としての姿に於ては到底分つ事のできないものであります。

思惟の上では二つに考える事ができる、教育の理想を考えるとときには、特殊の個人についてはなく、個人に内在して而かも個人を超越した自我であり、その創造成長をはかるのが教育の理想であり、教育の事實を考えるとときには自我を内在した個人に就てのものであります。

故に、兒童は、教育理想の上では、甲、乙、丙、丁と別々に特殊の現實的存在として見るものではありません、何れも自我の創造成長を圖つて人格者とならしめると言う點に於て何等の差別のないものであります。

第二 教師とは

教育の理想を兒童の自我の創造成長を圖る事とする以上、兒童は、文化の創造者であり教師も文化の創造者であつて、教師と兒童とは何等對立關係がないのであります。

教育を事實的現實として見たとき始めて、教師と兒童とは相對立するものであります。

兒童は現實的存在として個人に於ての成長がありますが、之とても、個人を超越したる自我の成長であります。

兒童は學ぶ人であり、しかし、教を受くる人ではありません。従つて教師は教える人ではありません。兒童の學ぶ仕事の手助けをする點に於て教師の仕事があります。教師が、兒童の自我の創造成長をはかるについて之をなるべく經濟的に、なるべく正しく、善く美しく聖く成長しうる様助長して行くためには、教師は、教師自身の自我の創造成長をはからなければならぬのであります。教師がよりよく自我の創造成長をしているだけ、それだけ、よりよく兒童の自我の創造成長を促進する事ができます。

人としての自我の創造成長は無限であります。従つて、教師は永久に未完成品であります。永久に完成への無限の努力であります。斯る人へのみ教師として免さるゝものでありましょう。「人は自己を教育しつゝあるときにのみよく人を教育しうるは、私の教師としての標語であります。自我の創造成長への「精進」之が教師であります。

この點に於て教師と兒童とは主客の對立ではありません。勿論事實としての教師は、兒童の自我の創造成長を助成して價值を體現する人格者たらしめるのが仕事である事は言う迄もありません。

その仕事も、事實に於ては、單に教育すると言う事ばかりではなく、修養に精進すると言う事によらなければ、その目的は達せられません。修養即教育教育即修養と言うのが私の謂う教師の生活であります。

第三 教師の職能

兒童は、自我の持主であります。併し、それは、完全體として先天的に所有しているものではありません。永久に一歩／＼と創造成長するものであります。その發達は極めて遅きものであります従つて教師のある程度の助成がいる譯であります。

助成とは、助長補成であります。積極消極の二方面が必要であります、換言すれば、輔導指導が必要であります。それによつて、よし能率的に創造成長せしめる事ができるのであります。従つて教師は注入したり、傳達したり、授與したり開發したり、引き出したり、引き上げたり、獲得せしめたりする事ではなく、飽くまで助成すると言う事より外ないのであります。

従來、唱えられた授與傳達はすべて最近の哲學の示す處によつて葬られてしまつたものであります。授與傳達は、教育の仕事すべて、外部的にのみ觀ていたから、そう見えた譯であります。

兒童自身から觀れば、自ら創造助長性を持つて居ります。教師から與えられた資料により、又は自ら求めた素材によつて、その資料の中に内在する、普汎的な、規範に解發されて其處に自我が認識し、經驗し、體得するのであります。而して、その仕事が終われば現在の自我はそれ以前の自我よりも成長しているのであります。自我は、認識し、經驗し、體得する働きをもつものであります。ただ器械として、受け容れるばかりではありません。その認識し體得する爲めに、種々の資料を提供して助成するのであります。かくして、不完全未熟なる而かも徐々として創造成長する自我の創造成長をはかるのであります。

さればと言つて、教師は不必要か、輕視すべきものか。之は往々誤解され易い問題であります。勿論兒童は自重の自己創造成長の持主であります。自發自啓の働のあるものであります。何等他の力を借らなくとも創造成長します、しかしそれは、程度が低く、また能率がありません。また、極端に考えれば、各種の障害の方が強いため何等の成長もなく、なかには、却つて惡成長をするものもあるかも知れません。自我は創造成長するに従つて自己によつて自己を教育する力が強くなつて來ます。兒童は、いまだその力の弱いものであります。だから、教師は之を助成して兒童の自我の創造成長——自我の認識體驗——を促進せしめるために極めて必要であります。

かく考へるときに再び教師なくては教育は行われぬと言ふ懸念が生じて來ます。從來の傳達授與であれば必ず教師の必要が起ります、教師なき處に教育なしと言ふ事になります。私の謂う極めて必要であると言ふ事は、既に述べた處で明である様に、自我の創造成長の助成をはかる上に必要なものであります。だから、私の教育理想には、自我の創造成長の促進をはかると言ふ事になります。促進をはかるのでなければ、教師は不必要となつて來ます。従つて、教師なくとも教育は可能であります。よりよく促進せしむる上に教師としての職能があるのであります。

第四 教育資料と教師

教師の職能は、自我の創造成長を助成する事であります。自我の創造成長に適當なる、資料によつて、兒童を解放して自覺せしめるにありますがあります。

そこで自我の創造成長に適當なる教育資料と、自我の創造成長を助成する教師とは、如何に觀るべきかを考へて見なければなりません。

古い傳達主義は、言ふ迄もなく、資料そのものを渡してやる事が、その任務であつたから、全然別なものであつたのであります。而かも教師は教材を使うもの、教材は教師に使われるものとなつ

ています。實用主義は、凡てを環境と見ますが故に、教材も環境であり教師も環境であります。教材教師とは全く同一のものと觀られているのであります。

私は、それでは満足はできません。

第一、教師は、自覺ある人格者であります。自我の要求によつて、一日一日と無限の境地に向つて精進するものであります。教師以外の教材は、殆んど機械的のものであります。教師はよき助成者たらんとする愛に燃ゆるものであります。他の教材には、そんな熱烈な點は見ることができません。教師は、現實に於ての生活者であります。規節を内在した處の實現者であります。同じく文化の體現者と言つても、文化材そのものとは、大に異つています。文化材は、一の概念であります。教師はその體現者であります。そこに大なる差を認めます。教材としての文化材は普汎的抽象的のものであります。教師は普汎を内在しての文化具體表現であります。換言すれば、教師その人も所謂學者であります。勿論、教師は、その助成をはかる上に於ては、よりよき體現者である場合のみ眞の學習があるのでありますから、教師も文化材と同一のものとも考へる事ができます。それは教師のもつ文化を靜的な文化材と考へた時のみ事實であります。教師はよりよき文化の體現者である事を要求します。

併し、それは實際の上に於ては教師は積極的事實の具體實現者であります。教師は或點に於て、教と材と一致する場合がありますが、それは一部であつて、教師は別の使命と職能を有するものである事に目覺めねばならないのであります。

第五 訓育と教師

訓育は、結局品性の確立への努力であります。教師はその助成者であります。既に述べた如く人としての道徳方面のある型を渡して、そのまゝ模倣さす事でもなく、かくなければならぬとして型を注入する譯でもありません。また、從來の風俗習慣を提げて盲從せしめるものでもありません。全く體現者その人の體現にまつより外ないものであります。

之が参考資料は教師その人であるし、又その人を通した、教材であります。教育——は殊に訓育は、「人格と人格との接觸なり。」とは此邊を物語るものでありましょう。——勿論他の仕事に於ても此範圍を出でないのであります。

第六 兒童は兒童であり教師である

教師は、「學びつゝある時のみ教へる事ができる。」修養即教育なほ換言すれば自我の創造成長即教育であります。兒童としての仕事も自我の創造成長であり、教師としての仕事も自我の創造成長であります、其點に於て何等の變りがありません。

教師としての自我の創造成長は、それが、教育の仕事であり修養の仕事である事は前に述べました。教育の仕事は教師のする事であり、修養の仕事は兒童のする事であります。従つて教師は、一面教師であり同時に兒童であります。之を兒童に採つて考へて見れば、從來の考方は兒童は、所謂被教育者であつたのであります。しかし、新しい考へ方によれば、兒童は自我の實現者であります。其處に於て、兒童は、自我の創造成長をはかるためには、兒童であります。しかし自我の創造成長をはかつた事に於て教師たり得るのであります。實に兒童中にはある點に於て教師以上の自我の創造助成のある兒童がおります。教師以上の自我の實現者がいます。此點に於て教師は、兒童に教育せられねばならないのであります。

從來は單に兒童を被教育者とのみ考へて是が非でも教師は教師としてのみ立ち、兒童は兒童としての外、一切の力を認めないといふ態度で兒童に對していたのであります。それで兒童は、一口に被教育者又は、未成熟者として強制教育が實施されて來たのであります。

前述した如く、兒童の實際を凝視するとき、教師以上の實現を見ます。特に道德の體現には、その點が甚しいのであります。そこに吾々は目覺めて、眞の兒童を取扱い、自分が破教育者となる事に於て、何等の躊躇をしない態度を採つて、所謂共學態度によつて、道德教育の徹底をはかれればその効果は豫想外にあがつて來るものであることを信するものであります。

第二節 訓育の根本義と施設に關する體驗の不足

第一 師範教科書の不備

訓育をして、飽くまで之が徹底をはかるための第一は、何と言つても教師に歸らなければならぬのであります。その第一である教師の養成所たる師範教育に用いらるゝ教科書を見れば、甚だ寒心に堪へないのであります。

教授法に於ては、詳細なる説明とむしろ蛇足的と思はるゝ教案の型まで添へた教科書を一ヶ年かけて研究する様になつています。然るに訓練の教科書がないのが不思議ではありませんか。只その主張について、教育學の教科書の中に、訓練論として僅かに數頁を費されているばかりであります。

その蔑視されている事は甚しいのであります。之等の點に就ては、既に、訓育不振の原因の所でも大要述べた次第であります。

訓育の主張や、その施設は現在の師範で教へられたる教科書だけでは極めて不十分なものであります。それによつて、將來、模倣の出來ない事は勿論、創造の根源にもならないのであります。また、將來研究せんとの意思の鼓舞にもならない程のものであります。一口に言へば、極めて貧弱なものであります。

第二 教育する教師また體驗なし

かく輕視されている教科書であるとしても、之を取扱ふ教師が、有力なる體驗者であればその缺を補ふに充分であります。然るに、教育を教へる教師は、大抵附屬小學校の主事であり、附屬小學校と言へば、大抵教生の實習所となつています。教生の實習所と言ふのは、教授法の實習所で教育の實習所ではありません。教授法は、しきりに研究するが訓育などは一向お構いなしで、到底教生では出來ないと、最初から棚へ上げてしまつてあります。それで、何等訓育の施設の見るべきものがあります。大抵附屬小學校を參觀して訓育の事を聞くと、茲は教生の實習所だからと言つて

逃げてしまふ。教生とは、教育の實習でなくて教授學習の、實習の様な傾向になつて居ります。——全國の附屬小學校全部とは言はないが——其處の主任が教育學の教育にあたるのでありますから、その教育も甚だ教科書の缺陷を補ふには心細いものであります。殊に訓育などは理窟で分らぬ處が多いものであります。之を扱ふ教師に十二分の體驗を持つていなければ、逆も學習者に満足せしめて、將來奮起するだけの基調が策きあげられるものでありません。その原理はある程度まで説明で生かすとしても、機會後、或は施設の實際などになると、その事に直接携つてゐるものでないと甚だ力の薄いものであります。たゞ、從來自分が兒童であつた際、訓練づけられた常識的の事項一般的施設の傳統的の事項位に觸れるばかりであります。かゝる教育を受けたものが出でて、訓育の任にあたるのであるから、一般訓育が思ひ半に過ぎるものも所以あるかなであります。

第三 教生として訓育に關する實習皆無

前に述べました様に、將來出でて教職に就くものとしては、その根本義の研究に於て既に缺くる處ある上に、教育の實習所たる附屬小學校に入りては、教授學習の方面のみ没頭して、殆んど訓育に關する實習なきことは甚遺憾であります。

一體附屬小學校は、教育の研究所でありますから、教育全般について實習すべきものであります。甚實習困難の故を以て、訓育の實習を無視するは、甚當を得ていない處置であります。かゝる教育を受けて卒業したものは、何等訓育に努力しないで、たゞ々々教授學習にのみ努力するのは當然の行き方であります。

勿論、附屬小學校に於ても、絶対に訓育に努力しないのではありませんでしやう。併往々にして附屬小學校に身を奉ずるものの中には、訓育なき訓育を以て理想とすると云ふ思想を持つた教育者が尠くないかと思はれます。勿論理想として、ある程度まで認められまじやう。それは、結果の問題で、最後の問題で、夫に到達するまでには、相當な施設と努力が入用であります。また「教授と訓育とは離すべからざるもの」との思想を誤解して、教授のみによつて訓育の、全目的が達せらるゝものと考へている教育者も尠くないと考へます。また、「訓練は自由にまで」を曲解して、訓練する事は拘束する事であると考へている教育者も尠くないと考へます。色々な思想がこみ合つて附屬小學校に於ては、訓育の實習が不足であります。ある地方の附屬小學校に於ては皆無と言つてもよい位であります。

第四 卒業後の指導不足

何等の根本義と、何等の施設の案とを研索體驗せずして、直に國民教育に携はる教育者が、卒業後、如何なる指導を受けるであらうか。之また、誠に怪しいものであります。既に訓育不振の原因の處で述べました様に、世は滔々として花火的に傾いて、指導者既に訓育を顧みず、——勿論全國的（すべてとは言はない）校長また之に相應して訓育方面は、單に見せるために經營一覽に載せて置くだけであります。従つて、都下の人々も、校長の趣旨を奉じて訓育の研索體驗には努力しない、たま／＼訓育に努力せんと志すものがあつても、校長や同僚の爲めに葬られると言ふのであります。師範教育に於て、根本義並に實際の上に十二分の體驗を得ずして卒業したとしても、自ら設立した教育者となつたとき、其處に大なる刺戟あり、暗示あり、指導あるならば、或點までは、その方面に向つて成長すべき筈であります。

また、此際講習の流行する事夥しい。講習と言へば大抵夏季休業中に定まつていたのであります。それが此頃は、冬季休業十一日講習その他普通授業日と、その回数が多いのに驚くの外ありません。而して、その種類をと見れば如何に巧利的に、如何に花火的になつてゐるかにまた一驚せざるを得

ないのであります。何と言つても中等學校入學準備の爲めには、國語算術となつて、國語算術の講師は引つ張り爪となつて、遂に本職が差支える結果、その學校でも休日の外出張させないと言ふので、一年も手前から交渉すると言ふ有様であります。また、なるべく外部から仕事をしていると言ふ事が、すぐ觀察が出来て、而かも成績が向上するものと言ふので、理科體操の講習の大流行であります。そこへ、目をつけて何か新しいのと言ふので、講師の方で目新しいものを作り出す。講習の度毎にその方案の變る體操、全く先生も児童も學校の如く何をしているのか、やつてゐる先生も分らないと言ふ有様であります。之を進歩と言えば進歩でしょう。しかし、進歩は末技であつて根本はそんなに變るべきものではない筈であります。

話は、横道にそれてしまいましたが、之に反して訓育の講習と言ふのは殆んど聞きません。他府縣はいざ知らず、我縣に於ては佐々木吉三郎先生と佐々木秀一先生を聘して訓練論を聞いたのが、只の一度。私寡聞にしてその他には伺わないのであります。日本全國何處も大體同じかと思われまゝ——近時、ある縣が大馬力で、道徳教育全般に亘つて覺醒的に努力されている事を洩れ聞きます——國家のため誠に喜ばしいと思ひます——講習と言ふ點に於ても、かゝる冷遇を受けた訓育は、何處までも悲惨であります。之を参考書について見ると、之また曉方の星とも言ふべきであります。

佐々木先生の訓練提要、佐々木先生の修身訓練の諸問題、山本先生の新訓練論、吉田先生の訓練論、松濤先生の訓育の根本義などでありまして、他の教授書に比しその數の妙きは甚だ遺憾であります。この方面に相當趣味を持ち研索したい意氣を持ったものでも、之が適當なる参考書なき時はその成長は、誠に遅々たるを免れないで、往々にして中絶するの止むなきに至るのであります。

第五 從來の施設は傳統的のもの

かくの如き淺薄なる根本と施設に對する意見を持つものの、實際は如何であらうか。特殊の趣味を持ち、特に努力されている方の施設は別として、一般的に之を見れば、甚貧弱なるものと言わねばならないのであります。

或は常識的に考へたものか、或は傳統的施設のものであります。例へば講堂訓話と言つても昔そのまゝのもので月に一回位全般兒童を集めて、校長から抽象的の事か、もしくは、偶發事項とでも言ふべきものを話すに止まるものであります。服装検査と言つても並べておいて、釘がないの、綻びているのと小言の言ひとばしです。清潔に努力していると言ふ學校を見ると、床板に顔がうつると言つて喜んでゐる。朝も雑巾がけ、時間の間も雑巾がけ。汚れていないでも定めた回数だ

け拭ふ。その努力とその教育的効果がどれ位あがるものか實は一向考へないのであります。之等の施設が如何なる教育原理から出て、如何なる教育的効果を收めるものであるか、などの煩悶はないのであります。而して、常識的の傳統的の事項に、淺薄に、または偏深的に努力している學校が「よき訓練」の學校であります。

從來訓練によき効果をあげている模範學校を見ると、甚寒心に堪へないものがあります。全く規則づくめに、全く作法づくめに、全く大人としての要求をなし、兒童をして全く萎縮せしめて、それで訓練徹底せしと考へているのであります。その訓育の根本義に對する低級なる事驚くの外ないのであります。

第六 今後の教師

今後の訓育にあたる教師に對しては、先づ第一に師範教科書の改正、之が取扱う教育者の人選、附屬小學校の實習に對して改善をなし、教師の訓育に關する根本義と施設の體驗とを十二分にとまではないかないでも、その基調は握る事ができねばならないのであります。

それによつて、勤機づけられた教師は、卒業後知育、體育以上に徳育の研究に努力し訓育の施設

の徹底を圖らねばならないのであります。指導者、監督者、校長も大に此方面に對して徹底的にその監督と指導に當らねばならないのであります。

かくして訓育の實は學つて或る事を信ずるのであります。單に申譯的の、傳統的の、根本に觸れない枝葉的の施設では何等の効果の擧らないのはむしろ當然の事であります。

第三節 道德體驗への反省

第一 訓育は兒童の自我と教師の自我とが握手の境地

教育は、自我の創造成長であり、教師は自我の創造成長することによつて、兒童の自我の創造成長を促進せしめることが可能である事を述べました。

よりよき教師とは、常に精進することによつて、よりよき自我の創造成長をはかる教師である事は言ふまでもありません。訓育上に於ては、道德的初精進の教師でなければならぬのであります。之を具體的に考へるとき、時間的に空間的に、質の上に、量の上に、よりよき自我の創造成長の體驗を持つていなければなりません。よりよき自我の自覺力とより自我の内容の持主でなければなり

ません、現在に於てのみならず尋常一學年の際二學年の際と順次各學年の際の自我の創造成長の實際を持ち合していなければなりません。

教師の自我と、兒童の自我が握手するの境地に教育が成り立つのであります。それは形式的に考へた事もありますが、内容的にもまた同一であります。即ち、兒童の自我の内容と教師の自我の内容とが、その程度に於て合致する處に教育が成り立つのであります。

一面から言へば、兒童を眞に知る處に教育が成り立つのであります。教師が眞に兒童を知ると言ふ事は容易の事ではありません。容易の事でないと言ふ事は、兒童の自我を知るためには、教師に於てそれと同程度の自我を有していなければ——自覺する事ができなければ困難であります。むしろ不可能であります。

教育に於ても、眞の徹底をはかるためには、教師に於て、その兒童相應の自我の創造成長を持つていなければならぬのであります。

第二 自我成長過程の反省自覺の困難

教師が深き自覺によつて自己を知るとき、始めて直面している兒童を理解する事ができます。其

處に教育が成り立ちます。教師が道德的眞理になり切るとき、其處に眞の兒童を直觀する事ができます。そのとき始めて訓育が成り立ちます。

然るに、「大人の眞理は子供の眞理。」ではないのであります。大人は大人としての眞理を有しているし、子供は子供としての眞理を有しているのであります。大人の眞理を以て、ただちに子供の眞理を解する譯にはまいりません。そこには、誤謬と無理が行われます。從來、一般に訓育は學校、家庭、社會が徹底しない所には、茲に大なる因を爲しているのであります。

兒童の自我の成長と教師の自我の成長は、發生的見地に立つとき異なるべきものであります。「大人の眞理と子供の眞理」と同一でないとの考へ方は前から出發してのものであります。

教育は、別の言葉で具體的に言へば、高い自我を持った教師が、低い自我を持った兒童の現實を直觀し、教師の自我を、その程度に引き卸し、以て、其處に兒童の自我と教師の自我との握手共鳴をさす仕事であります。兒童から言へば、教師の自我に開發されて、自己の現實の中に規範を見出して、そこに自我の創造成長がなりたつのであります。

教育の手段としての教材は、教師それ自體に持つている事もあればそれ以來の場合もあります。何れにしても、兒童が直觀し得るものでなければなりません。兒童が直觀し得るか否かは、教師が

兒童と同様の體驗を持つていなければなりません。之は甚困難な事であります。

教師が教材である場合は、比較的仕事就容易でありますが、教師以外に教材があるときは非常に困難が伴つて來ます。教師の自我が先づその教材になり切る事であり、なり切るとは、自我の内容として存在すると言ふ事であり、所謂體驗内容として所持していると言ふ事であり、かくして始めて教育が行われ訓育が行われるのであります。

要するに教育は、如何なる場合でも、教育の對象たる兒童と同程度の體驗を有するの必要があります。然るに、現在の教師が過去の自我の覺醒に努力するとき、實に思い半ばに過ぎるものがあります。

人がよりよき自我の創造成長への自覺に立つたときの努力は容易ではありません。それよりも高き自我の自覺に立つて過去を反省するとき、猶更困難を感じます。第一、小學校時代の過去の體驗が極めて少いのであります、所謂悩みと言ふべきものが少いのであります。現實の中に規範を見出す惱が、少いと言ふよりも、自覺に立つたとき、現在の意識に浮んで來る事項が少いのであります。自己の體驗内容が貧弱であります。勿論、單に概念としての自我の體驗は持つて居りますものゝ、それは尤も力の弱いものであります。現實に即した概念を體驗する事が、教育をさす上に、——訓育

の効果を擧げる上に尤も必要であります。

眞に訓育の効果を擧げんためには、教師は努力して、自己の兒童たりし時の體驗をよび起して所有している事でありませう。一學年担当の教師は、何處までも一學年になりきる事であり、二學年の教師は二學年になりきる事でありませう。各學年の教師は、夫々の兒童の自我と握手し得る態度になりきる事でありませう。其處に訓育がなり立ちませう。

教師が現在の自我の要求する所を直ちに兒童の上に寫して、以て訓育の徹底を圖らうとしても、そこには、無理が生じます。一足飛びに理想や軌範を強いる事になります。それは大人の自我そのまゝが、子供の自我でないからであります。自我の創造成長を教育の理想とする訓育に於ては教師の自我を兒童の自我にまで還へする事が大事な仕事とします。しかるに、之は前述しました様に色々な困難なる性があります。それに於ては、この仕事が先決のものである以上、色々な方法によつて此點に對して努力せなければならぬのであります。

第四節 現に即した人生觀の成長

第一 生活に即した人生觀

人生觀とは、人生を如何に觀るかと言ふ事でありませう。具體的には、自己の生活は苦惱の生活なるが故に世を果敢なむべきか、自己の生活は、愉快なるが故に世にあつて歡喜すべきか、人間生活の價值と目的とを何處に求むべきか、人間生活の手段は如何にあるべきかの觀方であります。

概念としては樂天觀と厭世觀ともたれて居りますが、それは知識としてのものであつて、人の實際生活には、あまり價值のないものであります。

人は、馬鹿でない限り、人生觀を所有してゐます。それは、その人によつて、系統立つたもので明確に發表しざるものもあるけれ共、また、自己を支配する力は、持つてゐても、他へ發表の出来ないものもあります。しかし、何れにしても、人生觀を持つていないものはありません。

その様に、凡ての人は、自己が所有してゐる人生觀によつて生活してゐるのであります。或は、この世の中を、不安動搖暗黒の世界、怨恨義望の世界だと感じて、人生を悲觀してゐる人と、確固不動光輝の世界、法悦満足の世界だと感じて、人生を歡喜してゐる人とあります。勿論、右か左かと明瞭に區別のつくものではなくて、その間には各種の別が生じてゐるでありませう。しかし、大別すれば以上の二つと見る事ができます。

悲觀者は、自然の事實現象を始め人事すべてを悲觀的に考へます。夏暑ければ暑いと言つて苦し

みます。冬寒ければ寒いと言つて悲しみます。自然の事實現象が何か意識的に吾人を苦しめてゐる様に考へます。自然の因果の法則によるもので、自由意志の規範の法則によるものと同様に考へて世を怨み自己の境遇を悲しみます。

樂觀者は、自然の事物現象は、尤も吾人の關する處に非ずとして葬つてしまひます。頗る複雑な人生まで極めて簡単に解決してのけて、極めて淺薄な、安價な人生の目的と價值と手段とに安住します。

之は考へられたる人生觀ではありません。何れも生活に即した人生觀であります。それにしても、眞を穿つたものではないのであります。

第二 訓育者としては特に徹底したる人生觀が必要

よし程度や範圍が、人々によつて異つてゐるとしても、その人その人に人生觀をもたぬものはないのであります。その人生觀は、單にその人が所持してゐると言ふだけではなく、それは、その人の行くべき道を示す羅針盤であります。人生の方向を示すものであります。その時々、行爲の一々を價值判斷して行くものではありません。人生の流れ、傾き當爲の方向を示すものであります。故

に、それによつて、眞に人生に徹底するか、否かと分れるのであります。だから、人生の正しき善き歩みをするには、より高きより深き人生觀を把握しなければなりません。

教師の自我と兒童の自我とが握手する處に教育がなり立ちます。握手するとは、同一になるとの謂ではありません。同程度にまで引き卸すと言ふ事でもあります。兒童の程度に合致する事によつて教育が成り立つのであります。それによつて、兒童の自我が向上し擴充されて、進展して行くためには教師は、よりよき自我の持主でなければならぬ事は既に述べた處であります。

人生觀に於ても同様であります。兒童をして、しだいに、より高き人生觀を築き上げしめるためには、教師たるものに、先づ高き深き人生觀が確立していなければならぬ譯であります。人生觀の樹立してゐる教師であつて、眞に訓育の徹底を期する事が可能であります。

第三 訓育は人生を取扱ふもの

教育すべての問題が、人生を如何に観るかと言ふ問題と離れる事のできないものであります。むしろ、それが先決問題であります。人生觀が決まつて、教育の問題が徹底したる解決のつくものと考へます。

殊に訓育は、人生そのものを直接に取扱ふものであります。之が根本義にも施設にも教師の人生觀が、たゞちに關係して來るのであります。その施設は、その人の人生觀によつて意義づけられ價值づけられて行くのであります。施設は、單なる死物であります。教師の人生觀によつて、始めて死活が分れるのであります。同じ施設をしても、人生觀の異なる甲と乙とは、その效果に於て大なる差を生じて來ます。教師が徹底したる人生觀を持つ必要なる所以は茲にあります。

猶、一言します。たとへば、算術科に於て *ten by ten* を厭世觀の持主が解決するとしても、樂天觀の持主が解決するとしても、大した變りはない譯であります。併し、訓育の根本義施設に對しては、その解決が同一であり得ないのであります。

訓育に於ては、兒童の全生活が訓育の機會であります。修身科の教授學習時間は勿論、他の教科の教授學習時間、休憩時間、作業の時間、通學の途中、家庭生活、社會生活の全部、兒童の足跡の印する處が機會であります。其處には無意識的に、または、意識的に教化作用が行はれます、教師のよりよき人生觀は此全生活を指導する力を持つてゐます。もし教師にして、よりよき人生觀を持つていなければ到底此全生活を指導する譯にはまゐりません。指導し得ないばかりでなしに、兒童を全く殺してしまふ事となります。

兒童は教師に對して、ある意味に於て絶對の歸依であります。その根本に於ては、兒童の認識體験であります。一面に於て信仰に立脚するものであります。もし教師が、よりよき人生觀を持たない場合を考へて見ると、兒童が教師を信仰しておれば、それだけ、兒童の人生觀をして誤つた方向に導きます。此點から言へば、むしろ信仰のない教師の方が兒童の爲めにはより安全であります。

第四 人生の理解觀照は自己の反映

凡て自己以外のものを見つめると言ふ事は、自己が自己の程度に應じて、自己以外のものを見つめてゐるのであります。自己認識であります。自己體験であります。讀方では自己を讀む事であり語方は自己を語る事であり、唱歌は自己を歌ふことであり、圖畫は自己を畫くことであり、他人の人格を觀ることは、自己の人格を觀ていゝ事であり、

低級なる人生觀をもつてゐるものは、凡てを低級に解するより外ないのであります。同じ事項でも學級なる人生觀をもつてゐるものは高く理解するのであります。色眼鏡を透して物を觀ると同様であります。赤き人生觀の眼鏡を掛けてゐるものには、世の中の凡てが赤く見へ、青き人生觀の眼

鏡をかけてゐるものには、世の中が、すべて青く見へるのであります。樂天觀をもつてゐるものは、世の中が、すべて平凡に見へ厭世觀をもつてゐるものには、世の中の、すべてが苦痛に見へるのであります。「神に醜なし。」とは、此邊の消息を物語るものでありましょう。

だから、訓育に携はる教師として、眞に兒童を理解し、その訓育の徹底をはかるためには、教師自身を深く深く掘り下げていかねばなりません。それによつて、この複雑なる人生を誤りなく、而かも積極的に把握して、兒童の自我を助成して、よき人生觀を創造せしめねばならないのであります。

第五 教師の創造すべき圓滿なる人生觀

人生觀によつて正確なる人生を理解、體得しうるものである以上、教師は、是非とも完全にして圓滿なる人生觀を有していなければならないのであります。

樂天主義は、あまりに人生の一面をのみ觀へ淺薄に解してゐる嫌があります。人間の生活は苦惱の生活であります。何處までも呑氣な生活ではありません。それかと言つて、悲觀主義者の様自己以外は、すべて自己の敵であつて、始終吾人を苦めつゝあるものだと考へて、早く未來に生きんとするほど、慘憺たるものではありません。

吾人の生活は、目的は自我の成長であります。自我の成長の歡喜を持つてゐます。しかし、自我の成長は努力の生活であります。樂天主義が考へる様に棚ボタ主義ではありません。棚にあるボタ餅を手に入れる特權は吾々人間に免されてゐます。しかし、寢てゐて、十年、よし百年待つても落ちて來ないのが、人生であります。努力して採るより外ありません。考へ方によれば、努力して採る事は苦痛であります。しかし努力しないで手に入れる事ができます。手に入れたならば歡喜の生活であります。苦痛は歡喜への苦痛であります。歡喜は目的であつて苦痛は方便であります。なほ一考すべきは、歡喜は目的であると言ふれ共、苦惱のない處に歡喜は生れて來ない事であり、苦惱あつて歡喜があり、歡喜ある事によつて苦惱が意義ある事になります。

かく、眞の人生は、苦惱と歡喜とを超越する處にむしろ歡喜の裡に苦惱を擁抱し苦惱の全般に歡喜の萌芽が疵護されてゐる處にあるのだと考へるより外ないのであります。

之を別の觀方によつて考へれば人生は苦惱より歡喜へ、また苦惱より歡喜へと、之を繰り返しつゝよりよき、歡喜へと到達の道程であると考へられます。よりよき歡喜への創造的人生觀を要求します。自我の成長への人生觀は、苦惱の中から歡喜を創造するものであります。凡て苦惱を生か

してそれによつて自我の成長をはかるものと見るのでありますから、創造的的人生觀と言ふべきものであります。

前にも述べた如くに、自分の心が平和であれば、世界はすべて平和に見えて、誠に愉快な日が送られます。反對にその人が荒んで来れば、くる程世の中は、不安に満ちてゐて、不愉快な日を送ることとなります。自己の周囲が歡喜であり不安であるのではなく、先づ自己が歡喜であり不安であるのであります。鳩翁道話中の二話の様に、心に父を念じてゐる息子には、すべてが父に見へます。焼餅の妻君には、すべての事柄が嫉妬に見へます。この世を果敢なんでゐる尼僧には、萬事が悲しく見へます。

かく考へ来れば、教師は、たゞ、單に、此世の中を、平凡に化し眞にその生活に徹せず、また、苦惱に引きづられて行く様では眞の人生を味得するばかりでなしに、到底人生を體驗せしめる助成者たる事が困難であります。

訓育にあたる教師は、まづ自己に於て、十二分の努力によつて、創造的的人生觀を建設せねばならないのであります。創造的的人生觀とは、既に述べた如く、自我の成長をはかるために、苦惱の生活の世の中から歡喜の生活を創造し得るものとの信念であります。此信念から湧き出た生活の體現を

爲し、兒童の人生觀を啓發して彼等にも創造的的人生觀を築き上げしめねばならないのであります。

第六 人生觀は自己が創造すべきもの

人生を觀る正しき眼は、自己の所有してゐるものでなければなりません、その眼も固定的のものであつてはなりません。兒童は成長します。世界は成長します。訓育にあたる教師の眼も成長しなければなりません。

だから、人生觀は、他人から受取つたものでは何等の價値がありません。自ら所有してゐる人生觀を成長さす事であればなりません。正しき方向に、善き方向に、なほ聖き方向に順次築き上げて行くのでなければなりません。他人の人生觀を聞き、書籍を読んでそれを知つたばかりでは、その人を左右するだけのものとはなりません。夫等を参考として、自己に所持してゐる人生觀を培い守り立て、行かねばなりません。自ら構成した人生觀のみ自己を導く力となるものであります。又助成者として價値あらしめるものであります。

訓育にあたる教師は、始終努力して、自己の人生觀の擴充成長を圖らねばならないのであります。

第五節 訓育御成者の生活

第一 自我の成長への生活

訓育に携る教師には、從來、随分重荷を負はされてゐました。即人間以上の神的生活を要求されてゐました。何處までも禁欲主義の生活を要求されてゐました。

先づ訓育に携る教師には、

物質觀から超越されました。

肉の方面を無視せなければならぬでした。

自然生活を絶對に排斥して、修行、斷食、小慾、無慾、によつて仙人生活を爲してゐるものを以て最良の教師とされました。かゝる人のみよく訓育の教師たり得るものとされたのであります。しかし、それは、人間の實相ではなかつたのであります。

訓育の教師なればこそ、猶更、人間性の眞底に觸れて、自我の成長を計つていなければならぬ筈であります。さもなければ、眞の人への丘に向つて歩みを續けてゐる兒童の自我との握手はあり

ません。従つて訓育は不可能の事となります。何處までも、訓育の教師は、人間性を握まねばなりません。

靈的生活を握らんとして努力された親鸞上人は、人間性の尊い事を絶叫されました。そして自我の極度に達しました。その大悟徹底によつて、自己を救い世を導きました。

之を以て之を觀ても、禁欲の決行による物質肉體の放棄が唯一絶對の人間生活への道でない事が明かであります。往々賣名者の中には本心に大なる慾望を持ちながら、外面に於て虚偽を繕いさも靈的生活に生きてゐる如く装ふ、以て自己を欺き世を偽りてゐるものがあります。こは、眞の靈の生活を爲さざるものよりも罪の大なるものであります。

私の謂う教師としての靈的生活は、慾望絶滅の生活ではありません。人間性の尤も豊富な慾望の尤も大なる生活であります。慾望の大なる生活と言つても自然の勝手な生活ではありません。人間の生活とは、勝手我まゝの生活ではありません。よりよき自我の成長への生活であります。よりよき自我の生長への生活とは、自然認識の生活ではありません。自然をなるべく大にして、同時にその中に大なる軌範を發見する生活であります。自然と規範との合一を凝視める自然の生活であります。誤られたる性主義では價值生活とは言へません。また墮落した自然主義では猶更價值生活であ

りません。

物質、精神、輕重はありません。自我の成長への生活は常に物質精神合一の境を凝視している生活であります。それが靈的生活であります。かく、物質、肉體、自然、精神、靈性、理性の内在一の境地への精進の生活をする事が訓育に携るものゝ、むしろ教育者としての努むべき生活であります。

第二 上塗の生活

教師は、自然を無視した生活であつてはならぬ事を述べました。従來は、此點に於て、完全圓滿何一つ缺點なき品性の持主でなければとされてきました。模範者として立つべく要求されました。自我の要求ではなくて他より要求されたのであります。

だから、教師は他律的のこの要求を容れるべく苦心しました。何處までも模範者として現れようと苦心しました。その苦心たるものは、自我の熱烈なる要求による苦心でなかつた爲めに、往々にして、一般世間に對して、また兒童に對して、積極的に模範者としての努力よりも、消極的に缺點を觀破されない様にとの努力でありました。それは、人は神でない限り到底缺點のないものはあり

ません。その缺點の多い人間が當然であるにも拘らず、何一つ缺點もなきものとして活動せしめんとする點に於て、再立しないのであります。そして、自然に消極的に、缺點を隠す事に努力する様になつたのであります。そこに生活の虚偽が生れて來たのであります。

人間には缺點がザラにあります。神でない限り完全なる品性の持主はありません。自己を省察した結果、その空虚貧弱に恐怖したとき、自我の要求によつて、之を満たすべく努力すれば、それでよいのであります。然るに、従來は直に、一時的に、なるべく無難に糊塗的に上塗りをしようと努力したのであります。

世に、老練な教師優良な教師とは、この上塗師に巧妙なる技術を持つてゐるものへの敬稱でありました。

如何に上塗りしても、それは、自分が見ても甚だ醜いものであります。況して兒童から、之を現るならば、誠に淺薄に見えます。よし自分は、満足したとしても、到底客觀的には、一層その醜が現れて、そこに自我と自我との握手はなくなります。蔑視的となつて訓育の徹底を圖る事など思ひもよらぬものであります。

第三 自己の貧弱を意識すること

訓育の困難である事や、之に携る教師によつてその成否がほど決定されると言ふ事を知るとき、まづ、吾々は、自己反省が起ります。訓育は「人格と人格の接觸にあり」「自我と自我の握手にあり」との要求をば、果して満足さす事が可能であるかその持合せがあるか否や斯うなつて來れば、誰れも甚だ心細いものであります。恐らく我は、天下の訓育に携るに十分なりと自信を持つものは、一人もなからうと思ひます。それは、ないのが當然であります。人は神でない以上、自己を満足する事は出来ません。満足し得ない處に、自我の向上があるのであります。若し自己の現在を満足する人がありとすれば、その人は、もはや成長の停止された人であり、成長のないその教師は、自ら免しても、到底兒童の訓育にあづかる事のできない人であり、（スナ）免すべくもありません。かくして、到底、訓育の教師に非ずとして、訓育に携る事を忌避しようとし、（スナ）免すべくもありません。自己の貧弱さに恐怖する人こそ、訓育に當る事のできる人であり、よし徹底したる助成者でないとしても、上塗りして知らぬ顔しているものに比較すれば、眞實に於て優秀であります。（スナ）もし、自己の貧弱、空虚、矛盾に眼がつくだけであつて、その現實を如何に生かすかの自己開拓

のない人ならば、前者の虚偽に對して眞實の生活者である優秀なる點を認むると共に煩悶に墮した點に於て未だ自我の成長への努力の足りない處は免れません。

眞の生活は、飽くまで自我の成長への生活であります。虚偽でも煩悶でも、生活の遂行はありません。訓育に對する助成は猶更不可能であります。今日、訓育にあたる教師が一方虚偽に陥り、他方煩悶に墮して小心翼翼としてあまりに小さくなつて來たのは、教師その人の人生觀の誤謬と、監督者、又は一般父兄たちの要求に無理な點があつた結果に外ならないのであります。

飽くまで訓育の教師は、先づ第一に、自己の貧弱を意識して、また成長さすべく努力する事が肝要であります。かゝる教師にして、兒童の自我を成長せしめることができるのであります。

第四 自我の成長への過程を示すこと

自我生長への生活は、時々刻々進展流動擴充されつゝあるものであります。一個人の生活を縦に眺めるならば、その流轉の形が明瞭となります。自己の不完全のみが眼につく人は、自己の生活を縦に眺める事を忘れてゐる人であり、現在にのみ執着して、過去が如何にあつたか將來如何にあるべきかを考慮の内に入れない人であり、

人間の生活は、過去現在未來の連続的發展であります。一つ一つの断絶した圓の成長ではなくて圓周の成長であります。現在は、その一局部であり一過程であります、現在は過去よりの引継ぎであり、未來への出發點であります。現實は、過去の上に築かれたるのでありまた未來への出發點であります。然るに現在にのみ執着して、現在を呪い、理想に憧憬して現在を無視するのは自我の成長を忘れた生活であります。この様な生活者は、常に、不安と失望と自棄に陥つてしまふ生活であります。

自我の成長への生活は現在を如何に生かすかの生活であります。現在の過程を如何に生かすかによつて、現在を價值づけるものであります。現在を眞に生かし得る人には何等虚偽の必要がありません。煩悶があつても失望がありません、自己の缺點ある處に戦が生れて來ます。奮闘が生まれまゝすとして自己開拓ができます。之が人生の状態であります、教師の進むべき道であります。

教師は現在の生活を結果として示す事はできません。自我の成長は無限であります。又たとへ現在の生活に不満であつても隠す必要はありません。生活そのまゝを自己人生の過程として全部示すより外ありません。自己の現在は、如何なる過去よりの引き継ぎであるか、自己の現在は將來如何なる方面に如何なる程度に成長せしめんとしてゐるものか。また如何なる程度に成長すべきものか。

を示すべきものであります。

如何にしても自己の不完全を切り抜くか、如何にして困苦缺乏を歡喜化して行くか。貧弱なる自己を如何にして豊富ならしめるかの努力が、教師の生活として唯一のものであります。茲に訓育としての教師が持つべきものであります。むしろ、すべての人の生活は、之の反覆であります。現在の自己は完全圓滿なるものでもなく、また、將來發展のない固定した貧弱なものでもありません。只完全圓滿なる人格の持主とならんがために、全力を注いでいる過程中的のものであります。訓育に於て教師の示す人格はかゝる意味に於て價值を發揮すべきものであります。無限一の人生の現實に立つて、一步一步と理想を實現せる實際を展開すればよろしいのであります。

第五 伸びんとする力の活躍

教師は既に述べた如く、自己の現在を結果として展開してはならないのであります。もし自己の現在を結果として示すならば、これは極めて低級な理想を示した事であるし、また、人の生活を固定的と見た事となるのであります。

自己の發展の過程を示す事となれば、過去の缺點、現在の不完全は何等問題にならないのであり

ます。眞に教師が、自己の一切をあくまで成長せしめんと努力を爲して苦心している人ならば、たとへ、現在に缺點ありとしても、修身教育者として適當なる人であります。

之に反して、凡ての缺陷をかくさうとして言語態度にまで、武装を爲していへる人は、たとへ現在が善に美に見えても、訓育の教育として尤も不適當な人であります。又、人としても卑しむべきものであります。

人生は、一面から見れば煩悶と苦惱であり、一面から見れば歡喜と法悦であります。かゝる人生生活現象の中に立つて、苦惱と歡喜とに生活しつゝあるものであります。吾人の努力は苦惱を歡喜に不完全を完全にする事であります。我が内部に潜める活きる力、伸びる力、成長の力を活躍さすべく努力する事であります。

要するに訓育に携る教師は、自我の成長への生活によつて自己を現在よりも、より高く進展せしめて、児童と共にその向上への道を歩まねばならないのであります。

第六節 生命の躍動への努力

第一 完成しないのが教師

「教育とは、完成した教師が、いまだ完成しない児童を導く事である。」と言ひ慣らされていますが、から訓育に携る助成者は、完成した人でなければならぬ事になります。

一體、完成した人とは、如何なる形式を具備し、如何なる内容を有している人であらうかは、いまだ、何人によつても示されていないのであります。何等の尺度たるものができていないのであります。次に思索するのは、人格が如何なる程度までに達成するならば完成と稱してよいであらうか之は逆も數量的に表現する事は、困難であります。

人格の要素たる知情意について考察して見ますと、教師の方は、ある程度まで數量的に窺知する事が可能であります。感情的に至つては、數量的に表はす方法はありません。直觀法がありますが之とても、到底、概量的のものであります。意志は感情よりも稍直觀し易いのであります。しかし、之とても極めて大略のものであり、また表面的のものであります。いまだ精神検査など言つても、定説にはなつていないのであります。

人間に完成者があるかないかは實例について考察して見る必要があります。完成した人格者は誰れでありましょう。キリストか、釋迦か。孔子か。弘法大師か、乃木大將か。之等の方々も貴い體験者であります人格より高き人々であります。しかし完成した人々ではありません。その人個人と

しては或は完成であつたかも知れませんが、之を無限の人生から見れば、その程度で終局であり得ない事になります。

また、完成の意義から考察します。完成とは、絶對を意味するものでありますが故に完成の人と言ふ事は、人間の發展、流動躍進が停止した人と言ふ事になるのであります。恰かも山の上に登りつめた形で次は降るより外ないのでありますが、一方から言へば進歩發展のない人で、教師としては——人間としても——價値のない人であります。

訓育に於ては、自然の成長への教師であります以上、自ら自己を成長せしめつゝある人で、自分であり、また、完成した教師を要求しても不能の事であるし、また完全した人とは價値のなきものであります。

第二 教へ上手よりも學び上手

「教師は、學びつゝある間よく教へる事ができる。」のであります。教師は、常に、助成者として成長しつゝあるものでなければなりません。訓育の教師として、特に成長せしめねばならない事は道徳に關する知識の外に哲學的精神であります。哲學に生きる事によつて、常に教師の生命が、生て

發動してゐる事であり、その不斷の進化發展によつて、自己を教育し開拓進展してゐる人こそ訓育の任にあたるべき人であり、所謂教へ上手よりも學び上手の人でなければならぬのであります。停止した人格者ではなくて、流動しつゝある人格者でなければなりません。

平素、精進して流動發展しつゝある人格者ならば、たとへ、幾分の智識が低級であるにしても、感情が不純であるにしても、それが不斷に進展しつゝある助成者ならば、それは人生に徹した。生きた人格者であります。

より高き人格をもつ人でも、既に人格の流動を失うた人ならば、それは既に死したる人格であること明瞭すぎる程であります。

人格の流動してゐる人にして始めて、他人を學ばしむる事ができるのであります。常に發展進歩しつゝある教師にして始めて、生命の躍動してゐる生きた人格者を創り得るのであります。要するに教師は教へ上手よりも學び上手でなければならぬのであります。

第三 方法は人格の上に

訓育の教師は、自己が完全として立つものは、既に資格の缺けたものである事を述べました。

先哲偉人の道徳的事實に感激するとき、訓育の施設を考へるとき、自己が如何に貧弱な事を自覺します。それによつて向上への努力を爲します。この成長への努力を模範として兒童の前に提供します。眞に自己の貧弱を自覺して成長への努力を爲す人——自己を深く凝視めて、自己を教育なし得る人へのみ訓育の助成者たる特權が與へられるのであります。

訓育は、術ではありません。あくまで自己成長への努力であります。自己を教育する事ではありません。方法は、その上に自ら創造されます。素より方法を無視する譯ではありません。何處までも人格の上に立つた方法でなければならぬのであります。人格の上に立たない方法は、如何にその方法が巧妙であつたとしても、それは手品師のしたことゝ何等撰ぶ所がないのであります。

眞に自己が學ぶ事となると、兒童の人格を引きあくる方法は、その間に、自然に創り出されます。自己が成長へと努力するとき、眞の方法が生れます。之と反對に、方法を如何に苦心しても、其處から人格は生れてまいりません。訓育は、科學教育とは異つて、人間の内面を取扱ふものであります。科學教育に於て如何に教材の研究をしても、自己の成長とはなりません。例へば に十に十の教材研究をしても、別に自己の成長がある譯ではありません。併し訓育に於ては、尋常一年の學級經營をするにしても自己の貧弱を自覺します。而して自己の成長をはかります。そこに人格の上

と立つた方法施設が案出されるのであります。

第四 生活が自己の成長

「小學校の先生は、非常に多忙であるから到底修養する暇がない。」と言つて、あまり修養しないのが、一般であります。訓育の教師たらんための修養は、何も特別の方案があるものではありません。修養と言へば、禪をくむ。靜座法をする。修養會に參する修養書をよむ、之等の特別の方法施設によらなければ修養はできない様に考えられ勝であります。

私の謂う修養は——人格の躍動は、即絶えざる自我の成長の施設によつて學ぶ事ではありません。吾人の常住座臥——吾人の足跡の印する處、凡て修養の機會であります。而かも知的修養と異り、特別に修養の機會をつくる必要なく、又教師も書籍も一切不必要であります。自然的現象や、社會の人事の總てが教師であり参考書であります。刻る處に吾人を練磨成長さすべく待つて居るのであります。

岡田式靜座法の創始者岡田先生に向つて「私も大に修養したいと發憤しました。しかし朝夕三十分宛の修養の時間がありません。甚遺憾に思つて居ります。承れば、先生は、朝早くから夜おくまで

指導なされて、晝食も充分にお採りになる暇がない程であるそうですが、それにしても、立派な御人格まことに、感服の外はありません。就ては、先生は、いつ修養されますか。」と質問した者がありました先生は、「私は修養に對して、特別の時間は割いて居りません。常住臥座、四六時中、一分一秒と雖も、修養の機會であります。起きて端座している間食事をして居る間、手紙を書いている間道を歩む間人を訪問している間、大勢の人々と共に靜座している間などすべて修養の機會であります。夜、寢た間も修養の機會であります。私は、修養に忙がしいので、夜、夢を見る暇がありません。」と言われたと言います。

道とは、しばらくの間離すべきものではありません。常住座臥、自我の成長への努力であります吾々人間は生活をやめる事は不可能であります。生活のある處すべて修養がある譯であります。科學教育藝術生活何れの場合と雖も道は離れる事のできないものであります。

第五 道は體驗すべきもの

岡田先生からは、開發される點が尠くありません。

「道は説くべきものに非ず、踐んで自ら悟るべきものなり」

と。げに、人格は、書籍によつて向上すべきものではなく、體驗する所に自我の成長があるのであります。

川村先生に開發される處も尠くありません。

「赤裸々に、自分を書いた積りだ。餘計な事を付け加えもしなければ、足りない處を補ひもしない。」

「私の五十五年の生活は、世間的に言へば、失敗の生活だ。けれ共、私の主觀から言へば、成功の生活だ。」

「私に三十餘年に亘つた長男や妻の病氣は、私を自由人に導いてくれた有力な動力である。」

と。「自由人となるまで」に述べられてあります。現在の宇宙觀や人生觀は、長男や妻が生命を賭して得させてくれたのだと述べられて、體驗による自我の成長の貴さが明かに暗示されています。また、

「本書の大綱は、悉く私の體驗から得た經驗であります。それ故に、何人が如何に反駁しようとも、所信を翻えず様な薄弱なものではない。」

と。この様な論理學書であつて始めて、吾人の生きた人格の血となるのであります。

訓育にあたる教師は、この様な各種の體驗を有していないと、眞の徹底は困難であります。單に

道に對する理屈を知つてゐるだけでは、訓育が上すべりのものとなります。自己を教育して、自我の成長へと努力する處に創造が行はれます。人格の躍動が行われます。道を體驗して訓育にあたらなければなりません。

第六 教師は一代弟子

すでに、大要述べて置いた通り、
「吾は完全なり。」

と、兒童の前に立つ事は、できません。兒童の前に自己の貧弱さを懺悔して、互に自我の成長へと努力せねばなりません。訓育に於ては、教師は、全く相談役であります。むしろ、兒童と共に修養すべきものであります。此態度に立つとき、始めて兒童の自我に觸れて、訓育の徹底をはかる事ができます。

岡田先生が、弟子の橋本先生——靜座の力の著書——に寄せられた書簡の一節に、

「専心御修養の効空しからず、順調に御進歩の御模様、誠に愉快に存候。易に曰く、「道は満盈を忌む。」とかや、何卒生涯生徒たるの御覺悟あらん事専念希望たてまつり候。」

と。述べられてあります。

訓育にあたる教師も、一代弟子たる覺悟修養とがなければなりません。

訓育にあたる教師は、飽くまで自我の成長へと努力しつつある生命の躍動に生きた人格の持主でなければなりません。而して、兒童と共に修養して、自我成長を樂むものでなければなりません。

第七節 教師の思想と態度

第一 新しい思想の持主

従來の教師の頭は比較的古いと言つた方がよいのであります。それは、師範教育と言ふものが新しいと言ふては、すべて恐怖して、絶対に排斥しているからであります。人間の生命にふれたものは、大抵危険なものとして、とり入れないで、硬化した概念的のもののみを學習の材料としたからであります。

師範の門を出てからは、教科書の倫理がそこ此處に樂書された位に残つてゐるのであります。而かも、寄宿舎の一隅に押し込められて、體驗を得る機會は全く覺えられなかつたのであります。

之に反して、學習者たる兒童は、家庭の人々から、社會の人々から、雜踏から、新聞書籍から、多くの新しきものが、始終探り入れられています。なほ各種の體驗を繰り返してきます。かゝる兒童の自我を動かすには、思想の固陋した教師が幾ら努力しても、頗る困難であります。もし、訓育が行われたとしても、それは、不徹底のものであります何等の共鳴も浮ばないのであります。

教師は、常に新しき思想を探り入れて、之を批判し、自己をして尤も正しき尤も善き方向に成長せしめて置かなければなりません。而して、兒童を尤も正しき尤も善き方向に暗示善導して、訓育を通して、人格の成長をはからしめなければならぬのであります。

第二 共學的態度

訓育にあたる教師は、他の一般教授に對した時の態度とは、全く變つて別人の様な嚴めしい態度をとります。恰も、警察官が、罪人を取扱う様な態度を探るものが多いのであります。今では法を以て仕事をする處でも大體な場合は、罰すると言ふよりも教導を以て目的としています。

一體、何故、こんなに嚴格らしい態度をとるのであらうか。曰く、訓育の眞先に立つものは、教師の權威であります。教師に權威なければ、訓育はなり立たない。そこで、權威をこしらえる方法

として、態々、いかめしい態度をするのであると、言います。しかし、權威は、そんな處からは生れて來ないのであります。

教師が、わざと權威を振りかざすとき、兒童は、固くなつて來ます。眞面目な態度となります。教師の命令を僥くまで守ると言ふ態度となつて、教師と兒童とは、非常に接近した様に見えますがそれは外形ばかりであつて、その内面は、之と反對に教師と兒童との間隔が離れて行くばかりであります。

教師は、一から十まで萬能者として現れようとするのが、先生氣質であります。そのためにすべての缺點を包む事のみ努力します。所謂神の如く現れようとしています。それ程でなくとも、先生だと、威張ろうとします。そして、訓育の徹底をはかろうとすると、結局唯一の武器を握り廻して威嚇します。けれ共、かゝる權威の壓迫では、逆も、兒童の自我の成長をはかる事は、斷じて困難であります。

教師の根本には、愛の情が流れていなければならぬのであります。愛で立つべき教師が權威の強迫を以て訓育の徹底をはかろうとする事は、他律教育の傳統的弊であります。

一體權威とは、教師から要求すべきものではなくて、兒童が教師の自我の成長への努力に共鳴し

憧憬し愛慕し、欽仰した時に、児童の精神上外形上に構成された傾向が權威であります。教師が自己を認めて、態と自ら建設したものが權威ではなくて、児童自身が教師の人格に畏敬して歸依した時に、一種の威嚴を感じます。それが私の言ふ權威であります。

教師が、自己自身を反省して、自己の權威の低級なる事を自覚したならば自己の人格の低級な事を反省しなければなりません。權威を押賣する前に、靜かに自己を深く高く廣くすることに努力することが肝要であります。そうする事によつて、その教師の權威は自然に湧出するのであります。

教師は、どこまでも自然の態度でよろしいのであります。前にも述べました様に教師は研究の同伴者でありますそれに拘らず教師自己が飽くまで完全無缺の完成者として、偉く現れようとするとは、甚誤つた考方であります。何處までも自然の態度でよろしいのであります。教師は威張つてはなりません。偽つてはなりません。飽くまで、教師は自己開拓に努力して、教師自己をますます高くして同伴者たることに努力することが緊要であります。助成者は、神でない以上、缺點がザラにあります、それに拘らず自己を萬能者として児童の前に立としてもそれは不可能であります。虚偽は到底包みかくすことはできません。反對に隠す程なほ現われるのが自然であります。児童は、極めて炯眼者であります。教師の缺點は、ただちに、素破ぬいてしまいます。

さて、かかる意味に於て教師は如何にあるべきか。教師は飽くまで學習者の前に生活そのまゝを展開すべきであります。而して教師の生活の眞髓を味得さすべきであります、其處に、児童は共鳴し信仰し、融合するのであります。

道德は、生活の上に創造されます。生活の上に、日日新しく伸展して行きます。日々修養すべきもので、いつが來ても完全とは言へません。何れも過程にあるもので、目下研究者であります。凡ての點に於て、教師が児童よりも先きに出でているとは言へません。ある徳目によれば、教師よりも児童の方が數歩先きに出ている事實が尠くありません。只教師は綜合的に眺め相談役であり、同伴者であり、東道者であり、先輩者であります。

教師は、何處までも、児童と共に自我の成長へと、努力することが生命であります。所謂共學態度に出づべきものであります。

第三 遊 び 友 達

教室では、先生だと威張つて、四十五分間知識の傳達につとめます。終ると、職員室へ籠城して雑誌やら新聞の小説の鑑賞やらお煙草やらに時間を費してしまふ。之を爾後六時頃まで繰返されま

す。申譯的に看護當番が、一人二人運動場におらつく位であります。學校によれば一人も見へないのこともあります。而かもその看護當番の態度が極めて恐ろしいものであります。刑事が犯人搜索のまゝであります。または、同種の種がないかと、探しあるくに過ぎません。

兒童は、一口に頭からオイコラと威嚇されるのが、怖ろしさに、教師の前では、極めて温順な態度を表現します。けれ共、威嚇も壓迫もない處では、意欲本能の自然のまゝに活動します、時々之を見せつけられて、教師は長歎息して訓育の困難不徹底を長歎息します。而かもそれ等の教師達が、大言壯語して、「教育は人格と人格の接觸なり。」と。その矛盾の甚しい事に驚かざるを得ないのであります。

兒童は、天井なき運動場の教室で、尤も人格の眞實を表現します。兒童が、飾り氣のなき眞實の表現をなせる處へ、教師の偽らない人格を表わすべきであります。そこに、眞の人格と人格との接觸があります。オイコラ式では、何等人格の生命に觸れる處はありません。眞の訓育は偽らない人格と人格との接觸融合であります。

教師は、始終運動場に出て遊び友達となることとあります。そこに、眞の訓育が行われます。教師が常に兒童と共に遊ぶためには、事務の簡捷その他凡ての點に時間の餘裕を見出さなければなり

ません。

遊び友達となることは、敢て運動場だけでは満足ができません。放課後に、休日に、山へ、川へ運動に、散歩に、遠足に、寫生に、採集に、修養に出かける事とあります。時には自分の宿所へ連れて来て、一しよに飯を食う事とあります。特殊の兒童には、一しよに寝てやる事とあります。そうして、人格と人格との融合律一をはかる事とあります。ただ、教師は壇上に兒童は床の上にお互に社着着て幾らかの間隔を置いて對座している間は、眞實の接觸は出来ません、始終遊び友達となつて他の教科の學習以外に訓育のための時間を置いて訓育に努力できる様に組織立てる事が肝要であります。それは、若き教師には危険なと心配する視學さん達があります。その意味に於て、勿論教師は眞實に徹底的に、第二ベストロッチーに生れ代らねばなりません。

第十八章 敬神の念の養成

第一節 根本義

第一 神道

現在神として祭られてゐる人々は、その當時に於て、國家の經營に、偉人傑士として威徳の發揚に努力した方々であります。換言すると天祖天照大神の御精神を自己の精神として、その發現に努力した人々であります。

神道とは、之等の人々の歩んだ道であります。國家發展經營のために、天祖の神勅を實現した歸結線であります。

日本民族の出現と共に、この神道の實現があつたのでありますから、神道に歸依すると言ふ事は祖先の遺志をついでゐると言ふ事になるのであります。廣義に解釋しますれば、祖先の遺志を繼いで國家發展のために努力してゐる事は、神の道を踐み行うてゐると言ふ事に外ならないのであります。

す。

神道は、神の創め給いて之を存續して來た事實そのものであります。その集積であります、その事實集積こそ一の軌範であります。事實即軌範の處に、その崇さを一層強く感ずるのであります。

國民は、天祖の神勅の尊さに歸依してその精神を實現せんと努力するのであります。その努力は現實に於ては、忠君であり愛國である事は言ふまでもないものであります。

現今の神道は三つに分つ事ができます。一は國體神道とも言ふべきもので、皇室を中心として、踐祚式、即位式、大嘗祭、その他、國家の儀式はすべて、この部に屬するものであります。

第二は、宗派神道と名付けて十三派あります。主なるものを擧げて見ると、純神道、山王一實神道、兩部習合神道、三教調和神道、唯一神道、社家神道、垂加神道、復古神道、宗教的神道などあります。

第三は、神社神道であります。之は國體神道と同一歩調をとるものであります。而して、我國成立、經營、發展と密接なる關係あるものであります。

第二 神社神道と教育

宗教局は、文部省にあつて、神社局は内務省にあります。而して、夫等の管轄、範圍が宗教局は第二の宗派神道に屬する分でありまして、宗教を認めてゐる神道であります。第三の神社神道は内務省の神社局が之を取扱ふ様になつて居ります。

だから、官幣社、國幣社、縣社、郷社、村社等にいたる分は、内務省の管轄であります。

猶、茲で明かにして置きたい事は神道を分つて崇祖神道と、自然神道との二つに別れる事であり、また、崇祖神道は、人を神とせるものでありまして祖先崇拜と同一義となるものであります。自然神道は、自然物を神とせるものでありまして、自然崇拜と同一義のものであります。自然神道の中には自然そのものを神とせるものと自然の中に哲理を見出して、その哲理を神とせるものとあります。また、人と自然とを結合して神とせるものもありまして、判然とはいたしませぬが、大約することは可能であります。

また、儒教佛教の影響を受けた俗神道と言はるゝ本地垂迹説や垂加神道と、何等の影響を一切受けないで、古來から傳つてゐる神道そのまゝの古神道と言はるゝものとあります。

小學校に於て、敬神の念の養成として崇敬するものは、神社神道でありまして、内務省神社局に取扱つてゐる神社に對してあります。政府の行政上、現今までは、十三派だけを宗教と認めて

ゐるのであります。天理教も最近に宗教と認めたのでありますから、漸次増加して來る譯であります。之等に對して、學校教育が關係づける事は、今日の場合、信教の自由を免されてゐる以上、面倒な問題が起つて來ますから觸れないのがよろしいのであります。

第三 神社神道と宗教

宗教には、第一共同的に行ふ儀式がなければなりません。神社は、一の儀式が具はつて居ります。第二はこの共同的儀式を行ふ場所が必要であります。寺院、會堂と言ふ様なものであります。社は之に當るものであります。——勿論、社は全然儀式のみを行ふ場所でない事は言ふまでもありません。——第三は、開視が必要であります。凡ての宗教には、開視があつて、その顯現によつて布教されたものであります。然るに茲に至つては、必ずしも同一でない。しかし、神社神道は、だれが開いたと言ふ事はない。民族の共同意識の自然の現れであります。すべてが開視でありすべてが宗徒であります。茲にまた文化宗教として、尊い處があるのかと思はれます以上の要素を持つて居りますから、神社も宗教と言ふ點に於ては同様であります。

概觀的に見れば、靈的のもので、自己より優越なるものを尊信するのが宗教であります。故に之

を崇拜歸依する人から言へば神社神道も宗教であります。神社神道は、宗教學上から言へば神人教でありまして、人と神との間に判然たる區別を認めないものでありまして、神は人として表象せられるし、人は神の系統をひいてゐる神の子孫たるのであります。

第四 神社神道に對する學校の態度

以上述べたる如く、神社神道は、宗教としての性質を充分に具へて居ります。然るに、我國の行政上の政策として、宗教から離して内務省の神社局で取扱ひ道德の對象として祭祀を行ふてゐるのであります。

之は今日國家として、信教の自由を免してあるし、又一方に於ては國家組織の上から、之を重視しなければならぬ點などの事情に起因するものでありますが故に、學校としても、道德の對象として取扱ふより外ないのであります。

神社は、既に道德の對象としての性質も充分に具へてゐると共に、一方には、宗教としての性質を充分に具へて居るものであります。そこで、現在の一般社會の實態は、一面には、道德の對象として奉仕し、一面には宗教の對象として歸依してゐるのであります。學校が取扱つてゐるものは、

前者であります。故に神社は兒童又は職員として學校から参拜するときは、盛典の對象となるのであります。個人として参拜したるときはその個人が宗教心の旺盛なる人であつて、信仰によつて歸依したとき、これは、宗教として取扱つた事になり先祖、功績者などとして崇敬した時は、道德として表現した事になるのであります。

◇参考

□他宗教との關係——小原國芳先生著 修身教授の實際——

己に述べたる如く神道と神社とは密接の關係あるに拘らず、この兩者を法令上區別してある處に苦しき矛盾がある。誤解してはいけない敬神崇祖愛國無論よいことである。國民の何人かこの念のない人があらう。もしや神道家が自ら最も忠君愛國者であり他宗教徒が薄いものとするならばそれは偏狹な間違つた考である。忠君愛國と密接の關係のあることは明かであるが、ただ、そのみが唯一の道ではない。「日本は神國なり。教師は神道家なるべし。」と云ふ流の考を有する人々はこれは憲法で信教の自由を與へられて居る大精神の分らぬ人である。天祖を皇祖として尊崇せぬ人はあるまい。尊崇だからとて佛教やクリスト教の信仰と矛盾するのでも何でもないけれども天

祖を以て自己の主護神とし、宇宙の創造者とし、萬能の神、救済の神とせよといふことは萬人に強いられる筈のものではない。もしや、神道を以てすべて國教化しようといふ人があり、又反對に他の宗教の信仰によりて、神道を否定する人がありとせば共に誤れるものであらう。

「二見ヶ浦に艦隊が碇泊せる時に、神宮に参拜することゝなつたさうだ。問題の波多野大佐は行く事を肯んぜなかつたといふ。そこで他の將校は非國民だとなじつたといふ。丁度その日降雨のため参拜は中止されたといふ。大佐曰く、「郷等の信仰はかくの如く薄弱なるものか」と。

今私はこれを靜かに評して見たいと思ふ。私は衆と共に、皇祖を参拜することに同ぜられることを波多野大佐に勸めたいと思ふ。自己の歸依の對象として（宗教上の神として）信仰するかせないかは各自の自由である。然し國家の皇祖として尊崇することは（道德的に）國民として欲しいことである。しかし行かぬからとて、それで非國民だとなじつた人々も偏狹である。大佐自身の心的状態は他人には分らぬのだし。衷心眞に深い尊崇心があるのかも知れない。且つは他の將校達とても、自ら嘲りながら降雨位で中止する位ならその尊崇心の程度も思ひやられるから。決して淺薄に不忠呼ばはりをしてはならぬ。

◇ 信教の自由

——小原國芳先生著 修身教授の實際——

信者の自由といふことは、よく／＼理解して欲しい。無理に神社参拜などを強いるが如きは却つて宗教の本質にも悖るものである。憲法の問題を蹂躪することである。

「また／＼波多野大佐の例を引かう。吳の某小學校の父兄會で、教師を桃山御陵、伊勢大廟へ派遣して御守札を子供の数だけ頂いて來て、子供に與へて以て敬神の念を養はうといふ案が出たのださうだ。信教の自由を貴いものと信じてる大佐は、父兄の役員の一入として反對されたさうだ。端なくもそれが海軍側學校側の問題となつて、待命だの休職だのになつた筈である。日本の教師や軍人の宗教學的知識のないには驚くの外はない。兄波多野精一博士は日本での宗教學の權威である。高弟石原博士を遣して「男らしく戦へ」と弟の大佐へ告げられたと聞く。もつと／＼日本の先生方の深い／＼研究を望む。

第五 敬神の念養成上の一般的注意

1 敬神の念は、既に述べたる如く、衷心より溢れ出でたる誠愛忠順の至情から、國民的祖先である、皇祖皇宗を敬い、忠勇賢哲の跡を慕い、祖先の宏業懿徳を頌し、之を繼承して、更に大成を期せんとする精神の實現であります。故に、形式よりもその心情を尊ばねばなりません。

故に精神の發現が形式となつて表はれ、形式的の施設によつて、より精神の成長をはかるものであることに常に注意すべきものであります。

2 皇室の御敬神に就て、充分に知悉せしめて、我等臣民にその範を示し給へる事を憶い、臣民として、此點に感激して、一層敬神の實をあげる事が必要であります。

3 宗教としての神社と、道德としての神社と誤つて混同されやすいものであります。學校としては、その施設の上に、實現の上に、留意するばかりでなしに、兒童にも、よくその心持を自覺せしめて置く事が肝要であります。

4 情操陶冶である上に於て、教師は特に神社に對して、濃厚なしかも正しい信念と敬虔の念がなければならぬ。これが内になければとても、此情操が養へない。大抵な施設は形式化されてしまふ。自己を反省してこの信念と情操を充分に養はなければならぬのであります。

5 祖先崇拜と神社崇拜とは、その根元に於て一致すること。次に神社崇拜と忠君愛國と一致することを味得せしめねばならないのであります。

参考

◇教科との連絡

修身科

卷	課 題	目 次	努 力 點
卷三	一五 皇 大 神 宮	神宮の由來と皇室國民の崇敬深きこと	
卷三	一六 祝 日	祝日の趣旨を知らしむ	
卷四	一 明 治 天 皇	御聖徳御遺業を知らしむ	
卷四	二 能 久 親 王	御勳功を知らしむ人格の神	
卷四	三 靖 國 神 社	由來及皇室國民の尊崇	
卷四	二三 祝 日 大 祭 日	祝日大祭日の趣旨を知らしむ	
卷六	一 皇 大 神 宮	皇室國民の尊崇深きこと	

讀 方 科

卷一	七 オミヤオテラ	お宮の存在と禮拜の形式
----	----------	-------------

卷二	一三	お正月	お正月の飾り物と氏神参拜
卷二	一六	私の村	鎮守の森と参拜
卷四	一	お祭	氏神の由來と参拜の心得
卷五	一	大日本	大和民族の御先祖は天照大神
卷六	二六	伊勢神宮	本宮社殿の構造と國民崇敬の實際
卷八	三	競馬	氏神の祭事
高二	四	鎮守に詣でて	産土神の趣旨と参拜の心得
高三	一〇	神社	神社の本質を知らしむ
高三	一七	鎮守の森	町村に神社のある由來と参拜の心得

歴史科

尋上	一	天照大神	皇大神宮の祭神と皇室との關係
同	三	日本武尊	神宮参拜の御精神
同	八	天智天皇と藤原鎌足	淡山神社のこと

同	一〇	和氣清麿	宇佐八幡の神託
同	一五	後三條天皇	石清水八幡行幸のこと
同	二〇	後鳥羽上皇	實朝の鶴岡八幡宮報告参拜
同	二二	北條時宗	龜山上皇祈願と神風
同	二二	後奈良天皇	朝廷は儀式と神宮崇敬
同	五一	明治天皇	五ヶ條御誓文と神祇に誓はせ給ふ
同	五二	今上天皇	御即位の禮と大嘗祭の概要

第二節 施設の實際

第一 伊勢大神宮尊崇

甲 伊勢大神宮遙拜

一 目的

伊勢大廟を遙拜する事によつた、皇太神宮、豊原大神宮の祭神たる天照大神、登由宇氣ノ神を尊

第十八章 敬神の念の養成

崇し、報本反始の、誠意を致し以て、子孫たるものは、その遺風を顯彰し、遺訓を紹述し、忠君愛國孝敬友愛の道をつくし、自我の成長をはからんとするものであります。

二、高 情

毎朝洗面後直ちに東面して、最敬禮を爲し遙拜する事であります。

この際、尤も大切なる事は、至情の發露と言ふ事であり、從來の教育が偏知教育に流れてい
た教育を受けた教師自身でありますから、今日の兒童教育が眞に、兒童の情操を陶冶して行くに充
分であるとは言へないのであります。故に、教育自身に、敬神の態度が養われていないから、學校
教育に於て、敬神の念の養成に大なる計畫をしてゐる處があつてもこの割合に、事實の上に効果が
表われていないのは、茲に原因するのでありましょう。殊に今日は、中等學校入學準備教育のため
に一般の偏知教育に傾きつつある事は、まことに國家の爲め遺憾な事であります。

先づ教育が、その根柢たる信念と情操とを養ひ、一方に於ては、不知不識の感化を覚え、一方に
於ては、模範を示し、知的開發と共に、自發的情操の發動にならなければ、その價値は甚薄いもの
であります。

學年は、兒童の感情の發露の傾向を見て、然る後に實施するのが大切であります。勿論、それま

では各種の方法によつて暗示と、刺戟を與えなければなりません。また一方に於ては、家庭に於
て實行せしむるものでありますから、家庭と連絡する事も大切なことでもありますので、大體に於て
尋常五學年位から實施が可能であると信するのであります。

平素の教育に於ては、自我の命令は、神人合一の境に至つて尤も價値を生むものである事に氣付
かじめ、常住座臥神の自我に合致せんと、自我の成長に努力するのである事を徹底せしめる事によ
つて、我祖先である神の自我を尊敬し崇拜し、之に到達せんとし、之を實現せんとする態度になり
得るのであります。この點に、平素心的傾向をつくる事が肝要であります。

學校を離れての學校教育は、その指導に困難であります。家庭訪問により、朋友により、本人の
發表によつて、實際の狀況を知り、それによつて順次、內的に指導して行かねばなりません。

乙 伊勢大神宮參拜旅行

本項については、修養旅行の所で述べる事にしますから参照されたいのであります。

参 考

◇神社並に修學旅行 —— 群馬縣 松本市松本小學校 ——

一、祖先崇拜は我國民の特有にして又忠孝の基なり而して、この思想感情の涵養は實に我國民教育の重大事件たり、本校は此趣旨により兒童をして神社参拜し充分に敬意を表せしめ常に崇祖心の養成に務めつつあり。

一、邦家に一大事ある毎に長くも天皇陛下には親しく伊勢大廟に御参拜し若くは勅使をして奉告祭を行わしめられる。茲に報恩反始の御聖慮を拜察する毎に未だ嘗て感泣せずんばあらず我れ等臣民たるもの豈聖旨を奉體せざるべけんや吾人は實に伊勢大廟に参詣し建國の往時を偲ひ更に皇室の尊嚴を知るを得べし。

されば我國民は概ね一生一度の参拜を行ふ習慣あり從來（脱け詣）と稱し別に家人の承諾なきも大廟参拜は自然に黙認せられたる程にて殆んど我が國風なりき。

一、諏訪明神は信濃開拓の神健御名方命を祀り現に官幣中社にして信洲一の宮と稱す我等信濃人士の此に参拜するは又報恩反始の誠を致すと共に敬意を表する所以なり。

一、國民教育期に在る兒童をして伊勢大廟又は諏訪明神に参拜せしめ親しく森々たる境内を踏み崇嚴なる、詞殿を拜せしめば冥々裡に於ける不言の感化は實に生涯に亘りて消滅せざるべし、況んや其往復の途上文明の設備を定め或は山川の形勝を探る等大に見聞を廣め知識を増すに於

てをや。

一、本校は以上の趣旨に基き神社参拜を以て修學旅行の本體として尋常六學年兒童をして諏訪明神に高等二學年兒童をして伊勢大廟に参詣せしめんとす。

尙出發及歸校の際は校長より一場の訓示あり翌日参拜及旅行の報告會を開會するを例とす

第二 産土神祭参拜

毎年の例祭には、各地とも既に参拜を行つて居ります。然るにとかくこの参拜が、不徹底に終り勝ちであります。

その原因はいくらかもある事でありましょうが、第一その祭式が宗教的儀式であるか、道德的儀式であるかが指導者に徹底してないからでないかと思われれます。

宗教的儀式の如く考へ、申譯的に参拜するのではないかと疑はれるのを見ます。眞に我國體を知り我國の歴史を知り神社の由來を知るときには到底今日の様な参拜では満足できない筈であります。

第一先づ教師が充分なる自覺と敬虔の念を養う事であります。神社の前で拜禮する事を、何だか

くすぐつたい様な感じがして、あたりに人の有無を見廻すと言ふ様では、児童を引卒して参拜しても何等の效がありません。

第二は、前日又は當日——現地訓話が尤もよろしい——神社の起源、産土神の由來、皇室の神宮神社御尊崇、郷土の人々の崇敬、祭式の所以、参拜の形式、之が精神、平素の心得等を訓話し、神社に關する一切の知識を明瞭にし、一切敬虔の情を高潮せしめねばなりません。

第三、参拜は教師引卒して参拜するがよろしい。之は一面敬虔の情操の陶冶でありますから、第一は共鳴さすと言うことが尤も徹底した方法であります。先づ教師が敬虔の情操に溢れてそれより發動する言語動作は直ちに児童が精神的に形式的に共鳴するのであります。學校によつては、隨意に参拜せしめる様になつてゐる處もありますが、之では、眞に情操陶冶は困難であると思ひます。

當日自由出發に際しては必ず清水にて含嗽をさせ、神社に到着すれば、何隊かに別れて必ず手を洗わしめる事でもあります。之が準備は豫め學校から用意するか、又は神社總代、祭典係などと談合の上設備して貰つてもよろしい。

身を清める事は、即心を清める事でもあります。身を清める事によつて雜念を去つて、一意専心神に對して至情をあらわす準備であります。之を教育上から見れば、情操陶冶の一の手段であります。

自我の成長をはかる一つの仕事であります。それが、また、直ちに神への奉仕の準備であります。勿論祓がありました、もろくの汚れが除かれる譯ではありませんが、それよりも先づ、自進的に自らが自らを淨める方法をとらす事が大切であります。

神前に整列終れば、敬禮に引續いて清祓を受けます。次に校長又は神官によつて祝詞を捧讀します。この間最敬禮をします。職員總代児童總代玉串奉奠して式を終ります。

供物を児童に分配する處があります。之は、結構な事と思ひます。儀式が道德的儀式であると同様、この供物とその意味でありたいと思ひます。受取つた後、又は持歸つた後、即児童の方に於て宗教的に信仰する事は自由であるべきであります。

参拜はなるべく祭式の前後にするのがよろしい。當日は、神官の方にも非常に多忙でありますから、學校の方へ十分な手をつくして貰ふ事が不可能であります。此意味に於て學校によつては前日に参拜する處もありますが、矢張り當日が尤も感情陶冶に適します。

中には、児童も祭式に参列する様になつて居りますが、祭式が随分長時間に亘りますから、低學年には不適當であります。それで各學年から總代を出して参列するのがよいと思ひます。

第三 祈年祭、新嘗祭參拜

この儀式の當日も參拜いたしますが、産土神祭のときと同様でありますから省略します。なほ當校は國幣中社忌部神社の例祭にも參拜することになつて居ります。

第四 入學、卒業奉告祭

一、目的

入學、卒業は、兒童にとつては一大事であります。之を神明に奉告し、奮闘努力して神明の意志に副わん事を誓わしめるのであります。兒童の自我をして神の自我と握手する情操と意志の奮起を促進せしめんが爲めであります。

二、方法

入學式、卒業式終了後學校長及擔當教員同列にて産土神を參拜します。
神前拜殿に整列し、神官の擧式の辭について

積 祓

神官奉告文朗讀

神官拜禮

學校長拜禮

兒童總代拜禮

神官の挨拶によつて、式を終ります。此際兒童にも奉告文を朗讀することもよい事であります。神官の厚意により、兒童一同に對して一場の講話が願へれば猶更結構であります。之等に就ての詳細は奉仕生活の處に譲ることにして茲には省略して置きます。

第五 招魂祭參拜

各市町村には、招魂碑が設けられてあります。而して在郷軍人會が主催となり、市町村より補助をうけ設備萬端ととのへて、その祭典を行う様になつて居ります。

この際は、各學校に對しても夫々招魂祭事務所の方から招待狀又は參列案内狀が發送せらるゝ様になつて居ります。此際、兒童をして參列せしめる事は、教育上意義のある事であり、兒童に對してはその趣旨を講話し、よく、精神的に徹底せしめる様取計わなければなりません。町村によ

つては校長兒童總代が祭文朗讀及び玉串奉奠の順序になつております。時間さへ免すならば之を實行したいものであります。

我校は、市内に於ける中等學校、小學校全部と共に参加する事になつていゝ關係上、その形式が極めて簡單になつて居ります。之は止むを得ない事であります。

第六 文字書奉納

甲 連板文字書奉納

敬神の念を養う一方法であります。之は從來あまり行われていないもので、ある地方には盛にやつている處もあります。

連板に文字を書きしものを奉納するのでありますが、之には相等經費がかかるのであります。

連小屋は奉納する連板の數によつてその大きさが定まる譯であります。

丸木柱の五寸徑高さ一丈位のを柱として一間おきにほりたて上下二ヶ處に貫を通し、棟木で固め柱毎に二尺位の梁木を渡して板又は亜鉛板を以て屋根をふきます。棟木には連板を掛けるべく曲釘を配置します。

之が經費は寄附によるが尤も適當であります。學校の經費では支出の道がありません。建設なり跡仕末は學校の方で兒童の手によつていたします。

連板は幅六七寸、厚さ五分長さ四尺乃至四尺五寸のものを用います。之は、奉納せんとする兒童の負擔とします。修了後は自宅に持歸り床に掛けて置く必要上その方が取扱いやすく、又効果も多いのであります。

連板には清書せしものを貼りつけるのであります。之を清書する際は、手を清め口を嗽ぎ、筆硯を洗い清め、清き水を入れ墨を磨り至誠以て淨書します。淨書すべき文字文句は兒童之を選択し教師に相談の上決定します。なるべく神に關係したるものがよろしい。

至誠神に通ず

神明八紘に輝く

少年老いやすく學なりがたし

朝な／＼みやの神にいのるかな

わがくにたみを守りたまへと

常しへに民安かれと祈るなる

第十八章 敬神の念の養成

わが世をまもれ伊勢のおほかみ

天つちの中にみちたる草木まで

神のすがたと見つゝ畏れよ

目に見へぬ神の心に通ふこそ

ひとのこゝろのまことなりけれ

敬神 崇祖

忠孝 一致

忠君愛國の權化

神人接觸同交

懿徳功績偉績崇敬

奉納は、宵祭と當日と二日いたします。奏納者は拜殿に参列し奉告祭をします。

終つて之を連小屋に掲げます。二日間奉納する事によつて、一方父兄をして之を觀覽せしめて父兄の向ふ心をすゝめます。一方兒童は敬神の念が向上することは勿論、これによつて、一面精神統一ができて、性格に一轉換が行はれる兒童があります。非常に不勉強であつたものが勉強しだした

り粗暴なる兒童が非常に温順になつたり輕卒なるものが沈着になる等精神轉換が行はれます。

終了後は、家庭に持歸り、柱かけとして一ヶ年清淨な處にかけ置きます。時々反省の資料とします。父兄も之を利用して、敬神の念、勉學品行の向上を圖ります。たしかに効果のあるものである體験を持つて居ります。

乙、文字書行燈奉納

之は、地方の小學校に於て適當であります。地方に於ては宵祭りに數百の行燈を奉納する様になつて居ります。この行燈に文字書をして奉納するのであります。その一般的取扱に於ては、前者と同様でありますから省略します。

すべて、之等は、精神的のものでありますから、要は指導者にあります。單なる形式に流れて成績をとらうと言ふ様な事に止まつてはなりません。飽くまで敬神の趣旨にさう様指導せなければなりません。

第七 毎月神社参拜

毎月一回神社参拜を爲す事も大切であります。兒童數の少き處では學校に集合の上、一同が参拜

するのがよろしい、兒童が非常に多い處や各地別に適當な神社があれば地方別に参拜するのも、一つの方法であります。

當校は高等小學校で、各地別から兒童が昇格してゐる關係なり且つは兒童數非常に多數にて、到底一時に参拜できないので、産土祭以外の毎月一回の神社参拜は、各地方自治團の事業として數回に分れて實行して居ります。その方法は、今迄述べ來つたものと大差ありませんから省略して置きます。

第十九章 祖先崇敬の念の養成

第一節 根本義

第一 我國の家

我國の家族制度に對して、早晚、羅馬の家族制度の破壊の徴をふむものとの不安をいなくものと、今一つは、不安を抱くばかりでなしに、不良のものとして、國家を破壊するものとして、この家族制度を呪咀するものが生じて來た事であります。此時に際して、教育者は、確固たる信念を以て、教育の實際に當らなければならぬのであります。

従來の家族制度。それそのものには何等の缺點のないものであつたとしても、世の推移と共に、自我の成長を圖らなかつたものが、勝手に、家族制度を亂用して、自利主義的に自己の権利の主張のために悪用された點を認めるには十分な事實があります。しかし、それは家族制度そのものに缺陷があるのではなく、道德教育不徹底の結果、自我の特殊方面のみの成長に努力した結果に外ならぬのであります。

家族制度は、生活型式として尤も根本的のものであり、尤も優秀なるものであります。その基調であり典型である生活型式を呪うと言ふ事は、的のはずれたものであつて、その生活型式を悪用した自我の所有主を撲滅すべきであります。それと共に、一方道德の向上をはかつて、この優秀なる生活型式をして益その價値を發揮せしむべきであります。

家族制度は自我の差別即平等をして尤も的確に實現し得べき生活であります。特殊即普遍が圓滑に實現される生活であります。親と子は申すに及ばず、祖父母と孫とは勿論祖先と子孫、所謂上下との關係は差別的であり平等的であり、特殊的であり普遍的であるのであります。自我の全的要求の尤もよく實現される處であります。

家長は家長としての特殊に立つて居るが、それは家と言ふ、換言すれば、家長と家族との全員の普遍に立つたものであります。家長としての家長權行使は家族の普遍に妥當する權利の行使であります。家長の自我の發動は、家族を無視しての要求ではなくて、家族の心を以て心とした發動であります。他の言葉で言へば、家長の要求は愛の要求であります。一方に權利をふりますがその權利は義務の上に立つてのものであります。故に差別的行動であつて、それが而かも平等たり得るのであります。家族から言つても同様であります。家族權の行使は家族と言ふ特殊に立つてのものであります。

れども、その特殊は家長家族の普遍妥當を無視したものではありません。家長の心を以て心として他の家族の心を以て心とした自我の要求であります。換言すれば權利と愛との二面からの要求であります。家族としての權利の主張は家族たる義務の上に立脚してのものであります。

かく家族制度は、この自我の全的要求が尤も圓滑に行われ易い生活型式であります。それは、眞自己を知るとき、自己は特殊としての自己ではなく普通の中の自己である事を知るからであります。普遍の中の自己とは、凡ての生活型式がそうであります。尤も、それが直接に密接に繋がつてゐるのがこの家族制度による生活であります。所謂血族團體であります。切つても切る事のできない團體であります。單に利害關係によつて結合してゐる社會や、契約によつて成立してゐる世界などとは趣を異にしてゐるからであります。

自己は父母の一部分であり、祖父母の一部分であり祖先の一部分であり、子への、孫への、子孫への根元であります。自己は、孤立した特殊ではなく、家と云ふ一の總合の中の一部であります。家がなければ個々がなく、自己の自己ある事によつて家があるのであります。普遍の中の特殊である事を自覺する事によつて、眞にその家を知る事ができるのであります。

第二 眞の自我の生活事實

廣義の家庭生活は差別即平等の生活であります。此の時の現れが眞の自我の生活であります。商人が暴利をむさぼつて迷惑をかけると言ふのは純眞な自我の生活ではありません。他國人を排斥して自國の利益のみはかろうとする事は、純粹の自我の要求としての生活ではありません。

親は自分が食べなくても、自分が着ないでも、子が食べ子が着て満足する事によつて自己が満足するものであります。自分が學力のない事を以て不満を感じこれによつて、飽くまで、自分の子には、十二分の教育をしようと努力するものであります。之が親の情であります、自分の心を以て子の心とするのであります。親の自我の中には、長上としての、親としての自我のみならず、子としての自我が含まれているものであります。差別的方面のみならず、平等方面の活動の合一した處に眞の生活の事實があるのであります。親と子と同一體の生活が家に於ける眞の生活の實態であります。

子としても同様であります。自我の成長しない内には、親の心も汲み兼ねますが、だん／＼成長するに従ひ、自己の活動が親を他處にして考える事が出来ない様になつて來ます。自分が食べるよ

りも先づ父母に勧めます。自分が着るよりも先づ老人に柔かい温かい衣服をすすめます。精神的にも同様であります。之が子としての生活の實態であります。中には親をいぢめると言ふものもあります。それ共、それは、自我が成長してないからであります。自我の平等を主張したがる子であります。共、其處に差別を認めない譯にはいけません。それは世間の見榮とか、義理とかでなく、そうしなければいけない自我の要求であります。

この自我の要求が縦に上に向つた時、祖先を崇敬しなければ居られない事となつて來ます。之が横に擴充されると、他人の人格を尊重しなければ居られないものとなり、之が縦に下に向えば子孫愛護の要求となつて來ます。此家庭の生活、家の生活が四方に擴充された人間性こそ眞の人間生活活であります。家の生活が、社會の、國の、世界の生活の基調であると言ふことは、差別即平等、特殊即普遍が尤も濃厚に習慣づけられ尤も順調に發達するからであります。

だから、之を呪う處か、飽くまでその効果價值をあげる事に努力して、生活の各型式の尤も貴重なる基調とせなければならぬのであります。それによつて、ますます家の生活は成長して行くのであります。

従來、親が單なる差別主義に立つて、平等を無視した生活が、處々に行われた結果、この生活を

呪う様になります。一方に於ては、子として單なる平等主義に立つて、差別を無視した生活が處々に行われた結果、この生活を呪う様になつたのであります。親は子の人格を無視して親の権利のみを主張し、子は親の人格を無視して子としての権利のみを主張したのであります。之は、すべて家の生活そのものが悪いのではなくて、家長家族の自我が眞に徹していなかつた爲めであります。平等即差別、普遍即特殊、現實即理想の自我の創造成長によつて、尤も家庭生活に於て生活美を發揮するものであります。祖先崇敬は、この生活美の中の一事實であります。

第三 祖先崇敬の動機

〔恐怖の念〕 祖先としての靈は、之を崇敬しなければ、そのものに對して苦痛を與えるものであるとの念から崇拜する様になつたのであります。今もなほ原始的祖先崇拜の考のものとおつて、易などによつて、先祖がたつて病氣になつたのだと言ふ事を信じているものがある位であります。

〔愛敬の念〕 しだいに自己を知つて見ると、自分は祖先の一分身である事を知り、實際親の心情行動を見ると、死んだ後と雖も害を及ぼすと言ふ様には思われぬ。そのみか、祖先の靈は却つて吾々の害をのぞき幸福をすすめる加護者である事を知る様になつて來て、そこに愛敬の念い

ら祖先を崇拜する様になつたのであります。而し、之れも、その根本立場は、自利主義であつて、自己の幸福をすすめて苦勞を免れしめんためのものであります。

〔報本反始〕 單なる利己的動機ではなく、自分は祖先から出たものである。祖先は自己の本であり、始めである。だから祖先を崇敬すると言ふ事は、自分を幸福に導くとか、自分に苦痛が來ない様にするとか自分に來ている苦痛を取り除くと言ふ事ではなく、單一なる本に報い始に反るの思想に基いて崇敬しなければならぬから崇敬すると言ふのであります。全く自然の人情から出たものであります。

〔自我の崇敬畏敬の念〕 人は、自己よりすぐれたるもの、優秀なるもの、高貴なるものに對しては、すべての利害關係を超越して、精神的に、尊崇し畏敬する念を起すものであります。之は自我の本然の姿であります。自己より以上のものを畏敬し、一方には依頼しようとするのが自我の本然の姿であります。すべてを平等に見ずして、必ず差別的に優越者を見出します。始めて之に依頼しようします。進んでは、その如くなるようと努力します。それに合一せんとします。而して自我の成長をはかります。

幼児の見る優越者は父母であります。他に何者もありません。而して、之に依頼しようします

進んでは、その優越に對して尊崇し之に倣はんと努力します。進みては、靈的のものに對して、特に畏敬の念を拂う様になります。そこで尤も關係の深い、親から進んで、死んだ祖先を崇拜すると言ふ事になります。恩に感謝し、その返済としての崇敬以上に、その靈の優越を認めて崇敬するのであります。

國の祖先崇敬は、巧利的に考えたものでもなく、哲學的に哲理の上から考えたものでもなく、その根本は、そうしなければいけない人情の自然に立脚したもので、それがやがて、結果に於ては、自己に幸福なものであり、哲學的に眺めてこの軌道に合したものであり、事實即規範現實即理想のものでもあります。

第四 祖先崇敬は自己がよき祖先となるにあり

祖先崇敬は、その本體は、祖先に對しての奉仕であります。祖先に對して至情を捧げる事であり、至情を捧げるその第一は祖先そのものが生ける時と同様に尊崇する事であり、一方祖先の遺志を守ると言ふ事も、祖先に對する崇敬であります。祖先は子孫の繁榮と言ふ事が、大なる自我の内容として保たれているのであります。その遺訓を守つて實現する事は、祖先の満足する事で

あります。即、自己がよき祖先となる事であり、祖先の自我の要求に合一して、自己の實現をはからんとするものであります。そこに眞の祖先崇敬があります。單に祖先に對して祭祀をしただけで自己がよき祖先とならんと努力しないで、それで責務終れりと考へてはならぬのであります。いまだ家の觀念が明かに意識されていないものと言ふべきであります。家の觀念が明瞭になれば、ただ、祖先に仕える道は子孫に仕える道である事を知るのであります。

第五 祖先崇敬は精神的に

すべての奉仕は、精神的であるべきは言ふまでもありません。けれ共、今日までの状態を見ると全く形式に墮落してゐるのではないかと疑はれる場合が尠くありません。從來の教育が、知的教育に流れて眞の情操發露に努力しなかつた結果でありましょう。また最近に至つて極端に形式を無視して精神さえあれば、形式は絶対に不必要である如く論じてゐるものがあります。精神の發露は形式に於て必ず爲されるものであつて、之なくては價値の薄きものであります。勿論、精神なく形式あるものは何等の價値を認む事ができません。精神あつて形式なきは、前者より勝る事言ふまでもありませんが、精神、形式とも兩全たるものに比較すれば完全でない事言ふ迄もありません。

ん。形式に墮する事も不良であると同時に、精神にのみ偏することも又完全ではありません。何處迄も精神に立脚して、その發露がそこに形式となつて現はれる様努力せなければなりません。その趣旨さえ失はないならば供物の多少はともかくも、先づ第一にと言ふ事や、生前好みものとか、香花とかは供えずにいられない心持になる筈であります。

そうなれば、精進する事になります、齋戒沐浴して、一心専念となり祭壇を掃拭し清淨なる處へ靈を迎え、その風姿に接して、香花供物を供えて、その靈を喜ばしめ慰めるのであります。之が至情の發露でありたいのであります。

参 考

□感謝 西晋一郎先生著 倫理學の根本問題

——思とか恵とかいふものに對して感謝の心は發するが、感謝は本に反省する情なるが故この情からして恩、愛、惠の真相にも達することを得る、感謝の情は必ず其對象を敬愛する情として現はれる。敬愛は人が其本原に還へらんとする希求である。父母は我身の本である父母に感謝し之を敬愛するは我身の本に歸一する心である。凡て本に歸一するを順といふ。天地は群類の本である。天地に感謝し天地が感謝敬愛の對象となるとき宗教が發する。感謝敬愛の發するは自然には

父母に對してである、これ孝の端である、故に天地に對するときはも自然に對するときはも自然に之を父母の如くに心に描かく、天父と呼ぶは此自然の情をそのまま言葉に表はしたのであろう。宗教とは神明即天父に順なること、天父に孝なることである。これ孝の理が宇宙至上の理なる所以であつて、孝の本來に生命の淵源に徹すること、萬物の本體を明かにすることである。既に萬物の本體を明かにせば本體と一である。これ中江藤樹の説の深い意味であらうと思ふ。曰く太虚本體の神靈方寸にあるものを孝とす。所謂未發の中是なりと（翁問答）。されば感謝敬愛は孝の情であつて、孝の理（性）は本體そのものであるといふ意味になる。親愛の情は限定的である、氣發である。敬は反省的情である理性から發する。故に孔子曰く敬せざれば何を以て之を別たんや。親子相親しむは只本能的である。孝は本能にあらず、本能の理性化である。敬は感謝と相表裏する、感謝するは之を拜し之を頂く氣味がある、即ち眞の尊敬の情である。敬によつてさきの本能的の愛は理性的の愛に轉ずる、是敬愛である。之を敬愛すれば之れ順である。故に孝は孝順である順の絶對的なるものは信である。絶對的信頼である。是孝である。故に感謝、敬愛、順、信、孝は畢竟一であつて、あらゆる隔離、間隙局限、即ちあらゆる抽象を超えて一切が疏通融合する所以限定から反省して全體に還える末から本に反へり本から末に通じて循環窮りなき所以である。果

して然りとせば孝は人間特殊の自然的關係に端を發して、人倫の本とさられてをるも其實は宗教道德共通の境たる自由界に通ずるものである。或は孝は親子の血縁的關係の上に發するもの故、神明天父に對する敬愛、感謝と同日の談にあらずと思はれるかも知れども、孝は本能的親愛ではなくて感謝によつて理性化普遍化せられた敬愛である。其對象を如何様に心理に抽象しようとも敬愛の性そのものに二つはない、若し二心ならばこれ純なる敬愛でないから父母に敬であるとも言ふことを得ぬ。

宗教をシユライエルマヘルは誠敬と見てをるが即ち敬愛の心である。

この愛敬の對象を肉身の父母と念ずると天父と念ずるとの相違が若し其念する心像の相違にありとせば、これ神明を感性的に寫して感性的の存在と其甲乙を争ふものと謂ふべく、眞の宗教即ち誠敬其物を去ること寧ろ遠しと予は思ふのである。所謂昊天に父母に號泣するは愛慕歸依の心に於て昊天と父母は合一することを示してをるのではなからうか。一人の親に敬愛なる心は神明に通ずるものとせられてをる。右の如き意味に於て我が邦並に漢土に於ては敬は全く宗教である。敬愛順、信と見れば敬は宗教であるが藤樹の如く本體を見ることがすれば、孝は最上の學である。忠孝忠は我邦に於ては西洋に於ける如く道德の外に宗教の必要をさほどに説かぬのであらう。

第二節 祖先崇敬の訓練

こは、家庭に於て實行される部分が大部を占めていますが故に、之が實現に至つては學校と家庭と連絡して、實行と督勵を圖らねばなりません。之が實現に就ては教師の體驗が第一に肝要であり、次は家屋に於て祖先の祭祀を怠らぬ様にし、祭祀當日には祖先の遺物家實系圖等を陳列し、略歴逸話等を語り聞かし、宗教の範を示す事が大切であります。

家庭に於て實行さすべき事項

- 1、毎朝神棚、祖先の靈を禮拜すること
- 2、年齢に應じて毎夕燈明をあげしめること
- 3、春秋彼岸には墓所の掃除をなさしめ、禮拜をなさしめること
- 4、祖先の忌日には、學校を休業し法會に參列せしめ、墓參をなさしめること
- 5、時々佛壇神棚を掃拭をなさしめ香花を奉らしめること。

第二十章 忠君愛國の精神養成

第一節 根 本 義

第一 忠君とは小我が大我に抱擁されること

今更忠君愛國の意義を茲で究明するのが本來の目的ではありません。しかし、我國民道徳の形式は、三千年以來の今日も變らぬ筈であります。その内容に至つては、時勢の進運とともに幾多の遷り變りがある筈であります。今日の訓練が徹底しない所以も此邊の研索の足らぬ處から原因してゐるではあるまいかと感ずる點があるのであります。故に訓育に關係ある事項について、以下その根本義と思ふ點を述べて見たいのであります。

君に忠義をつくすとは如何に考えたらよからうか。君とは何であり臣とは何であるかは、哲學上から、倫理學上から、或は法制學の上などからいろいろと考察することが出来ます。

君は、君個人としての存在ではありません。國家の主權者としての存在であります。君個人としての自我の發動ではなく、國家的自我としての發動であります。君個人は 個人的自我の發動ではなく、國家的自我の發動をして顯在する處に生命を有する譯であります。又臣民は、單なる個人としての存在ではなく、國家人としての存在でありますから、その活動は、國家人としての自我の存在であります故に單なる個人的自我の發動ではなくて、常に國家的個人我の發動體であります。君も國家としての自我の成長への國家的自我の發現者であり、民も國家としての自我の成長への個人的自我の發現者であります。謂はば大我と小我との關係であつて、共に國家としての自我の成長者としての握手であります。握手と言ふ事は、平等關係に於てのものとは異なる譯でありますから、大我によつて小我が抱擁されるものであります。忠君とは小我が大我に抱擁されると言ふのであります。

今少し別の考へ方によります。臣たる自己は自我の創造成長への努力者であります。自我の成長するに従つて、自我は擴大されて行きます。所謂個人我は家族我に擴大され、社會我に擴大され、國家我に擴大され世界我に擴大され宇宙我に擴大されます。自己の内に家庭を見出し社會を見出し國家を見出し、世界宇宙を見出す様になります。自己の中に國家を見出し、常に國家我によつて自我が活動する様成長して、實現した事實が忠義であります。之は、一般的に考へ得らるゝものであ

ります。

我國に於ける忠義は他國にその類例のない特殊のものであります。國の組織の上から君は國家の主權者としての大我の發現ではなく、父としての大我の發現者であります。臣は、國家を組織せる單なる一人としての小我の發現者ではなく、子としての小我の發現者であります。外國に於ても我國に於けると同様、君は國家の發展を念ずると共に臣も國家の發展を念じます。同時に、君は、臣を愛し、臣は君を敬います。しかしそれは、國家の一人としての臣を愛するものであり、國の主權者としての君をおもふに止まるものであります。我國に於ては、之に反し、君は子として臣を愛し、臣は父として君を尊ぶのであります。此尊き大義明分を知る事によつて、進んで大我に抱擁される事を喜ぶものであります。

第二 忠君と愛國

我國に於ける忠君は、父としての大我に子としての小我が、喜んで自進的に、抱擁されることでもあります。

さて君たる主權者は、國家の理想の實現者であります。従つて君は、前にも述べた如く、自己を中心とした得手勝手は出来ません。飽くまで國家我の發現者でなければならぬのであります。君としての大我に抱擁されて一死以て奉公の誠をいたしたときには、君の統率する國家我の發現をしたのでありますから君に對しては忠義となり國に對しては愛護したこととなるのであります。之と反對に國に盡した時も前同様君に奉じた事となるのであります。

また、君が大權を行はせ給ふ國家は、單に大權を行ふ君としての關係に於てではなく、それ以前に君と國家とは離すことの出来ない關係があつて、皇室が中心となつて國が成立しているのであります。それで君と國家とは一體をなしているものであります。故に、君に忠誠をいたすは、直ちに國家を愛することとなり國家を愛する事は君への忠となるのであります。

君は君たるに於て、超人格的のものであります。國家我はこの超人格の發現する場所であります。外國に於ける君は國家我の發現を行使するに過ぎないのであります。故に我國に於ては愛國の凡てが忠君であり得ても、外國に於ては、愛國の凡てが忠君であり得ないのであります。茲に吾々が思いを致すとき自ら感謝の念が湧き出でて奉公の自我の活躍を見るのであります。眞に内に目醒めた自我の發動によつて忠君愛國の誠をいたす事ができるのであります。

革命と言ふ事が愛國であつた外國は、忠君と愛國とは全く別物であります。従つて忠君は單なる

義務としての義務であります。我國に於ては、無條件的な全献身的な人情の自然の顯現であります。

第三 偏したる忠君愛國

從來の我國の忠君が稍もすれば、「君の馬前に死す。」と言ふ事を強く結びつけられて居ります。「君の馬前に死す。」と言ふ事のあまりに形式的のみ解する事の濃厚なるあまり、戦争と忠君とが固結されている事であり、此詞の本源的のものは、そこにあるのでは無く、その精神にある筈であります。もし、更に之を形式的のみ解するならば、それは、戦争以外の忠義はない譯であります。

けれ共終始戦争がある譯ではありませんから、形式主義によると、忠義をしないで一生を終る事となるかも知れない事となります。前に述べた如く父としての大我に、子としての小我が、歡喜的に自進的に抱擁されることが忠義であります。故に、時を撰ぶ譯ではありません。また場所をも選びません。時空を超越している抱擁であります。故に、戦時と平時とによつて、其實現が異なるものではありません。飽くまで、常住坐臥、君の大我に抱擁されるべく自我の成長をはかる事であります。

戦時にしても、平時にしても「死を以ての精神によつて、」大我に抱擁されんと努力するとき、自我はよりよく、成長を續けて行く事ができます。之が極度に成長するのは、一死以て、對外的の事實に、又は對内的の事實にあつた時であります。しかし吾々は、人と生れたものはすべてに於て、「死を以て」の精神によつて、父としての大我に抱擁されるべく自我の成長をはからねばならぬのであります。

忠君愛國が、從來とかく戦時の忠君愛國と言うことに着目して平時の忠君愛國を無視した嫌があります。平時に忠君愛國の思想の顯現が尠い事に對しては、第一教育上その指導よろしきを得ない所に存するのでありましょう。又一つには、我國が、開國以來他國から何等の侵害を受けていないと言ふ事が強い原因となつて居るのでありましょう。我國では、隨分忠君愛國の教訓は小學校に於て述べて居りますが、その實踐指導が甚乏しいのであります。また夫等の人々が卒業後社會に入つて實生活に就いた時に於ても外的に自覺の機會が尠いのであります。大陸としてお互に國家が一線海を隔てて國家が對立して居りますし、我國と肩を並べると言ふ國は、遠く離れて居りますので、國家の獨立に對して始終刺戟されると言ふ事が尠いのであります。また、たとえ海を隔てても

始終、不安を感じさせられているときには、その自覺の立場になり易い譯であります。極めて平和に育つた國でありますし、その上戦争の度毎に勝利を占めて居りますので、常に國民としては小成に安ずるとゆふ機會環境に置かれているのであります。

しかし、それは、從來の事で、今後は、眞の戦争は平時に於ける文化の戦争であります。遠いと言つても、文化の進むにつれて、縮國されます此點から見ても大に平時の忠君愛國に目醒めねばならないのであります。今少し大きく眺めて、世界の文化に寄與して、その惠澤をとものにせんためには、我國に於て、独自の文化を築き上げなければなりません。その文化を以て世界の文化に貢献する事ができます、それによつて、その國が世界の文化の霸王にならずともその國家の獨立が保たれる譯であります。我が國家の獨立をはかり、特有の文化を建設し、以て世界の文化に貢献するならば所謂忠君愛國の道であります。そうする事、それ自我の成長がある譯であります。

從來とかく、排他的の國家主義が認導されて、忠君愛國を極めて狭義のものに解されてきました。狭義の國家主義は、到底、かく進展した文化的世界には用ひられませんが、飽くまで、それを主張する事に、今日のある國の如く全滅の憂き目を見るより外ありません。從來の教育がやゝもすれば、その邊の顧慮が尠かつた様であります。今後は、あくまで、人道的國家主義を標榜して、人道的忠

君愛國の思想と性格とを陶冶せなければならぬのであります。

第四 忠君愛國の事實

忠君愛國の道が今日完全に行へるかどうか。之は誠に一天萬乘の君に對し奉つて、甚だ相濟まぬ感がします。我等教育實際家は奮然立たなければならぬ秋であります、小學校教育の罪はたしかにあります。私が德育を小學校教育の第一に置かなければならぬと高潮するのも茲から出發しているのであります。最近の不詳事件は恐懼に堪へない次第であります、之は古今將來並びかかる點はないと信じますが、それ以外に、平時に於て眞に忠君愛國の趣旨に基いて臣民たる凡てのものが行動しているか否か、自覺したる忠君愛國が實現されているか否か、大に反省しなければならぬのであります。更に一般臣民が反省するのであるのみならず、教育實際家が第一に反省すべき必要があると思ひます。

一般臣民が、眞に君主國家の大我に抱擁されんためにその實現に努力しているであらうか。根本信念が樹立してゐるであらうか、日本独自の文化を建設しようと努力しているであらうか。自己に即して自我の實現をはかつてゐる事がそれが、大我への抱擁となる様にとの自覺のもとに努力してい

るであらうかと、相互に我利／＼根性を出して、互に懷の奪ひ合が始まる、政治に經濟に産業に、互に相反目し嫉妬し、不道德行爲を敢てして、獨立自治一致協力國運の進展をさまたげ、不正品を輸出して國家の體面を汚し、外國の信用を失ひ、國家の富力充實を妨げ、外國に於て不道德なる行爲をして排斥に逢い、國力發展を阻害している事を何と見るか。

小學校教育に、また、あきたらざる現象を見るのは實に遺憾であります。自我の平等方面は、從來の缺陷には違ひない。しかし、之を説くに急たる結果、甚不徹底の上すべりのものが尠くない自由、平等、個性、之等の言葉が如何に淺薄なる解釋のもとに教育の事實の上にあられてゐるか、敢て論ずるの要もない。なほ一方には、自我の差別方面を全く輕視している。甚しきは弊履の如く願みないものもあるのは、甚だ、この危機を救う方案として、また、自我の根本に立つ教育としては遺憾なものであります。

爲政者も、先覺者も、教育者も、凡ての人々が反省して、はやく自覺し、その改善に努力せなければならぬと信ずるものであります。

第五 兒童としての忠君愛國

素朴的な忠君愛國は、君國に對して一身一家を奉る事でありませぬ。犠牲にする事でありませぬ。之も必要であります。之をぬきにしては、忠君愛國は成り立ちませぬ。死すべき時と場所に死してこそ忠君愛國であります。死ななければ、忠君愛國にならぬとの誤解は早く兒童の頭から去らなければなりません。

素朴的な忠君愛國から進んで文化的な忠君愛國に擴充されなければなりません。君としての、國としての大我の要求と自覺し、この要求を實現するために自己のすべてを、常住坐臥の間に犠牲にするといふのでなければなりません。一般的に言へば、一字一字のペン先に、一打一打の鎚の先に、一鉄一鉄の鉄の先に、一針一針の針の先きに、こうした忠君愛國が旺盛に自覺的に漲つて居なければならぬのであります。

兒童は、毎日學校に於て學習している事の上に、家庭に於て生活する上に於て、常に君國の理想を實現する事に献身的な努力をいたさなければならぬのであります。

君國の理想實現は、自己の現實に於て行うより外ありません。自己を實現することによるより外ない譯であります。それが如何なる場合に於て忠君愛國に抱擁されるか、之が重要な問題であります。單に自己のみを凝視めた自我によつて學習したならば、それはいまだ忠君愛國の道に合し

たものとは言へない譯であります。自我が漸次擴大されて個我が家庭我に、社會我に、國家我に、君主我に、擴充されて、その自我の要求に従つて自己を實現したならば、それは、自己をそこに實現した學習は忠君愛國の道に協つたものであります。

そこで、之を教育の側から言へば、兒童の個我をして、常に助成して君主我に國家我に成長擴充さすことでもあります。その成長されたる自我の要求によつてのすべての活動は忠君愛國の活動であります。

私の主張する自我の成長への教育は、茲に努力する教育であります。

第六 訓育の施設は困難

本項の訓育上に於ける施設は他の項に比して困難を感じるのであります。訓練とは道徳的情意の習慣をつくるにあるのであります。情意の習慣陶冶には、その手段として、學校内に於てその對象と兒童との間に事實現象が起りつゝある事項、又は特に起り得る事項が尤も施設の上に便利であります。學校に於て、その事實現象の實際機會をつくりうる場合に於て尤も價值あるものであります。よしそれが一部であり基礎的のものであるにしても、兒童が實際に學校に於て直觀體驗しうる

事項が尤も徹底するものであります。然るに、兒童對家庭、兒童對國家、兒童對君主の道徳となつて來ますと、學校内に於ては、何等その直接事實が起らないものであつて、すべて學校とは間接關係のものとなつて來るのであります。

そこで、學校に於ける訓育中尤も重要視せなければならぬ徳目ではありますけれども、實際の施設に於ては困難を感じて、自から訓育の機會が尠くなる譯であります。なほ、之を施設するとしても他の事項の施設の如く直接表現せしめて意志の發動によるという事に苦しむのであります。故に、多くの場合忠孝に關する訓育の特殊施設は、知、情を働かして、意志の傾向をつくるという場合が多くなるのは止むを得ない事であります。意志の方面は、日常生活を利用して、實際に教育を行わしめ之を助成して行くという事になります。

第二節 施設の關係

第一 儀式

1 儀式の種類

三大節

入學式

卒業式

始業式終業式

各種記念式

職員送迎式

其他、學校の事情によつて、いろ／＼と施設されているのであります。

2 施設の趣旨

三大節は、すでに法令で制定されてあるし、記念日の種類によつては、縣の訓令などで制定されたものもあります。何れにしても、當日の儀式には、貴き本旨がある譯であります。まづ、その本旨を徹底さす事に努めねばならぬものであります。次にはその形式方面よりして、儀式としての一般陶冶を目的としなければならぬのであります。

第一、當日の趣旨を了解せしめて置く事が肝要であります。三大節或は記念日に對する由來、及び、自己の所感、實踐事項等に至るまで知的に情的に充分徹底體得せしめねばならないのであります。

第二は、敬虔心の陶冶であります。式場に於ける環境の暗示により莊嚴の裡に敬虔の情を湧出せしめ、一種の信仰に打たれる位までの設備によつて感動を與え、兒童の自我に觸れて、言ひ表わすことのできない情操を體驗せしめなければならぬのであります。

3 近時の傾向

科學萬能、物質萬能の風に吹きすさまれて、人情輕薄となり一般社會に於て、各種儀式及び之に類するものが、非常に輕視される事になつて來たのは、民心收攬上甚だ遺憾の事であります。

學校訓育に於ても此傾が甚しくなつて來たのであります。そは、科學萬能、物質萬能の思潮によるのであります。それよりも、唯物思想の旺盛なると共に、形式的の施設を輕視するの風が生じて來たのであります。根本論は、別として、訓育上の手段としては、到底形式と精神とは離すべからざるもので、精神あつての形式であり、形式によつてその精神が表現されるのであります。故に精神のみの取扱によつて徹底さそうとする事は、其處に不徹底は免れないのであります。殊に情操陶冶は內的に直觀體驗さすを以つて最良の方法とせなければならぬのであります。故に、言辭で説き明かす事は極めて困難であります。それよりも、その環境に位置せしめて味得ささなければならぬのであります。

然るに、儀式なるが故に止むを得ずして之を行ふものや、只毎年の傳統によつて舊慣を墨守して行くものが尠くないのであります。如何に施設すれば、その學校の兒童の個性に立脚したる訓育的の儀式を舉行する事ができるか等、種々の方面より細心調査研究し、以て、豫期の目的を達せね

ばならないのであります。唯漫然と、之を舉行する如きは、訓育に對して何等の顧慮を拂わさるものと言つてよいのであります。

4 前日の準備

「趣旨の徹底」 校長誨告は時間的に之を見て長きものもあり短かきものもあります、儀式は前に述べた如く、一面には、その當日の趣旨が充分に領解徹底し、そこから自己の探るべき方案も生れなければならぬのでありますから、それを徹底的に諒解さす爲めには相當の時間を要します。あまりに短かく切り上げる誨告は、その全面を盡さないか。深さがなにかにあります。しかしながらあまりに長時間に亘るときは、一堂に尋常一學年から高等科三學年までも集めている學校では、その説話に困難します。中學年を標準としても低學年には難解であるし、高學年に對しては平易に過ぎるし、結局、大部分を低學年向に話して、次に之を高學年向に反覆し、又は之と反對に繰り返す場合が多いのであります。之れでは非常に時間を要し、兒童が倦怠の情を惹き起す恐れがありますから、各學級に於て前日にその趣旨を充分徹底せしめて置く事がよろしい。而して、當日は極めてその大要を莊嚴に感興的に誨告すればよろしいのであります。また、學級毎に訓話する代りに一堂に集めてもよろしい。

その趣旨、並に心得などは、なるべく兒童自身に研究せしめるのがよろしいのであります。各種の参考資料を與えて、一時間もかゝれば獨立的に整理ができます。それに就て批評指導を加えてやればよろしいのであります。教師から吹き込んだものは、割合に徹底していかないもので、卒業する様になつてまで三大節の由來を知らぬものも尠くないのであります。之れは國民教育上、由々しき事だと考えます。之等は國民的教養として極めて重要なものでありますので、充分徹底しておいて義務教育を終つたものが社會に出で、後も、猶、其事項その趣旨が明確に浸潤している様しいものであります。之は、まだ儀式が學校儀式であつて、一般の國家的祝日になつて居らず、従つて精神の陶冶が出来ていない關係もあること、思われますが、今後は、相當な時間をかけて、各自に充分學習せしめて置く必要があるものと感ずるのであります。

「式場準備」 儀式は、出來上つた式場にはいつたそのときの第一印象が、尤も人心を動かすものである事はいうまでもありません。從來の儀式がとかく、深い印象を與えないという事は、また訓育上價値の尠いという事は、あまり教師の方に膳立がすぎて、兒童は、全く、客分として招待された様な氣持で、その式をすますという様な弊がありはしないかと疑うものであります。私は矢張りなす事によつて學ばしめる、所謂自我の自覺を促がす事が肝要だと信ずるものであります。

そこで式場の準備当日の接待等で兒童の努力によつて爲し得る分は、なるべく兒童に計畫せしめてよろしいと思ひます、また、教師が計畫して、兒童に手傳わしめることは、なるべく多い方がよろしいのであります、之は、何も教師の勞を省く爲めではありません。却つて教師の手で全部施設する方が、結果もよく、時間も經濟でありますけれ共、訓育上から、兒童と協同して、翌日の儀式の施設にあたれば、兒童も非常な感興も増すし印象も深くなるし、また、協同して準備を爲す事によつて、教師の敬虔的奉仕の態度は、自然に兒童に感化を及ぼして、そこに貴い訓育が行われる事と信ずるものであります。けれ共、もし、教師にして敬虔感謝至情の念の涵養されていない是亦甚危険な譯であります。

式場の設備は、尋常の上級學年高等科として、數組になつて一ヶ年に分割し順次循環して之に當らしめる事がよろしいと思ひます。大清潔、大整頓、大裝飾など、ほんとに教師と兒童とが、國家の記念日を惹起し國家の恩、上君の恩、を感謝しつゝ敬虔心を以て之に當るならば、當日の訓育上の效果以上に徹底したものであるを信ずるものであります。

〔唱歌の精練〕 儀式用の唱歌は、何れも莊重にできている關係上、歌唱に甚だ困難であります。なるべく低學年は歌唱する事を見合はして、其歌の精神を知らしめ味わしめて置けばよろしいのであります。

中學年以上には、平素充分練習して置いて、よく飲み込ましめて置かねばならぬ。たいてい、儀式のときの唱歌は最初の歌い出しを知らぬものが多くて待ち合す様なのが普通であつて甚だ訓育上障害となるのであります。又、前日は、數回、唱歌主任の手によつて精練して行く必要があります。往々學年毎に又は學級毎に遅速があつて非常に聞き苦しく、その式場の氣分をして悪化せしめる事が尠くないのであります。校舎の設備の關係もありましようが、精練は、式場にあてられる個所でする方がよろしいのであります。校庭などで行う場合もありますけれ共、それは、音の散逸もあつて、眞に精練されているや否やを知るに苦しみます。又眞の氣分もあらわれて來ないのであります。

〔式場に於ける心得〕 之は充分に自覺を促して置く必要があります。當日の兒童の言動によつて折角の學校の計畫も水泡に歸する場合が尠くないのであります。教育勸語奉讀中に、わざとらしい咳一つしても、その影響する處が大なるものがあります。當日の心得は、學級に於て、又は一堂に集めて擔當教師或は校長から訓誨したのでは、兒童には壓迫を感じやすく、その効果が甚だ尠いのであります。私は、飽くまで徹底さす意味に於て、學級毎に自治會を開いて、當日の心得を充分に協議せしめて、その實行を促して置く事が必要であります。教師がくどくどと數十の注意を並

べ立てゝもさほどの效のないものであります兒童相互の申合は非常に力を持つたものである事を知らなければなりません。而して、その足らぬ處、誤つてゐる處を教師の方から指導してやればよろしいのであります。

- 1、入場の心得
- 2、最敬礼の心得
- 3、唱歌の際の心得
- 4、御眞影奉拜の心得
- 5、勅語奉讀の際の心得
- 6、祝辭、海告拜禮の心得
- 7、退場の際の心得
- 8、館装の心得

これが心得の中尤も注意すべきは、尤も靜肅に而かも敏活に入場し講堂の入口からは一切談話をせずしかも敏活に入場し講堂の入口からは一切談話をせずして會場の氣分に打たれることを第一として置かねばならぬ。かの入場が非常に騒がしい時は、その儀式全體に何等の落ちつきがないので

あります、眞の氣分を養う事ができないのであります。折角の儀式に「笛」を鳴らして靜めたり、「氣ヲ付ケー」の號令をかけなければならぬ事は、その學校の團體訓練殊に敬虔感謝の訓練に徹底してゐない證據であります。講堂内に入れば、人あるが如く、人なきが如く、水を打つたる如き状態でなければならぬのであります。それがためには、兒童に前日から十二分の自覺を（之を拘束と言つて嫌う人があるが誤れるも甚しきものであります、勿論やり方によつては、そうなる事もありませんが）促して置かねければ、當日「笛」一つ位では訓育の目的は達せられるものではありません。唱歌の歌唱の際は、その心情を味ふ事、之が肝要であります、之は平素唱歌教授の際自己の歌唱を内經驗するの習慣を養つて置かねばならないのであつて、只多數のものゝ歌唱に引きづられて行く様ではならないのであります。また、群衆心理に墮する關係上、歌唱の順序となると、誰れがしだすともなしに、一人が咳を始めると、引續いて多數のものが之をなし、甚だ不作法でもゝるし、式の壯重を害する事になるのであります。

御眞影奉拜は、兒童は、その場で之をなすのでありますが、到底明かに拜する事のできないのは多數收容せる結果、當然の事であり、甚懼多い事ではあります、往々奉拜せんとしての心の溢れから、顔をあげたりするものができますが、その精神に於ては必ずしも責めるべきものではあ

りませぬが、訓育上全體から言つて甚面白くない事でもありますので、充分形式に於て完全なるべき様自覺せしめなければならぬのであります。

勅語奉讀の際最敬禮をなす場合、その心の持ち方に就ても各自自覺せしめねばならぬし、形に於ても、あまり曲げ過ぎる結果非常に疲勞を覺えて、直立した際に怪しき溜息の洩れて來ることは、甚氣分をわるくするものであります。また、入場前、教師の氣の利かぬため、そのまゝ入場して、最敬禮中鼻汁を吸い込み、しきりに音を立てさせて、往々冷笑をかい、ために、式の壯嚴を破る事がありますから、之なども、細い事ではあるが注意を要するものであります。

祝辭その他演説を聞くときの態度であります。之は、普通、學級教授に於ては、教師の方で兒童の發達状態もよく了解してゐるし、長く受けてば、その個性も明かになつてゐるから、その説話は充分兒童の自我に觸れる譯であります。校長の誨告始め一般の祝辭その他となると、全く兒童の自我に徹しない結果、すぐに不謹慎の態度があらわれるのであります。殊に教師以外の人々の説話は、不慎れの結果、又は兒童心理を了解せぬ結果とかく兒童から滑稽視せられたり、不可解に終つたり、一面から言えば、兒童として甚迷惑を蒙つてゐると言ふ態度に出ますので、茲では、一般の人々に要求するとともに、兒童に對しても、自己以上の説話は中より一つにても要點を提供

せんとその努力的學習を爲し、自己以上の説話に就ては、鑑賞的批判的の學習を爲す等によつて、兎に角或時間は團體我のために生きるべく努力せしめねばならぬのであります。而して、ある一定の間團體我に生き得た人は、それだけ自我の成長があつた譯であることを自覺せしめなければならぬのであります。

以上は、特に努力を要する點など考えます。若し之等の反省自覺の必要ない學校なれば、他の事は充分に訓練づけられてゐる模範的の學校など考へられるのであります。

「來賓父兄其他の參列」 教育は、學校で始まり、學校で終るべき、ものではないと信じて居ります。教育は家庭から出で、家庭に終るべきものであります。家庭を無視し、社會を無視しては教育は、その能率がありません。殊に學校教育の能率問題よりも直接國民的修養——近時の所謂成人教育をなす上に於てなるべく、市町村の先覺者、功勞者、爲政機關に携る人々その他、父兄などはできうるだけ、範圍を廣く招待するのがよろしいのであります。その案内状などは前々日位に印刷もしくは、謄寫版等によつて調製して、洩れなく發送せなければならぬのであります。

——三大節などは、別に案内状を出さなくとも進んで參列するのが本體であります。その様な人

々のすくない處では學校の方から、積極的にやる必要があります——

學校の意志としては別に何等の悪意のないものでも一寸不注意のために、甲と乙との封筒とに印刷物を入れまちがつたら、或有志の宅へは、送附を忘れたり、また頼んだ兒童が途中で落したりして行届かないで、あとで校長が面喰う事があります。これは極めて簡単な事で大勢に關係しないと吾々が考へている事ではありますが、教育を徹底さすと言ふ上から言へば肝要な事で、之がために各種の宣傳をされてその弊害を蒙る事があります。できるだけ、その學校で細い注意の周到な人に一任するのがよろしいのであります。

「接待係の準備」職員としては、常識にたけたる人、実際にたけたる人を任命し、なほ上級の女生にあたらしめるのがよいのであります。兒童が眞に、家の主婦となつた積りで、如何にすれば來客を満足せしめ得るかと言ふ點を研究體驗せしめるに尤も好機會であります、此心情を養うのを第一の目的とするのがよろしい。勿論その形式、作法禮儀にも慣れさす必要もありますが、比較的受身の兒童と言ふのを離れて、發動的に主婦となつて接待にあたる事の機會は容易に得られぬのでありますから、此際を利用する事がよろしいのであります。之なども、とかく教師が全部行つてしまふか、また女生を使用するのは、教師の勞力を省くためとかにあつて、當日は、女生のみに活

動せしめて、教師は職員室に引き込んでいると言ふのも見受けれます。兒童に訓育上の價値を十分に發揮せしめ、而かも來賓に對して和氣に満ちたる裡に送迎する事は容易ではありません。教師の骨休めではありません。兒童をして十分に體驗せしめるためには、先づ前日に練習會を開く必要があります。摺換帽子外套ステッキの受取方、直し方、履物及上草履の整ひ方出し方、猶豫所へ案内のしかた、お茶の出し方、式場への案内のしかた、退出の際の携帯品の出し方渡し方、摺換の仕方、など、これは中々の努力と練習を要します。日本は「君子國」など言はれて、随分禮儀に正しかつた國であります、精神を忘れて形式のみに墮した結果、今は精神にも徹せず、勿論形式は捨ててしまふと言ふ有様で、非常に人をして不快を感じしめる様な時機になつて居ります。

米國は、常住座臥、尤も苦心している處は一舉一動人に對して不快を與えないと言ふ事を非常に憂慮して努力して居ります。別に阿諛して愛敬をふりまく必要はありませんが、できるだけ、來會者を愉快に、共に、その當日の趣旨を奉體しうる様豫め練習實習指導して置く必要があります。

「生花」式場としては、是れ相當なものが欲しいのであります。之が、買入れに極めて上等なもの、兒童の努力によつた下等のもの何れが訓育上價値があるでしょうか。形式的に味へば、買入れた上等のものが、その効果の下に價値の多い事は勿論であります、私は矢張り精神の上から之

を考えたいのであります。若し特にある學級の關係、ある學年の有志者、ある地方自治團のものが、特に生花をしたいと申出でも、これができ上つたとしたら、よし、それが、價から言つて安いものであり、美の本質から言つて極めて拙いものであつたとしても、それが兒童の自我の生命をあげての活動であるならば、その貴い事千金にあたいするものだと思ふのであります。かゝる申出がある様になるまでは、よほどの努力がいります眞に自我の成長への訓育が徹底出来なければできない仕事であります、私は、私の主義によればできるものと信じて居ります。また、その傾向のある事を喜んで居ります。

設備

式場の設備は、すべて華美輕薄を嫌います。何處までも壯重に雅でなければなりません。色は凡て白色又は澁色のものを使用して、形は、すべて正しいものを用い不正のものは一切使はない事にする事であります。衝立幕幌などの外なるべく裝飾物は使はぬがよろしいのであります。

設備の梗概。學校校舍そのものの設備によつて、當日の設備も自然に異つて來ますが、初心者のために、その梗概をのべ、あとは、その學校の個性に就て改善應用されたいのであります。

(一) 御眞影、講堂奉安所内に御座を設けること

床は菰をしき、その上に八脚机をおき、その上に白布を覆い奉安臺を置いて、右には

天皇陛下

左には

皇后陛下

の御眞影を奉安するのであります。

その前面には内側から紫の御帳をたれて、奉安所外側には、國旗小旗を交叉奉揚するのであります。而して閉扉し、職員二名(校長代理)警護し奉るのであります。

御眞影奉安所の右側には、小机をおき、それに白布をかけ、その上に、三方をおき、勅語讀本を載せるのであります。——取次のものが奉持して校長の前に差し出したるとき直きに開きうる様注意して置くこと必要であります——

3、之と反對側即ち左側前方に演臺を置く事であります。御眞影に對して不敬にわたらぬ様注意しなければなりません。

4、職員席は、立關入口にて近き側を以て之を充て、來賓席は之と反對の側とします。往々右側を來賓左側を職員と言様に定める處もありますが、設備の都合でそれが必ずしも上席と定まらぬことがあります。

5、生花は來賓席の側に、樂器は職員席の側に體裁よく置けばよろしいのであります。

6、兒童は、來賓側に女生、職員側に男生を置く方が萬事に都合がよろしいのであります、而して

兩端より中央に順次身長の低きものを並べる方がよろしいのであります。

6、入場

〔兒童〕 入場係によつて靜肅に尤も敏活に入場を要します。

此第一步が誤れば當日は、全滅に歸するのでありますから尤も注意を要します。別に注意といつても教師が固くなる必要はないと思ひます。わざとらしい處もない方がよろしいのであります。教師には、「自然に發する敬虔的表現」、これこそ唯一の武器であります。要するに、教師の自我の成長それによつて、兒童の自我の成長は開發され、そこに握手があるのであります。要は拷えものでは何等の共鳴がありません。これは、小細工ではできない事であります。兒童が平素の共鳴と、當日の態度とが合體して共鳴するのであります。當日だけ、らしくしても何等の効果がありません。

〔來賓その他〕 式場へは、校長が案内するが至當であります。便宜接待係がいたしてもよろしいのであります。只注意すべきは、不敬にわたらぬ服装であるか否かの見當をつけて置く必要があります。父兄を多く招待して參列する事となると、中には、田舎の人などには知らずして、首巻をしたり、ズボンのすそを靴足袋で包んだりしている事を、折々見受けますので失禮ではあるが一寸注意を與へねばならないのであります。

席の順序に就ては、よく式場で、譲り合いが始まつて中々解決がつかないで困る事があります。

時間がかかるし、時には、兒童の方に滑稽に感じて、式場の空氣亂れ勝ちとなりますので、來賓の内、大體の順序を立てて願つて、式場では、直に着席できる様整理を願つて置く方がよろしいのであります。又會場係の方で席順を定めて、順次着席して貰つてもよろしいので、要は、速かに、秩序正しく着席できればよろしいのであります。

7、儀 式

〔敬禮〕 職員、來賓其他一同の入場が済めば、寂として四隣聲なしの状態になつて来て、自ら襟を正す様にならなければなりません。此時笛を鳴らしたり、號令をかけたります事は、甚よくない事でありませぬ。敬禮は、すべて樂器合圖がよろしいのであります。父兄達の内には、この點を周知せぬ方がありますが、知らなければ、それでもよろしいと思ひます。大抵は、隣の人を見習つて出来るものであります。そして、これで順序よく行くものであります。

〔唱歌君が代〕 之は國歌であるから、一般に歌唱せねばならぬ事であります。中には、職員が之に和唱せぬものもありますから、之等は餘程注意せねばならぬ事でもあります。來賓その他、一般參列者は、別問題ですが、之とても、「君が代」歌唱だけは、歌唱し得る様いたしたいものであり

ます。今後の式に於ては、之は、満足し得る事だらうと思ひます。

〔御眞影奉拜〕 教育者、來賓その他一般參列者は、なるべく奉拜する方がよろしいと思ひます。出來れば、學級總代位も、參列する方がよろしいのであります。兒童全體は、その席で奉拜することになります。

教育者は、此際、注意しなければならぬ事は、父兄中に萬一不敬の事をなすものがないとも限りません。此點は、來賓父兄に對しては甚失禮であります。一般父兄を集めるとしたならば、餘程の注意を要するものであります。

〔祝詞演説〕 之は、前にも述べた様に、ある程度まで、學校の方にも制限する必要があるあります。一名もなくても困りますから、なるべく、參列者總代で一名位述べて貰う方がよろしいのであります。そして、他の方々は、なるべく、遠慮して貰う方がよろしいのであります。之は當日になつて、その様な事を申出ると準備していない方は或はお困りになるし、ある人は、準備して來ていると言ふ事になります。感情を害する事になります。之等の事は、甚些細な事ではありますが、前以て夫々數日前に交渉して置く事がよろしいのであります。

〔校長譚告〕 前に述べた如くなるべく簡潔なのがよろしい。長くても二十分、これ以内がよろしいのであります。そして、大綱を壯重なる態度と語調とで話す方がよろしいのであります。あまり理的に走らず、また、あまり感情的になり過ぎて却つて滑稽でありますから、此邊斟酌して、材料の選擇と話術の上に留意したらよろしいと思ひます。

〔兒童祝辭〕 普通、しない學校が多い様に思ひます。しかし、できる事なら、五分位で極めて平易に述べさす事が必要であります。之等も充分豫め、精練して置く事が大事であります。往々、兒童祝辭或は答辭などが、教師の作つて渡したもので、中には漢文直譯式のものもあつて、甚不調和であるし、また、教育的でないのであります。何處までも、兒童自身の發露でなければなりません。自我の現れでなければならぬのであります。

〔式の時間〕 入場後退場までができるならば、四十分位ですませたいものであります。飽くまで、緊張態度をとらずとすれば、できるだけ時間を短かくする必要があります。長ければ長い程そこに緊張味のかける事は當然であります。感情陶冶から言いますと、あまり長時間は必要ありません。また、回数も少くてよろしいのであります。そこに儀式の價值が多いのでありますから、精々時間を縮めるのがよろしいのであります。

〔備考〕 以上は、大體、三大節について、述べたのでありますから他の諸式は、之に準備して、

その趣旨に副う様適宜斟酌して施設することが大事であります。

8、三大節式次第

- 一、入場
- 一、敬禮（樂器合圖）
- 一、御影奉開
- 一、唱歌（君が代二唱）（職員兒童合唱）
- 一、學校長奉祝
- 一、職員兒童奉祝
- 一、學校長勅語奉讀（一同最敬禮）
- 一、唱歌（三大節ノ歌）（職員兒童合唱）
- 一、御影奉閉
- 一、學校長誨告
- 一、來賓祝辭
- 一、兒童總代祝辭

一、敬禮（樂器合圖）

一、退場

備考、他の儀式の次第は、之に準じて適當に學校によつて變更決定すればよろしいのであります

9、其他の注意

- 當日は、校舎内外の大清潔を行ひ、校門には國旗を掲揚し敬意を表する事が大切であります。
- 當日は、教師の態度、その他の設備、等によつて、子弟をして、十分君國に對する印象と感想を深めさせることに注意して努力せなければならぬのであります。
- 當日は、單に式だけで済まずと言ふよりも、半日遠足、または發表會、音樂會などを開催して、當日の趣旨に因んで、祝意を表するのがよろしいのであります。

参 考

四方拜に於ける校長誨告 —— 中學年を主とせるもの ——
太陽が一たび東の山の端にさしのぼりますと、いつにない光を輝かします。
茲に始めて草木鳥獸そのほか、世の中のものすべてが新しくなります。
家々には、國旗を立てて、太陽の風に靡かしています。道行く人には、お互に、お祝のことばを

のべています。この目出たいこの上に新しい年を皆さんと一しよにむかえまして、この講堂で、御眞影を拜して、儀式を行う事のできますのは、誠に喜ばしい事ではありませんか。

本日 天皇陛下には、午前五時半設けの席へ、おつき遊されまして、皇大神宮をはじめ、神武天皇から代々の天皇の御陵を拜し、その他四方の神々様を拜し奉ります。そして、國がよく治まり國民が安樂に平和に日が送れるやうにとお祈り下さいます。

之は 天皇陛下が、皇祖皇宗の御鴻恩を思ほし給ふ御孝心と、我國功勞のあつた大神様たちを尊びあそばす事と、吾々臣民の身の上を御心配下さる有難い御心に外ならぬのであります。

皆さんも、このありがたい大御心を充分に胸につけて、皇大神宮を拜し、神々様を拜し、我家の祖先を拜して厚い御恩に報ゆるの心掛が大切であります。

午前九時になりますと、再び 天皇陛下は、定め所へお出ましにならせられました。皇族方を始め、宮内省の役人や華族の方々や、勳章を持つてゐる人、位を受けてゐる人、外國から使に來てゐる大使公使の人たちをお集になられました。新年のお喜びを受けさせ給います。

それで、學校でも、その時刻に、皆さんと式をしまして、御寫眞の前で御喜びを申上げるのであります。

さて、本日 天皇陛下が、四方拜の御儀式をあげさせられますのは、いかなる理由であるかと申しますと、今日は、一年中の一番始めの日でありますから、臣民のためにこの四方拜の御儀式を行わせ給うのであります。臣民は、本日、我國が益々隆盛になる様にとお祈りすると共に、自分は如何に此一ヶ年を過すべきかと言ふ計畫の日であるからであります。

「一年の計は元日にあり」と申されています。一年中の計畫は、今日の元日に始めて置かねばならぬのであります。そして之を實際に行つて行くと言ふ大層大切な日であります。そこで皆さんも本日、一ヶ年の計畫を立てねばなりません。本年は、昨年よりも年が一つ増したのでありますから、萬事が上出来でなければなりません。身體もよくなるし、勉強もよくできる様になります。品行もよくなつてやろうと考えて、うんと努力せなければならぬのであります。さうするに於いては、年の始めの決心が第一であります。昨年の缺點であつた事をいろ／＼と考へて見て、本年はそれを直して、昨年よかつた處は、本年うんと伸ばす、と言ふ様にすれば、本年は、學問も進み、品行もよくなります。一だんの進歩があります。之が孝行となり忠義となるのであります。よい日本人であります。

本日の此お目出たい日にあつて、皆さんと共に今日の日をお祝いすると共に、以上の事を話し

まして、この決心を促して置きます。

四方拜に於ける校長誨告 —— 高學年を中心とせるもの ——
 茲に、大正〇〇年を迎えて、お互に慶賀に堪えぬ次第である。

何をおいても、第一に、大正の御代の永久に續き、ますく、國威が四方に發揚することを祈りする、凡そ一年の計は、元日にある。國家百年の計もこの元旦にある譯である。吾々一同は、國家の恩恵に浴して平穩無事に新年をむかえ得た事に歡喜して君國に感謝すると同時に國家百年の計を立てねばならない。

今日の國家は、誠に多忙であると言はねばならない。従つて國民全體の自覺をよび起さなければならぬさうでなければこのまゝすてしては、國家を安泰の上に置く事は出來ない、事を憂えなければならぬ。第一、この毎年く殖えて來る人間をどうするか。兩面は強國の内でも一番狭い。それに人口の密度は、一番大であるこのまゝ置いては、遂に人山を築かねばならぬではないかと心配にたえぬのであります。

どうしても、海外發展より外の道はない、お隣りの支那と日支親善を謀つて滿蒙を開拓發展せし

めるために出稼ぎするが尤も近道である。しかし、我國にもまだ充實されていない處もある、北海道、樺太、朝鮮、臺灣などは、まだく入れる餘地がある、氣候に順應し得るものは、どしどし移住すべきである。

遠くは、南洋諸島に行く事は、勿論、大に發展の餘地がある、政府は補助を出して大に獎勵せなければならぬ。

第二は、人種問題の解決である、此頃の世界の聲を何ときくか。支那の排日、濠洲の排日、排日の先祖の米國の排日、聞くたび毎に戰慄を覚えます。いろく經濟關係もあるであろう、現在の移民は、内地に於て、失敗したか、不正なる事をしたか、何か普通民以下のものばかりの移住である、夫等の低級な日本人が、忍耐力にまかせて、安い勞銀で一生懸命にはたらくので、米國あたりの勞働者に甚だ影響する、彼等の生活に困る。それが政治的色彩となつて排日案が通過する、また、上述の低級な日本民であるから、日常の言動人格はすこぶる下劣なものである、ひいき目に見る日本人が見ても随分厭やな感じがするであろう。まして紳士の勞働者から見たら排斥するの無理のない事である。將來國民教育に於て德育方面にうんと力を入れて、紳士の勞働者、淑女的勞働者を送り込まねばならない。さすればいくら排日を起そうとしても種がなくなる。

第三は、經濟問題の解決である。日本は農業國と言われて、農を以て國の本とされた時代があつた。しかし、それは昔の夢である。農産品ばかりで年六千萬圓の食料品を外國に仰いでいる。實に情ないではないか。貿易は、近年輸入超過ばかり續けている、國債はまして來る。國民はそれになほ、重税に泣いている。然るに近時自動車で走り廻つたり、寢ころんでいたりする高等遊民のふえる事は、益此大勢をして猛威を振出しめる、よろしく、手足を動かす人となり作業を愛して勤勞をつづけて各方面に創造力をはたらかして、生産の能率増進をはからねばならぬ。

第四は、道徳である。平等主義と差別主義の鬭争である。社會主義者がでて個人に立脚した平等を主張している。國家主義者が形式化した國家の立場から差別主義を唱えて互に争つてゐる。しかし、いづれも偏狹であるだけ、いつが來るも解決はつかない。今一般徹底したる、差別即平等主義に立つて早く此危機を救わなければならない。

第五は、宗教である。十八世紀以來の科學萬能に影響せられて、その勢力地に落ちてしまつた。勿論、その布教が低級で現世には、その施設が適せぬ。各國が努力して歸依しうる宗教を發見せなければならない。しかし今少し信念のある活動をせなければならない。

以上あげたのはホンノ大綱である。しかし並べて見れば、どこに一つ安心のできるものはない。

吾々は全力をあげてこの解決にあたらなければならない。而して我國をしてよりよく成長せしめねばならない。新年に際して諸氏の反省自覺と奮起を望む。

紀元節に於ける校長誨告 —— 中學年ヲ中心トセルモノ ——

本日は我國第一の天子であらせられる神武天皇が、始めて大和の國橿原の宮で天皇の御位に、おつきになられたお目出い日であります。茲に皆さんと共にお祝い申上げるのであります。

今日宮中では盛大なる御儀式があります。皆さんの内では軒に國旗をかゝけてお祝申して居ります。學校では、天皇陛下の御寫眞の前で、お祝の儀式をあげるのであります。

さて、天照大神から次ての神様たちは、日向の高千穂の宮になりましたが、神武天皇になりました。どうも日本の國の東の方には、まだ、よからぬものがありました。よい人たちをいぢめて居りました。そこで、神武天皇が、大層可愛そうに思召されまして、いよ／＼その惡者どもを御征伐するために東の方へ向つて御出發なされました。

昔の事でありますから、汽車もなければ汽船もない。その上に道はわるし、船はわるし、途中で大へんな難儀をなさいました。

七八年もかかつて、やつと道々の惡者共を平げまして、大和の國におつき遊ばされました。そして橿原といふ宮で始めて天皇の御位におつき遊ばされました。それが×××××年前の今日であります。

我國をお創め下さつた方は、天照大神でありますけれども、天皇の御位におつきになつたのは神武天皇であります。そこで此年を紀元元年とかぞえまして、今上陛下迄お續きになつて今年は×××××年になります。そして代々の天皇陛下は、人民を大事にして下さいました。又臣民も代々の天皇に忠義をつくしました。まだ一度も外國に耻を受けた事ありません。度々戦争して勝つたので却つて外國から羨まれて居ります。

世界にはたくさん國がありますけれども、何れも、いろ／＼な人が代り／＼して天子様になりますので、我國の様に萬世一系の天皇をいただいている國はどこにもありません。

それで、私等は、天照大神を始め神武天皇以來の代々の天皇の御恩を思い、如何にすれば、自分の務が充分にできるかと云う事を、自らよく考えて見なければなりません。

御勅語に「斯ノ道ハ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ遵守スベキ所」と仰せられてありますから、この御勅語を守れば、それが自分の務であり、御恩報じとなるのであります。毎日々々自分のい

ふ事や行ふ事が、この御勅語にかなつて居るか、どうかといふ事をよく考えて立派な人とならなければなりません。そして、この立派な國をます／＼立派にして日本の國の威光を世界にあげる様に致そうではありませんか。

紀元節に於ける校長誨告 —— 高等學年ヲ中心トセルモノ ——

本日は紀元節であつて、國家の大祝日である。お互に益國運の發展を祈り皇室の隆盛を念ずる次第である。

顧るに、我國は、この建國の年數に於て尤も長き國である。英、獨、佛、米、いづれも我國に及ばないのである。殊に我民族は大和民族の一である。何れの地に至るも、全く言語も風俗も習慣も同一である。外國に於ては到底見る事ができない。

我國は家が集まつて國を成している。殊に皇室は宗家で全民は分家である。故に國家はあげて一族を爲しているのである。故に君は親である。外國では個人が集まつて國をなしている。君は勢の強いものがなつているのである。故に各人の權利の主張が甚しい我國は上下の愛によつてつながつていゝ國である。誠に吾には非常な幸福であると言わねばならない。吾々は幸福であるそれだけその愛に溺れてはならぬ。我國の世界に於ける實狀を自覺し、そこに立脚した自己の責務を自覺し

大に振起して、日本獨特の文明を建設して、その日本文明を世界の上に植えつけねばならぬ。惟るに、我國明治の四十五年間の成長發展は、實に目ざましいものであつた。西洋諸國が四五五年間の時日によつて發展したるすべてをその一割位の年數で經營進展した。之は上天皇の御稜威と共に、維新以來の國民の目標が、一筋に定まつて、上下心を一にして自覺協同一致の活動によつたからである。

神武天皇御即位以來、二千有餘年の間、比較的平穩無事に國內の競争のみにより、何等外國と接觸する處なく過して來たが、維新の五ヶ條の御誓文により、廣く知識を世界に求むるの主義をとつたのである。一たび世界文明に接して始めて自覺したのである、むしろ世界の進歩發展に驚いて半ば恐怖したのである。

そこで、一聲に何はともあれ、歐米人と同等にまでこぎつけて肩の並べられる人間とならねばならぬ。そうしなければ、人間としての生き甲斐がないと、非常なる刺戟によつて徹底したる自覺ができたのであります。痛切に感じたる日本人は、之を實行にあらわしました。之を只一つの目標として進みました。條約改正もした。議會の開設もした。憲法の發布もした。軍備も充實した。學校の奨励もはかつた。日清日露の兩役にも勝つた。この間に物質方面も、精神方面も大體にお

いて歐米を模する事ができる様になつた。國民は、一等國になつたと喜んだ。満足した。最早西洋諸國に學ぶ所なしとしてかく四十餘年間大緊張をしていた氣分は、一時に抜けてしまつて、今や國民はすべて、情氣満々といふべき形であります。

我國は今後世界の指導者であると自任しているが、果してそれだけの價値があるであらうか。日本の文明は、五十年間に非常に進歩した。それは事實である。しかし、それは、文明としての荒建である。輪廓だけである。之からは壁をつけ襖を入れ、疊をしき種々の裝飾をせねばならぬ。大正時代は文明の充實期である。此充實がなければ、到底西洋人のお宮を御案内する事はできない、即文明の指導者たる事はできない。荒木建ての中へは客は來ない。

近時は、國民が一般に目標を忘れていわずまいか。國民全體が物質文明に陶醉して精神文明の自由平等にふわ／＼していわずまいか。眞の精神文明の充實に向つて努力する氣力がぬけてはいわすまいか。大正以來の政治に道徳に思想に、實業に眞の落ちつき、眞の充實といふものが見えぬではないか。之では、二千有餘年の立派な歴史を持つ國を預つた國民として、それで、おめ／＼毎日過す事ができようか。甚残念な事ではないか。かくては、日本の國は世界の試験に落第して泣き面さげねばならぬ時が來はずまいか。

日本は、今決して／＼安心すべき時ではない。茲で休息すべき時ではない。荒建てのまま、うちやつて置くべき時ではない。此文明をあくまで充實せねばならぬ。大正維新は國民總がかりで自覺の上に立つて創造をかさねる時だ。日本独自の文明を創造すべき時だ。思想に於て道徳に於て藝術に於て宗教に於て、全力をあげて創造すべき時だ。そして充實したり我國の文化を世界に示すべき時だ。世界の文明を救うべき時だ。

只二千有餘年の貴い歴史國だと勝ち誇つてはならぬ。この貴い國の價値を發揮すべきだ。ぼんやりしては實の持ちぐされである。今後の日本の使命、深願、念願、自覺せねばならぬ。そして奮闘せなければならぬ。

天長節に於ける校長誨告 —— 中學年ヲ中心トセルモノ ——

本日は、天長節でありまして、日本の國の三大節の一であります。そして天皇陛下のお生れ遊ばしたまことにお目出たい日であります。

陛下は明治十二年八月三十一日にお生れになられました。然るに、とりわけ、人民を大切に思ひ召し下さる。情深いお方であられますので、八月三十一日は、夏のあつい最中であるから、さぞ人民も困るであらうからの事で、本日を以てお祝ひ日とお定め下さつたのであります。

陛下は、明治天皇の第三の皇子にあらせられます。本年×××歳におなり遊ばされます。御名は畏多い事ではありますが嘉仁と申上ます。

明治四十五年七月三十日御父君御崩御になられましたから、其夜直ちに天皇の御位にお即き遊ばされたのであります。

陛下は、お生れつき殊に英明にましまして、しかも御活潑にあらせられます。また一方には一層用心深いお方であらせられました。幼い時には始終おからだがお弱うございましたので、大層心配をいたして居りました。お側のものがよく氣をつけてお育て申上げたのと、御自ら進んで御養生なされました。始終御運動を怠つた事はありません。また、どんなお寒い冬の朝でも、冷水浴を怠られた事はありません。この様にしてお身體をお鍛い遊ばしましたから、後には健康なお身體にならせられました。

又學問が非常にお好きであらせられまして、一日も書物をおはなしにならせられた事はありません幼い時、學習院へお通いの頃には大雨の時にも、大雪の時にも、さらにおいとなく、一年中無缺席であらせられました。それがために御褒美を頂かれた位でありました。又御孝心深くあらせられまして、一週間に二三回は、必ず兩陛下の御機嫌をお伺いにまいられます。常に御自分の御

居間に兩陛下の御寫眞を掲げさせられまして、毎朝拜せられます。又、大層規則正しいお方であらせられまして、毎日午前六時に必ずお目ざめであります。次に、どんな寒い日でも冷水浴をなさいまして、兩陛下の御寫眞を拜しまして、御朝食をすませられます。九時表御所に出御しまして、正午近くまで、政治をみそなわせます。午後も表御座所に政治を御覽遊ばしまた國の東西の事物などを御覽なさいます。又、大庭を散歩あらせられます。御乗馬なさいます時もございます。

この様に貴いお方が、養生、孝行、規律、勤勉などのお手本を示し下さいます。私等は、この御手本を本として、自分のよい處悪い處を考えて、だんだんと好い人間にして行かなければなりません。そして、天皇陛下がいつまでも長いきなされる様にお祈り申上げなければなりません。

天長節に於ける校長誨告 —— 高學年ヲ中心トセルモノ ——
世界の國々の何れを問はず、その國の建國を記念し祝福する。又君主の御誕生を慶賀してゐる、之れは國民としての當然かくなければならぬ義理である。義理と云ふ點に於て凡て世界各國同一である。けれ共、世界の各國、何れも其精神人情に至つては同一と言ふことは言へない。甚複雑なものがある譯である。

國民の側から見れば建國の由來と王家の皇統とが異つてゐる。そこで君と臣との關係外側から見れば一だがその民族主義から言ふと異つてゐる。

又、君主の系統と民族の系統とを異にするため、君と臣とは親と子の關係にはなりたない。その場合止むを得ず、君と臣との形の上に關係を結んでゐるばかりである。君臣主義に於て甚異つたものである。

然るに我國は神武天皇の即位を以て紀元元年とし紀元節として建國を祝福する、その神武天皇以來の皇統の御生命の延長が直に現代の今上陛下である。だから我國は、紀元節とは全く一つの系統の中にあるものである。

全く國家意識と民族意識は凡て一つに歸してしまふのである。

従つて幾、年の今日列聖は仁慈を垂れ給ひ臣民は皇室を中心として皇恩を感謝する結果、紀元節、天長節を慶賀し奉るのである。

永久に皇室の御系統であらせられる陛下。永久に我國の君の御位置にあらせられる陛下、臣民の大家の父にあらせられる陛下、年一年と御年を御加へにならせられることは、我等國民であり臣民であり子である國民全體の歡喜である。

我國の天長節は形の上には於ても、誠に意義あるものであり、人情から言つても美しいものである。かゝる國に於てかゝる天長節を祝福し得る私等も非常に幸福である。今日の佳辰を祝福すると共に君國の爲めに奉仕せねばならない。

今日の我國の狀態を概観すれば輕佻浮華放縱過激と言ふ語を以て掩ふことが出来やう。それがたゞめ陛下には御憂慮遊ばされまして國民精神作興に關する御詔書をお下しになられたのである。

我々臣民は、恐懼せねばならぬことである。我々臣民の務は一日も陛下の御安泰を祈り奉るべきであるに拘らず、かく御心配を掛けることは實に御申譯のないことである。

數年に亘つた世界の戰爭を機會として、世界各國民の人心が非常變化を來して來た。

其原因に色々あるも君主主義の國と民主主義の國との對戰であつて、其結果民主主義の國の側の勝利となつことであらうと思われる。その大勢は直に人の心に民主主義と言ふことが歓迎されることとなつた。

民主主義的思想即デモクラシー思想の本元は、米國で發達した。それが戰爭最中に露國へ侵入した。直にそのまま受け容れた結果過激思想となつて、露國は丸潰れとなつた。その思想が東洋にも及ぼして來て我國もこの影響を受けてやゝ過激やゝ放縱の思想と風習とが起らうとしてゐる。

之は政治の方面にも社會の方面にも農業の方面にも財産の方面にも生活の方面にも婦人の方面にも表はれてゐる今茲で一々言ふ迄もない。

往々學校兒童中にも兒童と言ふことを忘れて、過激の言を弄したり、放縱な行爲をしては、何等耻としてゐない者があるやに聞く。家庭に於ても子としての本分を忘れたるものがあることを往々耳にする。

諸氏は、學校に於ては兒童たる本分家庭に於て子たる本分を辨へ、自由の本義に立つて人格ある實質剛健の活動をなし以て、陛下の御安泰を祈り申さねばならない。

第二 國家的記念日

一、目的

國家的の記念日は、國民として尤も意義ある日であります。この日にこの意義を再生しそれによつて、知的情的に濃厚ならしむると共に、意志の振起を圖らんがためであります。之によつて忠君愛國の精神を養成せんとするものであり、別言すれば、個人我として國家我にまで成長せしめんとするものであります。

二、記念日

海軍記念日

陸軍記念日

旅順開城記念日

戊申詔書下賜記念日

教育勅語下賜記念日

國民精神作興詔書下賜記念日

天皇陛下行啓記念日

攝政宮殿下行啓記念日

乃木大將殉死記念日

その他、學校の特色によつて、國民的修養として適當なものがあれば施設する事がよろしい。しかしあまり頻繁な施設は、却つて効果をそぐ恐がありますから、他の行事と照合して計畫することが大切であります。

三、方法

〔奉讀〕 教育勅語、戊申詔書、國民精神作興詔書下賜記念日には、夫々奉讀する事が必要であります。敬愛の念を表現する上に於て矢張り禮服を着用することがよろしい。兒童への環境をつくる上に於ても大切な事であります。

〔訓話〕 第一その記念日に對する記憶を新しくする必要があります。とかく、兒童と直接の關係なき事柄は比較的忘却し易きものであります。その機會を捉えて理解を深め記憶を新たにする必要があります。之は當にすると、それ以外にするとは、その結果に於てよほど差ができるのであります。それによつて意志に好影響を與へんとするものであります。

次に訓話の際の環境、教師の説話等からして感謝報恩の情操を陶冶し、以て意志の發動を促さんとするものであります。

講話者として、海軍記念日、陸軍記念日、乃木大將殉死記念日、旅順開城記念日などは、適當な人が得られるならば、軍人の方に一場の講演をして貰う事は、兒童も緊張して意義深いものであります。之に反して、兒童に對する講演の經驗なき方に願うと反つて不結果に終る事がありますから、注意せねばならぬ事であります。

〔事業〕 訓話だけで終るのが普通であります。それでは物足らぬ感じがします。當日にふさ

わしい計畫が欲しいものであります。

之が計畫は、學年自治會又は學校自治會によつて、兒童に自發的に決定させるのがよろしいのであります。兒童は夫々考究するものであります。もし、この案が全然不適當であつた場合は教師の方で指揮してやる必要があります。

参考

我が校の實際

海軍記念日、陸軍記念日、旅順開城記念日には、兒童自治會主催のために小運動會を開催するもあり、遠足をなすこともあり、登山、マラソン競走をする等體育としての施設が多いのであります。

勅語、詔書下賜記念日には、音樂會、展覽會、發表會がその施設としてあらわれて來ます。その場合には、主として、その當日に關係ある事項が中心となつて行われます。

天皇陛下、攝政宮殿下行啓記念日には式後遙拜式を行い陛下並に殿下の御宿所にあてられたる千秋間に至り、當時に用いられた諸具を拜觀して當時を追想します。

〔實際事項の考察〕この機會に於て君國に對する、自己の決心を發表することも一の施設で

あります、また、從來自己の行動が君國的になりつゝあるや否の反省を求め之を發表さす事もよい方法であります。何れも、形式に流れない様に留意する事がよろしい。

参考

記念日 —— 長野市鍋屈田小學校 ——

偉人崇高なる人格を敬慕せしめ國民思想を養成するを以て主眼とす其人物に關するものは多くは修身教科書に現れたる人物中比較的偉大なるものを探り猶其他佐久間象山及乃木大將をも加へたり

靖國神社

五月五日

參拜及校庭運動會

楠正成公

五月二十五日

訓話

海軍記念日

五月二十七日

訓話及登山

地久節

六月二十五日

訓話

加藤清正公

六月二十七日

訓話

元寇

七月一日

訓話及夜行軍

佐久間象山先生

七月十一日

訓話

中江藤樹先生	八月廿五日	訓話
乃木大將	九月十三日	訓話
豊臣秀吉公	九月十八日	訓話
國權制定	十月三日	訓話
戊申詔書	十月十三日	奉讀訓話
二官尊徳先生	十月二十日	訓話
教育勅語	十月三十日	奉讀訓話
赤穂義士	十二月十四日	訓話
フランクリン	一月十七日	訓話
リンコルン	三月二日	訓話
ワシントン	二月廿二日	訓話
海軍記念日	三月十日	訓話及登山

訓話は教材に關するものは兒童になさしめ後、校長訓話をなす。猶當日は訓話後遠足又は登山をなさしむ。之れその人其事件を強く記念すると共に心身の鍛練をなさしめんが爲なり。例へば

海軍記念日、飯綱原に遠足聯合體操、飯綱登山(五年以上)

元寇記念日、夜行軍を行ふ(尋五以上)

午後學校へ集合、一場の訓話の後、夕飯携帶飯綱原に行き日暮をまちて歸途に就く、四十二年以來之を行ひ好結果を得

陸軍記念日、一場の訓話をなし後朝日山に登山高等科は晴雨に拘らず登山す。

第三 宮城遙拜

一、目的

我が皇室の天地と共に、ます／＼榮えまさん事を祈念し、我が君主の御恩恵を感謝し、自己の發奮努力を期するためであります。

既に述べた如く、我國民は忠烈の子孫であり、我君また父祖としての御恵を垂れさせられるのであります。吾々は、茲に君主としての法制上の君よりも父としての君を常に思い浮ぶのであります。我が祖先は、この父としての君を崇敬し奉つたのであります。我等は列聖の深厚なる御恩澤を單なる権力服従のみの關係に非なる事を自覺し、服從敬愛の誠をいたす事、それがまた祖先の遺志を繼

ぐものである事を致し、自己の本務を遂行したのであります。

此機會をつくる事によつて、その意識をますます濃厚にし、兒童の自我をして、國家我、君主我に擴充成長せしめ、日本の生活すべてが、此自我の泉から湧出して行く様に訓練づけたいのであります。

二、陶冶の方面

この點に就ても前に述べました様に訓育と言へば本體が意志の習慣をつくるにありますが、訓育全部が、直接意志の發動によるものとばかりはまいません。中には知の開發によつて意志の發動を促す場合もありますし、また、感情を陶冶して、而して、意志の發動を促進する場合もある譯であります。勿論、知の開發により、情の陶冶によると言つても、意志の發動を促進するに適する様施設するのでありますから、知を目的としての施設、情を目的としての施設と異なるものがありますし、その施設によつて比較的意志を働かす場合が多い事は言うまでもありません。

しかし、矢張り、その主たるものは、感情陶冶であつて、その感情陶冶によつて、意志の發動の促進をはかること、一方から言へば、個我をして國家我君主我にまで擴大せしめるのであります。この點は教師の方によく自覺していなければ、遙拜すること、その事が忠君愛國の徳目實現だと考えて

は大變であります。そこに自ら施設なり教師の態度が變つて來なければならぬ譯であります。

三、精神陶冶と環境

教育は、すべての環境を無視する譯にはいきません。環境がその情の啓發啓培に大なる關係のある事は申す迄ありませんが、就中情操陶冶に於て、尤も此點に留意して施設せなければなりません。之を無視しては、全く教育的價值がないと言つてもよい位であります。殊に、訓育としての情操陶冶は、所謂學に感じさすと言ふのに止まる譯ではなく——勿論、感じた以上は量の多小質の小ではあります。——「一層強く感ずる事によつて」そこに意志の發動の傾向の習慣をはかるにるのであります。その習慣によつて、換言すれば、そこに自我が擴充されて、活動毎にそれが顯現して來るのであります。だから、訓育上の精神陶冶に於ては、一層此點に留意して施設すべきであります。

第一、教師の問題であります。先づ教師自身が、その様な強き感情を持つていて、それが充分に表現ができなければなりません。兒童は、その表現された感情に共鳴して、一層強き感情が生れます。尤もよい事は、教師が兒童の前で、又兒童と共に忠義を實現して見せる事であります。しかしそれができなくとも間接直觀し得る環境の中に置く時に、其處に感情は、一層高潮されます。教師

に、何等の情操を持たないで、假りに表面的な偽善的な表現をして見ても其處には何等の共鳴は起らない。我等は我皇室我國家からの御恩澤に對して十二分の感激を持つていなければならぬのであります。そうしたときに、よりよき訓育上の價值を發揮することができるのであります。なほ進んでは、教師自身が忠君愛國の實現者でなければなりません。ただ濃厚なる感情の持主だけでは、ホントに兒童の意志を動かす事はできません。凡ての徳目が、この點をぬきにする事はできないのであります。殊に本項目に於ては、國民道德の大本でありますし、また、兒童からは或意味に於てかけ離れたものでありますから、他の徳目に比し、教師の人格の力をかゝる事が多大であるからであります。

次に一日中の時期であります。此施設として情操陶冶に尤も適する時季とは周圍が極めて靜寂で尤も落ちつきのある環境を得やすき時を選ばなければなりません。兒童から言へば、スツかり前日來の惡の感情は洗い去られ純なる感情は人心に喰い入り表面的にはいまだ何等の感情の現れが見えない時、それが尤も適當であります。この意味に於て日の出時が尤も適當であります。此時こそ尤も靜寂の時であり尤も希望に富んだ象徴の時であります。所謂「靜中の動」と言ふ時であります。次は場所であります。之も人馬織るが如き塵街の中では、適當とは申されません。尤も清淨な

境地で、周圍から宗教心とも言ふべきものを投げかけて呉れる様な處、自ら襟を正すと言ふ場處、日の出に面しうる場所、小高き場所で常に往來している場所よりも超越したと言ふ感じのする處を擇びたいのであります。

東方が開放された小高い處に位置しているか、又は二階建三階建の上に露臺がある學校であれば尤も便利であります。

之等の環境の中に置かれたとき、始めて、周圍からの暗示によつて一層の情操的自我は成長する事ができるのであります。此施設に於て、先づ、此環境の選擇に努力せなければ不成效に終ります

四、實行回数並に期日

意志の習慣は、たび重るほど強固になつて價值の多いものでありますが、感情の陶冶は、なるべく強くなるべく短かく、なるべく回数すくなきを示します。しかし、その施設がその理想的の要求に副う譯でもありませんし、また一方は比較的持續性の短かき兒童でありますから、あまりに回数がすくなくとも、却つて、その効果をすくなくする譯であります。又、あまり多くても他の行事との關係もありますので、却つて煩雜なるために實行の困難と、勞に伴う効とが得られなくなります。そこで、できるなれば毎月一回位が尤も適當であります。他の行事との關係上、毎月一回が煩雜

に過ぎる様であれば、二ヶ月に一回でもよかろうと思います。それは學校の個性に立つて、而かも該施設の本質を發揮し得る程度に於て決定すべきものであります。毎月一回とするならば、更新の氣分に富む日即毎月一日若くは十五日が尤も適當であります。

五、方 法

〔施設の始期〕 この事項は、尤も精神的のものであります。ある點まで形式からその成長の促進が可能ではありますが、それとも、すべての兒童が精神的の傾向が見えかけなければ、之を實行する事は、所謂形式倒れ、施設倒れとなります。兒童は勿論、先づ教師が精神的とならなければなりません。單に、腰掛的、パニックの人々の集合の内は實行は駄目であります。眞に君を思い國を憂い兒童の現在將來を案する教師——兒童の自我の成長を樂む教師の場合のとき始めて始むべきであります。勿論、理想的の時期は永久に來ないでしょう。暗々裡の内に努力してそれがいつとなしに現れて大勢が定まつたら實行してよいのであります。

〔参加學年〕 之は遙拜する場所の關係なり、兒童の通學距離によつて一概に定める事はできません。たゞ早起をしようと云ふ事だけから考えると、まづ尋常五學年位からを尤も適當と考えます。もし學校に於て遙拜をするのならば三學年位からでも實行ができる經驗を持つて居ります。低學年

は、身體の強弱と關係もあり、また一般的に睡眠時間も多くなければならぬ關係もありますので、鍛練的のことはこの事項に限らず、ある點まで斟酌を要する事は、餘程注意すべきであります。

〔参加者募集〕 學校行事としていたすのでありますから、なるべく多數の人々を要求しますしかし之は學校授業時間以外の事でありますので、できるだけは本人の自覺にまつがよいと思ひますから、無理に強いる事はよろしくありません。施設の最初は、希望者を募つてやる方がよろしい大勢が傾いて來たならばある學年から全校あげて行つてもよいのであります。之はよほど意志の鍛練強弱に關係するものでありますから、一面、意志の鼓舞についても相當の暗示と刺戟が必要であります。

〔早起〕 遙拜を行う場所と時季によつて朝起の時間が變つて來ます。ともかくも、いつもより早く起きて學校へ集合する様にしたいたすものであります。之は別に目的を持たして質實剛健の施設として、早起會を催してもよいのであります。私は別に朝起會を普通の時にしないで夏休中にしたい考であります。之は別に目的を持つて居りますから、別の項目で申上ます。茲では、特に朝早く起きて定められたる時間に集合する、自己の低級なる自我のすべてを奉仕する處に忠君愛國の價値を認めるものであります。自分の苦しい——自然性的に——立場を犠牲にしてより以上の自我に服

従する一つの訓練であります。

〔集合〕 一旦校庭に集合したる上、その趣旨を校長から簡単に話して出發するのがよろしい。

〔途中〕 もし人家稠密の處を通過して行くのならば、尤も靜肅を要するのであります。朝まだ早い時でありますから、他の家々の眼りをさましてはなりません。勿論考え方によれば學校以外の方々に早起の習慣を養う一の方法ともなるのであります。私は嘗つて朝起會をいたして、町内の父兄達から喜ばれた事の體驗も持つて居ります。併し、之は目的以外の事でありますから、中には反對する方々もたしかにある筈でありますので、なるべ多數の人に迷惑をかけぬ様いたしたいのであります。今一つは默念の内に一層皇室の御高恩を感謝し自己の決心を促す手段ともなります。

〔行事〕 所定の場所に於て、東方宮城に向つて整列します。整頓に尤も注意を要します。教師は兒童の整列隊形の兩側へ整頓します。誓文朗讀者は整列隊形の前面の位置につきます。敬禮について全員最敬禮のうちに兒童總代が誓文を朗讀します。この間全員は尤も敬虔の態度に立つて、感極まるの状態にならなければなりません。自我の成長にまつより外しかたなく、強迫したのでは何等の効果がありません。

誓終れば元の姿勢に戻ります。次に君が代を二唱します。終つて退場します。退場についてもよくその精神を失はぬ様いたしたいのであります。よくある事で何か、一事項が終れば、パツと騒ぎたがるものであります。巧妙な徹底したる唱歌教授を受けての、ち解散した後になほ足拍子とつて、すべての兒童が口ずさみつゝ我を忘れて教室を出でて廊下を歩んでいるのと同様に凡てのことがありたいものだと思います。

歸途の注意は、往行の時と同様であります。そしてそれが授業に差支えぬ時間によつてするのがよろしいと思ひます。

〔感想發表〕 時々感想を書かすことがよろしい。之は自己内省の一つの方法であります。また指導する上に於て大に参考になります。感想發表は時に誇張したり偽作したりしますから、この點は特に誠めなければならぬのであります。

従來の計畫は、とかく、あと始末ができない方法になつて居ります。すべての施設は、すべて兒童の自我の發動にまつと言ふことを根本理想として施設し助成して行かぬばなりません。自覺反省は、この意味に於て、凡ての場合を通じて尤も緊要であります。所感發表は之が機會を與えるものであります。

六、我が校の實際

毎月一日、男生全部約九百名毎月十五日女生全部約六百名の集團によつて行ひます。

前日及當日に嚴重なる服装検査を行います。午前六時學校に集合同時刻出發します。女子は二十分間遅く集合させます。距離の關係や、女子の早出は一方に色々なる差支があるからであります。男子は眉山公園中腹神武天皇銅像前、女子は徳島公園城山中腹舊城東二の丸址で行ひます。何れも約二十分間で到着します。

眉山公園は市の西南に聳へて、海拔一千尺の高さの山の中腹以下にあります。「眉のごと雲井に見ゆる阿波の山にかけて漕ぐ船とまり知らずも」とゆふ萬葉の古歌から取つてかく呼ばるゝに至つたものであるといひます。明治の初年までは、満山蔚林に掩はれて鹿の鳴く音が聞かれたと言ひ傳へて居ります。中腹に新道路を開いて四國八十八ヶ所、西國三十三番の靈場をつくられてあります神武天皇銅像建設地は、眉山の西端、大瀧山と稱する所にあります。

寺院の數十棟建てられた寺町をぬけて、大瀧山山麓の春日神社前を通り薬師堂の左側より數千の石段を登り三重の塔を経て到着する様になつて居ります。茲には、明治二十七八年の役に従軍したる阿波國健兒のたてた神武天皇銅像があります。三方櫻樹に包まれ、東西は、眼下に徳島市全景を見下し遠く紀淡海峡をへだて、紀淡の連山を望む所であつて、遙拜所として尤もよき環境であります。

す。

舊城山第二の丸城址は、徳島市街の中央にある面積八町二反、海拔六十一米九の獨立山丘であります。周囲は鬱蒼たる原始森に掩はれて、晝なほくらき城山の上腹にあります。すこしのれば頂上に招魂碑があります。そこは舊城本丸で維新以來の戦病死者公職に殉したる人々の英魂を合祀してあります。東二の丸城址の廣場は眉山、勢見、津田山を右に見徳島市の東南部の大半を見下し、東面は、海をへだて、淡路紀伊を手取る如く見ることが出来ます。眼下には明治四十一年、

今上陛下

大正十一年

攝政宮殿下

行啓の際の御宿泊所に充てたる千秋閣があります。之亦、遙拜所として好適の環境をそなへて居ります。

東面して朝會整列の如く整列し終れば、指揮者の脱帽と共に遙拜敬禮します。一同最敬禮の裡に兒童總代左の誓文を朗讀します。

吾等一同